

2012 年度未来先導基金公募プログラム

2012 年度 「庄内セミナー」報告書

CONTENTS

はじめに 2

「庄内セミナー」の概要 3

参加者レポート..... 7

資料編..... 61

はじめに——庄内セミナーであらためて問う、生と死

教養研究センター所長
不破有理（経済学部教授）

夏の終わりに日吉キャンパスから飛び出して、庄内で学ぶセミナーも4回目を迎えました。2008年に鶴岡セミナーとして出発したこの取り組みですが、今回の庄内セミナーは改めて、生命を問う試みとなりました。東日本大震災後を生きる学生にとって、今回のテーマ「庄内に学ぶ生命——いま敢えて生と死を考える」は予想以上に心に響くテーマであったようです。事前提出を求めた応募動機には、それぞれの学生諸君が、あらためて生と死への問いをより切実に考えている様子が看取できました。

セミナーは秋の峰入りの最終日である八朔祭に始まり、最先端の生命科学の研究を推進している慶應義塾先端生命科学研究所の見学に終わりました。八朔祭とは、修験道における擬死体験からの生還を示す区切りの祭礼です。初日の篝火に照らされる幽玄な羽黒の森は、3日目の修験体験への序章となりました。白装束の山伏の衣装を身につけること自体が現代の学生にとっては一大事。袴の帯をしめ、脚絆の紐を結ぶことがむずかしいのです。苦勞しつつ衣装を調べ、羽黒の参道を山伏姿で黙々と歩く学生の姿を最後尾から眺めると、学生は白く連なり、地下足袋が石段を踏む音は均一になり、羽黒という母体から産み出されるひとつの生命体と化すような感覚を得ました。山道は、生まれ変わるための産道にもなり、深い森林に包まれた空間は、滝行で冷えた身体を温める母体にもなったのです。初日と最終日に記した「生命」を出発点に自由に発想するマインドマップは枝葉を広げ、自分と向き合い、仲間と語る機会となりました。通常とは異なるキャンパスに身を置くことによって、学生はよりのびやかに、初めて出会った学生、大学院生、社会人、そして教員と熱く語り合うことができました。最終日に鶴岡市副市長山本益生氏をお迎えした懇親会で、学生たちがそれぞれの思いを豊かなことばで語ってくれました。学生の表情は実に雄弁に、このセミナーの充実感を語っていました。喜々とした生命感を宿して家路につく学生たちが「ありがとうございました！」と声をかけてくれたのは、セミナーを主催した者として安堵と幸福感に満たされた瞬間でした。

最後になりましたが、いつも温かく迎えてくださる庄内・鶴岡市のみなさま、修験体験を導いてくださった太田一氏、講師をつとめてくださった三人の方々、庄内藩武士の心意気を語ってくださった酒井忠久氏（元庄内藩主酒井家18代当主・致道博物館館長）、織物をつくるために切り捨てられる糸くずへも思いを致す大切さを語ってくださった東山昭子氏（鶴岡総合研究所研究顧問）、そして精神神経学の立場から即身仏を問い、身体と魂が融合した存在であることを示された加藤元一郎先生（慶應義塾大学医学部）、そして学生の姿を貴重な映像に残してくださった慶應義塾出版会の小磯勝人氏、ロジスティックスを支えてくださる教養研究センターの日水邦昭氏を初めとするスタッフのみなさまに心より御礼申し上げます。

2012 年度「庄内セミナー」報告書

「庄内セミナー」の概要

第3回庄内セミナーについて

羽田 功（プロジェクトリーダー／経済学部教授）

1. 趣旨・目的

教養研究センターが主催する今年度の庄内セミナーは2012年度慶應義塾未来先導基金公募プログラムとして実施されました。「庄内セミナー」としては2年ぶり3回目の実施です（2008年度には下記と同様の趣旨・目的で「鶴岡セミナー」を開催しています）。

山形県鶴岡市にある慶應義塾鶴岡タウンキャンパス（TTCK）を拠点とするこのセミナーの目的は「教養力」すなわち「自立・自律力」と「社交力」の涵養を通した「教養」の基礎体力作りにあります。今回は、過去の実績を踏まえ、かつ内容・形式の見直しを行った上で、以下のような趣旨・目的を掲げました。

- ①鶴岡市、TTCKを拠点として新たな体験・体感型の「学びの場」を創出する。
- ②鳥海山・出羽三山、庄内平野、日本海に囲まれ、歴史・文化・自然・人の織りなす多彩な「生命」に恵まれた庄内をフィールドとして多角的に「生命」について体験・体感する。
- ③学生・大学院生・社会人の参加を募り、それぞれの参加者が忙しい日常から離れて、じっくりと「生命」について考え、地元との交流なども図りつつ、対話と議論を通してコミュニケーション力を高め合う。

2. テーマ

今年度のテーマは、「庄内に学ぶ生命—いま敢えて生と死を考える」としました。

東日本大震災・福島原発事故の惨禍はいまなお多くの地域、多くの人々に深い傷を残したまま、思うような復旧・復興の将来像が描けない状態にあります。しかし、他方ではこの天災・事故が、多くの日本人が足元に潜在する死の影に目を向け、あらためて自らの生について、また死について考え直す

きっかけとなりました。

庄内セミナーではこれまでも「生命」に焦点を当てたさまざまなプログラムを展開してきましたが、今回は原点に返るつもりで正面から「生命」について考える場を設けることとしました。つまり、さまざまな観点から「生命」について、私たちの「死生観」について考えてみようと思ったわけです。「敢えて」という言葉には、今回の震災や事故を見据えつつ、それを越えてより深く「生命」に向き合おうという意味が込められています。

3. セミナーの概要

セミナーは8月31日～9月3日までの3泊4日で開催しました。このセミナーには学生37人（大学院生を含む）と社会人4人の計41人が参加しました。

初日はTTCKで7班に分かれて「生命」をキーワードに、思考・発想法の一つである「マインドマップ」を作成しました。その日の夜は羽黒山山頂で行われた八朔祭を見学しました。八朔祭は秋峰入中の山伏たちによる稲穂の生育を祈願する火祭りで夜空を焦がす壮大なお祭りでした。2日目は法連寺と大日坊の即身仏を拝観し、その後松が岡開墾場を経て鶴岡市内に戻り、致道博物館などの施設を見学しました。また、夜は加藤元一郎先生（慶應義塾大学医学部精神神経科）による「生と死を考える」をテーマとした講義と参加者との活発な質疑応答が行われました。3日目は羽黒山で山伏修験体験を行いました。白装束に着替え、山伏修行体験塾の太田塾長の講話をお聞きした後、滝行、山歩き、床固め（座禅）、南蛮いぶし、火渡りで「擬死再生」の一端に触れる体験をしました。その夜は、酒井忠久氏（元庄内藩主酒井家18代当主・致道博物館館長）と東山昭子氏（鶴岡総合研究所研究顧問）による「庄内文化論」をテーマに、庄内武士の死生観や綴錦



マインドマップ作成



対話と議論

2012 年度庄内セミナー・プログラム		
〈事前準備〉		
7 月 31 日	参加者に対する事前説明会	日吉
8 月 25 日	事前課題（「自分」について 600 字程度のレポート）提出日	
〈合宿セミナー〉		
8 月 31 日	[セッション1] アイスブレイク・マインドマップ(1) 作成・グループ討議	TTCK
	[セッション2] グループ討議（事前課題について）	いこいの村庄内
9 月 1 日	[セッション3] 羽黒修験・秋の峰入「八朔祭」見学	羽黒山
	[セッション4] 即見仏拝観	注連寺・大日坊
	[セッション5] 鶴岡を知る（自由行動）	松が岡開墾場・鶴岡市内
	[セッション6] 「生と死を考える」 講師：加藤元一郎氏（慶應大学医学部精神神経科）	いこいの村庄内
9 月 2 日	[セッション7] 山伏修行体験 先達：太田一氏・早坂一広氏（山伏修行体験塾）	いでは文化記念会館・ 羽黒山
	[セッション8] 「庄内文化論－歴史と現在」 講師：酒井忠久氏（致道博物館館長） 講師：東山昭子氏（鶴岡総合研究所研究顧問）	いこいの村庄内
9 月 3 日	[セッション9] 慶應義塾大学先端生命科学研究所ラボ見学	先端研ラボ
	[セッション10] まとめ：マインドマップ(2) 作成とグループ討議	
〈まとめ〉		
9 月 30 日	事後課題（「生命」について 2000 字程度のレポート）提出日	
10 月末	報告書（レポート集）発行〔予定〕	
〈関連企画〉		
11 月 5 ～ 17 日	「慶應義塾と庄内」（セミナー写真展など）	日吉図書館
	庄内フェア（庄内関連書籍・物産・庄内ランチ販売）	慶應大学生協（日吉）



山伏体験（滝行）



全員集合（最終日）

織作家・遠藤虚籟の生命観に焦点を当てた講演とこれまた活発な質疑応答が行われました。

最終日は TTCK にほど近い慶應義塾大学先端生命科学研究所で展開されている、最先端のバイオテクノロジーを用いた研究成果や施設を見学しました。その後、各自で初日に作成したマインドマップを見直し、変化したことを確認しました。また昼食を兼ねた懇親会では、山本益生鶴岡市副市長を囲んでセミナーに参加した感想などを披露して解散となりました（なお、スケジュールの詳細は「セミナー・プログラム」をご覧ください）。

合宿セミナー終了後には、「生命」をテーマとする事後課題（レポート）の作成・提出、本報告書の発行を行いました。さらに、セミナー関連企画として日吉図書館との共催で展示企画「慶應義塾と庄内」（セミナー写真展、慶應義塾と庄内の関係書籍・資料などで紹介する「慶應義塾と庄内」展など）、大学生協との共催で「庄内フェア」（庄内物産品販売・庄内関連書籍の展示販売・庄内ランチの提供）（共に 11 月 5 日～17 日）を実施します。

2012 年度「庄内セミナー」報告書

参加者レポート

2012 年度の「庄内セミナー」参加者に、次のような事後課題が与えられました。本稿は、提出されたレポートを参加者の 50 音順に掲載したものです。

〈事後課題〉

1. テーマ：「生命」を考える
庄内セミナーを通じて体感・体験したこと、考えたこと、話し合ったことなどを基礎として、各自の「生命観」（「死生観」「身体観」などでもかまいません）について述べてください。
2. 字数：2,000 字程度（これを超えてもかまいません）
3. 締切：2012 年 9 月 30 日（日）

*本セミナーでは、「自分について考える」を事前課題のテーマとして課しました（600 字程度）。以下のレポートには、この事前課題を前提もしくは発展させた内容のものも含まれています。ただし、紙面の都合上、事前課題そのものの掲載は見合わせました。

「生命」を考える

経済学部1年 青木 佳祐

今回のセミナーにおいて私たちははじめに生命についてのマインドマップを作成した。マインドマップとは一つの中心とする言葉を決めて、その言葉から連想されるものをどんどんと伸ばしていくことによって作られる地図だ。私は生命とは哲学に深く関係しているものと思い、マインドマップのほとんどに観念的な言葉（喜び・感情など）を中心に書き込んだ。各々のマインドマップを書いた後に互いに見せ合う時間が設けられた。みんなは自分と比べると自分以上に身体的な言葉（痛み・病気など）や社会的な言葉（友情・家族など）を書いている人が多かった。私は今までの都会生活で身体が生命と直結していると感じるような経験をあまりしていなかった。ほかの人に比べて生命について具体的なイメージを持てなかったのかと感じた。そこで私は今回のセミナーで生命と身体との密接な関係を再確認したいと思うようになった。実際セミナーの活動が始まってみると、思っていた以上の収穫を得ることができた。

2日目に私たちは注連寺と大日坊という寺へ行き、即身仏というものを見ることができた。即身仏とは人々を救うため、主に身分の低い僧が徐々に何も食べなくなるようにしてその身から油分をぬいて、後世にまで伝わる天然のミイラとなろうという試みである。先述した2つの寺には即身仏がそれぞれ一人（もとは人間であるため）ずつ収納されていた。実際に即身仏を見てみるともはやそこには何の命も宿っていないはずの朽ち果てた肉体から、なぜか今の私たちよりもはるかに充実した生気を感じることができたような気がしたのだ。身体は生命の根源的な部分のつながっているのではないかと本能的に理解できた瞬間であった。

3日目には修験者体験といって私たちも白装束に身を浸し、苦行をするというものであった。初めに滝に打たれる修行であったが、非常につらかった。このとき私は生命の終わりを感じたといってもいいくらいにつらかった。しかしそう感じる一方で私は自然と家族や友人のことを考えていた。生命は根源的に孤独であると考えていて、マインドマップにも社会的な言葉を一つも書かなかった私にとっては非常に新鮮で

あった。生命というものは他者と深くつながっているのだと理解させられた。

さらに苦しいときに家族や友達のことを考えると同時に私は思わず神に頼っていた。本当につらいときには人間の意志など届くはずもない圧倒的な高次元の存在を仮定してそれに願いを託してしまうのであろうか。今まで無宗教であった私は神に祈る人々の心理がわからなかったが少しその動機というものを理解した気がする。江戸時代などは飢饉が頻繁に起きて今の私たちの生活よりもずっと大変であったのであろう。そのようなときに極楽浄土をとく仏教が台頭すれば人々がそれにすがりつくのも至極当然であろう。人間が死んだらどうなるかはだれもわからないが、そんな不安定なときに人間にとって都合のいい死後の世界を仮定してそれを人々に普及することもまた人間の生命の根本的なところに通じているのだらうと思った。だからこその世界では宗教が非常にひろまっているのであろう。そして苦行が終わった後の夕食は本当においしく感じて人のみならずこの夕食のために犠牲になってくれた多くの動植物とも私の命は深い関係であるということに思い至り感謝の念がとまらなかった。

また今回のセミナーでは非常に優秀な講師たちのお話を聞くことができた。即身仏のより詳しい事情や庄内地方の人々の生き方を教えてもらいためになった。4日目にはTTCKの先端生命科学研究所を見学させてもらうことができた。職員の話をしていて現在生命は、科学的な部分で研究されているということを知り、科学と生命も深い関係にあることを確認した。最終日には再びマインドマップを作成する機会があったがその時私は、マインドマップに身体的な部分のつながりと社会的な部分のつながりを追加することにした。

私は今回のセミナーを通して身体自身に宿っているなにか神秘的なものを学んだ。これからは規則正しい生活を心がけて大事な身体を自らの強い意志で積極的に守っていこうと思う。また人間は根源的に他者と関わらなければ生きていけないということも非常に実感したので、これからはこれまで以上に人と積極的にかかわって生きていこうと思った。

庄内セミナーを終えて

経済学部2年 青柳 逸子

日吉キャンパスに立て掛けられていた黄色い看板一庄内セミナーの募集は通るたびに気にかけていました。そんな中、なんとなくそのまま過ごしてしまいそうだった時、同じサークルの友達に声を掛けられて参加することにしました。3泊4日、新しい環境で新しい仲間と新しい体験をした毎日は、充実して輝いたものでした。

自分の中でもっとも大きな変化だと感じるころは、“感謝”の念が潜在意識の中に強く生まれたことです。健康であること、満ち足りた環境に身を置けていること、そして、今ここに生きていること。いままで、自分の置かれた環境を当たり前とし、時には不満を持つこともありましたが、しかし、山伏体験を通して、いかに普段当たり前と思っている身の回りの環境が、恵まれていて、感謝すべきものなのか、というのを実感しました。寒さが苦手な私にとって滝打ちの修行は凍えるかと思いました。最後のいぶしの修行は本当に命の危険を感じました。より辛い修行が残っているとのことでしたが、今回の一連の修行を終え、きれいな空気をはじめ、今まで見過ごしてしまってきた周りの環境が、どれほどありがたいものなのかに気づき、自然と感謝の念を持つようになりました。

そして、庄内セミナーでは、さまざまな意見を聞く機会がありました。中でも、私の凝り固まった観念を壊し、視野を広げてくれたもののなかで、私の班で出た宗教観の話があります。その意見とは、人生には楽しいことだけでなく、必ず辛いときが訪れ、それを乗り越えるとき人は頼るものを求める、そしてそれこそが宗教である、というものです。私は今まで、宗教、という存在を敬遠し、なんとなく偏見を持っていました。それが、この意見を聞き、宗教という存在が、ずっと自分の中で理解でき、共感できるものとなり、心の奥底で止めていたなにかが外れたように感じました。宗教とは、我々が壁に直面した時に、乗り越えるのを助けてくれ、そして精神的に高めてくれるものなのではないか、というプラスの考えを持てるようになりました。そして、人類共通の大きな源といえる、奥深い宗教を、もっと知りたい、と強く惹かれました。

講義やお寺の和尚さん方のお話にも、たくさんの気づきがありました。先祖供養、山形の歴史、それから最先端の技術について、さまざまな観点から生命とは何か、ということについてお話を聞くことができました。特に心に響いたのは糸塚のお話です。切り捨てられる命、他を支えていながら知られざる命がある。しかし、どんな命も尊いものであり、存在

するすべての物には命が宿っていて、意味を持つ。ゆえに、常に相手の命、心を思いやる真心と愛を持つことが大切であること、というものでした。また、落日落陽ということばも印象に残っています。これは、今日落ちていく日は、それで終わるものではなく、また明日、上ってくる日でもある、という言葉です。私は、この言葉を聞いて、どんな些細なことも次の何かにつながっているのだから、おろそかに考えてはいけない、ということを改めて気づかされました。

そして落日落陽の精神は糸塚の精神とも関係しているように感じました。われわれの目に映るものは、物事のほんの一部に過ぎず、目に出来るものの背景にはさまざまな事象が絡まりあって、目に見えない犠牲の上に成り立っているのです。その複雑なものごとがぶつかり合っている中で、我々が存在していることは奇跡に近いことであり、日常の中にある、当たり前にしがちなさまざまな出来事も、我々の見知らぬところでつながって起こっているのではないのでしょうか。無駄なことや、適当にやり過ぎて良いことなどは一つもなく、どんな些細なことでも真心と愛をもって接するべきなのだ、とハッと背筋を正されました。

今回、庄内セミナーは、なんとなく過ぎていく毎日に疑問の気持ちがたまっていた私に、欠けていたものを気づかせてくれました。今、ここにあるということ。それは、決して当たり前ではなく、奇跡のぶつかり合いの賜物なのです。そのことに感謝する、その気持ちを忘れてはいけないのだ、と実感しました。

庄内セミナーの事前課題の時に、改めて生命とは何か、について考え、手探りでブレインストーミングをし、皆の意見を聞き、さまざまな経験をして、生命についてさまざまな側面から考えました。そしてセミナーを終えた今、私の中での生命に対する考え方は、奇跡、という言葉が最も適切だと思います。便利で、情報にあふれ、スピードが求められる現代社会では埋もれがちですが、大切なことは今も昔も変わっておらず、すべてのものには命があり、命あるものすべて尊いということ。そして、命あることは奇跡の重なりあいであること。よりよい未来のために、皆がこのことを大切に心にとめておく必要があるのではないのでしょうか。

短い間でしたが、このセミナーで出会った皆様には本当に世話になりました。そして、改めて、このように楽しむだけでなく、深く語り合える仲間に出会えたこと、出会う機会を設けてくださった先生方に感謝します。ほんとうにありがとうございました。

即身仏を見て考えたこと

法学部（法律）1年 石川 龍

生とは、死とは何だろうか。

私はずっと、死はすなわち、「無」になること、「何も無くなる」ことだと思っていた。死んだら、真っ暗で、何も見えず、何も聞こえず、何も感じず、自分とは何かも考えられない、文字通り何も無い、完璧な「無」になるのだと。死んだ後は何も無い「恐怖」であり、死は恐怖であるからこそ、死から逃れて生きること必死になれるのだと思っていた。とはいえ自分はそこまで必死で生きていた訳でも無かったので、「死ぬのが嫌だから仕方なく生きている」と言うような感覚の方が大きかったのだが。いずれにせよ、自分も死の直前は、さぞかし恐怖に打ち震え、恐れ慄き、醜く情けなく朽ち果てていくものだろうとぼんやりと考えていた。

庄内で、即身仏に出会った。

ほぼ骸骨に皮がひっついたようなそれに、感覚的、直感的に「生」を感じた訳では無かった。肉付きはお世辞にも良い訳では無いし、目は閉じている訳では無く、虚ろな眼窩がぼっかりと二つ穴を空けているだけだし、歯は露出しているし、背骨は力なく曲がっているし、腐らないように漆を黒々と塗り込められてテカテカ光っているし、とても「今にも動き出しそう」「これは生きているのだ」と感じられる代物では無い。もっとも、それは自分の今までの「生」の実感が、その程度でしか無かったということなのでもあるが。

だが、色々と自分なりに即身仏になった一世行人について思いを巡らせてみると、やはり様相は違ってくる。

即身仏とは、修行し、肉身のままで大日如来と一致し、仏になることであると定義される。庄内の神仏習合、中道思想において、仏は浄土にいる。浄土とはすなわち現世そのものであり、それはキリスト教における天国や、阿弥陀如来のおわす極楽とは違うものらしい。つまり、この思想において、即身仏になった一世行人は、仏と一致していると考えた限り、浄土、すなわち我々のいる「現世」に未だ「生きている」と、抽象的に考えても良いのだ。

一世行人の生きた時代は、大変な飢饉や悪病が庄内を襲い、人が人を食らうような凄惨な時代だったという。もしそんな、血塗られたこの世の地獄が現代を覆った時、私たちは果たしてどうするだろう？一番簡単なのは、自分で自分を殺してしまうことだ。死ねば、地獄も天国も無い。むしろ、生きている方がずっと地獄だ。死は怖い、それにも勝る恐怖が現世を覆っているのであれば、より楽な方を選ぶ…。それが、宗教を持たず、死に対する心構えを持たない現代人の多くが取るのである選択ではないだろうか。

当時の民衆はそこまで自殺を優先的に考えはしなかったか

も知れない。だが、民衆全員で幸福を享受する為に生きることではできなかったであろう。つまり、誰もが自分が生きるのに必死で、他人の事を思いやる余裕など持つことができなかったに違いない。

一世行人達は、そんな民衆の痛みを分かち合い、受け止め、且つ「生きて」それを救おうとした。彼らはただ、苦しみ喘ぐ民衆を、上から経を唱えるだけで救おうとしたのではない。実際に民衆と同じ飢餓の苦しみを味わい、その痛みを分かち合い、自らがこの暗黒の時代に目を背けず、仏となつてずっと生きて見つめ続け、救済することを願いながら、即身仏になっていった。

先に述べたような「自殺」は、言ってみればただの苦しさからの「逃げ」だ。死ぬまでに苦勞することは無い。この現代、勿論首を吊るのもありだし、睡眠薬もあるし、それに練炭や硫化水素も加えればほぼ確実に、短時間で死ぬことができる。腹を切ったり喉を突いたりするのは痛そうだし、血を見るのも怖い。ましてや誰か、山に籠って穀物を断ち、漆を飲み、骨と皮ばかりになりながら、長い時間を掛けてゆっくりと、極限の苦しみと闘いながら死のうなどと思うだろうか。水は低きに流れる。つまり、現代において死の意味は、現実逃避としての意味合いが大きくなってしまっているのだ。果たしてそのようにして自殺した人達は、苦しい現実を死後も見つめ続け救おうなどと、考えることがあっただろうか。

一世行人は、決して「無」へと移行する為に死んだのでは無い。勿論彼は生物学的には死んだし、自分の意識が途切れる瞬間を、死の直前に感じたことだろう。だが、それにさえ、彼は意味を見出したはずだ。この一瞬より先、自らが仏となつて、苦しむ民衆を救い、現実を見守り続けるのだと。彼の死には明確な目標があり、未来志向の死であったと言える。

このように、そこまで行人達を突き動かしたモチベーションは何なのか。これを私は、「利他の精神」とでも名付けたと思う。それはやはり、行人達に、一様に殺人を犯したり物乞いを経験したりといった、PTSDのような心の傷があったことが関係しているのかもしれない。つまり彼らは、精神的な地獄を体験していた。人を殺めてしまった強烈な罪の意識や、物乞いとなって人々から蔑みの目で見られ、呪詛を投げつけられ唾を吐かれた経験、賤しく身を落としてしまった経験が、彼らの人生に厚い雲のようにどんよりと立ち込めていた。彼らが一旦背負ってしまった賤しさの事実は生涯消えることは無いだろうが、それでも彼らは、彼らの苦しみを幾許か和らげる救いを求めた。その結果が、一世行人という道だったのだと思う。

もし一世行人の「利他の精神」が「自己犠牲の精神」とイコールであったとしたらどうだろうか。自分を犠牲にして、他人が喜びを得ることに最上の幸福を感じる。このような定義の上では、二つの精神の間にさほどの違いは無いと思う。だが、単なる「自己犠牲の精神」にはどこか押しつけがましいものを感じてしまう。他人を幸せにするのは難しい。自分を犠牲にして他人に尽くしたことで、他人の感情や心情を自分勝手に推察して誤った尽くし方をすれば、他人が必ずしも喜びを得るとは限らない。結局それは他人の為になっていない訳だから、自己を犠牲にしたという事実を本人が強く感じていたところで、その犠牲には何の意味も無かったことになる。「自己犠牲の精神」のような言葉は、そのような当たり前の道理に目を瞑り、他人の為にならない自己犠牲さえ尊ぶべき、と言っているように感じる。

結局のところ、人間が生きる最大の目標は「自己の幸福の追求」なのではないかと私は考える。そう考えると、上記のような「自己犠牲の精神」は、「他人の事を思いやるのだから自分の幸福の為である」という事実を目を背け、「自分は純粋に他人のことだけを考えている」と自分に言い聞かせ、そのくせ心の奥底では「自分はこんなにも自分を犠牲にして他人の為に尽くしてやったのだから、然るべき称賛などの対価があってよいはずだ」と思っているから、「醜い」のだということになる。要するに自分に酔った状態と思ってもいい。

つまり、一世行人達が持っていた「利他の精神」は、やはり彼ら自身の「救われたい」という思いと表裏一体で、彼らはその事実を深く認識していたからこそ、それは単なる「自己犠牲の精神」に堕さず、「利他の精神」と成り得たのだと思う。否、寧ろ、行人達は自らが「救われたい」という思いに先行して突き動かされ、行人になり、即身仏になることを決意したのかも知れない。動機は、純粋な自らの幸福への渴望だったのかもしれない。最初は、自己満足的な人助けから、「他人」一般の苦境の打開を願い、祈り、自らの体を追い込み、生贄に捧げることによって、自らが幸福になることを彼は知っていったのかもしれない。そして最終的には、自分の幸福と他人の幸福が、限りなくイコールに近い状態まで混ざり合い、見分けがつかない状態にまで行き着いたのかもしれない。

行人は、やはり「自分が自分だけでは成り立っていないこと」を強く認識していたからこそ、そのような思考、モチベーションにたどり着けたのかもしれない。恐らくは、先に述べたような精神的な地獄の体験は、彼の心に恐ろしい孤独をもたらしたのではないだろうか。何故なら、彼自身のそのような地獄の体験を追体験し、共感してくれる人間など、誰もいやしないからだ。憐れむような視線など誰でもできる。「誰も自分のことなんて分かってくれない」というやつである。しかし、その孤独感が一回りした時、彼は何かを悟ったに違

いない。誰も自分のことなんて分かってくれないのに、人間は一人では生きられないのはどうしてか。人と会いたくなるのはどうしてか。寂しい感情が沸いてくるのはどうしてか。救われたいと思うのはどうしてか。そして、そんな時に決して自分を見放すことの無い人がどこかにいるのは、どうしてか。行人は、地獄の釜の底を見た行人は、寺で働かせてもらうようになった後、こんなことを真剣に考えていたのではないだろうかと思像する。

一世行人が死に、即身仏ができたことによって、直接民衆は救われる訳では無い。天から米粒が降ってくるような奇跡が起こる訳ではない。だがそのように苦しんでいる民衆が、即身仏となった行人の想像を絶する苦行や、彼の民衆への祈りに少しでも思いを馳せた時、民衆はやはり手を合わせ、涙を流すのではないだろうか。「こんなにも自分達の痛みを知り、祈ってくれる人がいたのだ」と。そして、「少し、明日も希望を持って生きてみよう」「ほんの少し、自分も周りの人の事を思いやって生きてみよう」という思いが、頭の中を微かでもよぎるのではないだろうか。ここには多分に私の主観も入っているが、あながち間違いでは無いと思うし、何よりそう信じたい。

たとえ医学部精神神経学教室の加藤先生の講演でも言われていたように、行人が何らかの精神的な要因で狂気に陥り、死んでいったのだとしても、それは変わらないだろう。そもそも当時は現代と違い確固たる宗教思想が庄内地方には浸透していたであろうから、「仏になった」お坊さんがいるとしたらそれは無条件に敬意を払われるものだったろう。実際に行人達が、文字にすることすら憚られるほどの苦行を体験したことは事実であるし、それによって狂気に陥った後死んだとしても、この世界に、狂気に陥るほどの苦行を自らに課すことのできる人間が果たしてどれだけいるか。そう考えれば、民衆の行人に対する思いが変わることは無いのではないだろうか。

そのように、即身仏が、同時代の民衆や、その後の時代に生きた人々、そして現代に生きる私たちにそのような思いを喚起させたとしたならば、それはやはり、一世行人は彼の信じた思想の通り、立派に「生きている」ということになるのかもしれない。

死は未だに怖い。寧ろこのセミナーを通じて、死にたくないという思いは更に強くなった。まだ死ぬには自分が満足できないかもしれないことを、ほんやりとだが意識するようになった。少し自分は自分勝手に生きすぎていたのかもしれない。文字にするのはこそばゆいが、ほんの少し、周りのことを考えて生きてみようかな、と思えた。

死生観というには余りに稚拙で単純なことかも知れないが、この気持ちは生涯大事にしていきたい。

「生命」とは

文学部1年 伊丹 友里恵

1、はじめに

私はこれまで、「生命」とは何かという事を改めて考える機会はありませんでした。生命とは目には見えないもの、直接に感じる事が難しいものである。だから私なりの定義も初めは漠然としており、私達が「こころ」と呼ぶそれが生命に最も近いものだろうと捉えていた。例えば植物状態の患者を見ると、肉体のみが機能している状態の人間に生命を感じるには言い難い。確かに医学上では生存していても、精神が崩壊してしまえばその人間は通常の人生を送る事が出来ず、即ち死も同然の有様になってしまう。であれば喜怒哀楽といった感情を表す「こころ」が生命の源であり、肉体はその入れ物に過ぎないのだと、私は考えていた。

2、セミナーを終えて

だがこの四日間のセミナーを通じて、私の生命観は大きく変わった。即身仏拝観とその晩のセッションで肉体と魂の関わりについて知ったが、身体と魂は実は関連し合ったものであり、太古の日本でも心身相関の考えが根強かったそうなのだ。即身仏はその例の一つで、拝観前の私はそれを只のミイラだとしていたが、そのような単純なものでなく、即身仏とは自らの意志で肉体的生命を終える事により魂の結晶を肉体に宿するという高尚な目的を持つ行為であった。即身仏は死ぬ事によって究極の生命を獲得した、ある意味逆説的な行いなのである。しかしどの道体も残る訳であるから、生命の核はやはり魂—「こころ」—なのではとも思った。だが、生命はそんな一方的な視点からでは解釈出来なかった。体と生命の関係で言えば、私達は身体を用いた行動によって心を創り出している。手を使って物体に触れ、目や耳で光や音を感じ取る事により私達は私達の周りを取り囲む世界を形成する事が出来る。体を通して世界を構成する事が、私達に生きる事を可能とさせるのだ。例えば三重苦として知られるヘレン・ケラーは、盲人かつ聾啞者である為に世界の姿を知らなかった。けれど代わりに触覚が発達した事から、ものに触れる事で周囲を把握し、日常生活を何とか送ってはいった。本能のままの生活ではあったが、人や器物に触れて、その手触りによって好悪を示し感情を表現する事も出来たのだ。

つまり、肉体だけが機能していても精神が伴わなければ当人に生きている実感は沸かないが、逆に精神を有しても肉体の機能が停止すれば世界をその身で感じ取る事は出来ず、私達は虚無の空間に閉じ込められて、こころは生まれまいだろう。更に、人間は死ぬと肉体はすぐに朽ちて最終的に焼却してしまう事から、私もそうであったように、私達は体というものを単なる容器と捉えがちになる。しかし死体が残る事で、私達は死を実感出来ているとも言える。即身仏は言うに及ばず、死体は生命の証なのだ。どちらが重視されるべ

きかでは無く、肉体とこころの双方が揃ってこそ生命だ。

そして生命を生命とさせるものは肉体だけでは無い。確かに肉体があってこそこころは生まれるが、社会・対人関係もまた生命に密接に関わってくる。私が印象深く覚えている本の一節で、「人は二度死ぬ」というものがあった。人は一度生物学的に死に、やがて年月を経て周囲の人々の記憶から忘れられる事でもう一度死ぬという意味だ。その考えを踏まえて即身仏を拝観すると、このような過酷な苦行に挑んだ者の精神が垣間見える気がする。肉体を永劫に残せば、人々の記憶からは決して消えない。言い換えれば、それは永遠の生命を獲得した事になるだろう。生命は、自分一人に所有されるものではない。他者と関わり、社会の中で日々を送り、人々の記憶に残る事で、私達は生きている事になるのではないか。自らの生命を、本当の生命とさせる事が出来るのではないか。勿論、社会的な関わりを断絶した人々を否定する訳ではないが、それでも他者と関わり時間を共有する事で、私達は生きている事を証明している。私自身を例に取るが、誰とも会話せず接触せず一人きりで過ごすような日を長期休暇の時期に続けてみると、何だか生きている感じがしないのだ。世界を確かに知覚しているが、ただ一方的に情報を受信しているばかりで発信が無い。すると自分の生死が曖昧になる奇妙な感覚に陥る。生命は自分だけでなく、他者を通じて間接的に知る事で、自分のものとして自覚出来るのだ。

こころと肉体の関わり、社会等の外的要因も含めて考察していくと、生命は非常に厄介なものだと言える。こころと肉体が共に健全であり、他者との関係が成立して初めて獲得できるものとしたら、多くの制約に縛られた面倒なものに違いない。だが少なくとも言える事は、生命は物体として目に見えず、自分自身で感じるしか接触の手段が無いものだ。分かり易く目に見えないからこそ、肉体を通したり、他者との関わりを求めたりと試行錯誤を繰り返していき、何とか実感出来るようにする。不安定で曖昧なものであると分かっているから、全ての生物は生まれながらに生存への欲求を備えているのではないだろうか。人間は太古から不老不死の夢を追い続け、現在でも医療は日々進歩し、遂には生命の人工的形成にまで手を入れようとしている。生命の支配さえ目論み始める現代の風潮には賛否両論だが、生命は頼り無く、人間のどこにあるかも分からない不確かなものである。その性質を思えば、絶対的で揺るがない命を欲しても致し方無い部分はあると思うのだ。

肉体が問題無く機能すれば生きている事になるだろうが、他者に認識される事でその自覚がより強固なものとなる。そして人はあらゆる手段を駆使して生命を感じ取ろうとし、また、世界に自分の生命の痕跡を残そうとするのだ。

生きていけば何か見つかる

経済学部2年 伊藤 広樹

生命というものは非常に大きな物であり、それはあたかも神とも同等のようなものとなれるかもしれないと同時に、この世の全ての物となってしまうのではないだろうか。そして、その生命という大きな物に触れるということは人に多大な感動および幸福をもたらすのかもしれない。それゆえに、人は昔から生命を追い求めたのだろう。庄内セミナーを通じて感じたのはとにかく生命というものは大きくそしてそれ単体で語ることはできないということだ。さらにいえば、言葉で表すことのできないような感動や幸福を味わった瞬間に触れることのできる何か大きな存在こそが生命なのであろう。しかし、その大きな生命の中にも様々な種類にわけられる形で生命があるのだと私は思う。生命というものを厳密に言葉で語ることはできないと思うのだが、どこでそれを見つけることが可能なのかということを考えた結果、生命には大きく分けると個人としての生命と種としての生命があるのではないだろうか。

個人としての生命とは完全に個人に関連した生命である。それは他者にはなしえない自分という存在だけが重要なものとなり、個人の生き方や考え、物事の見方が生命となる。例えば、人間でも動物でもなんでも個々人でこの世界の見方は異なることであろう。同じ色であっても人によって違うだろうし、そのようにして個人というものは自分自身が知覚出来る範囲で個人の世界というものを形成する。その個人の世界にあるもの全てが個の生命となるのだ。つまり、個人の知覚しうるもの全ても生命となるのだろう。つまるところ、生命は日々一人で生きていく上でふとした瞬間に見つけることができるかもしれないと思う。まあただただ適当に生きていけば何か見つかる。

そして、個人の生命とは何かしらただ生きている上で存在しうるものとなる。ただ生きるだけでも人は何らかの知覚をするであろうし、何らかのその個に固有なものが形成されるだろう。つまるところ、生命は個が生きてさえいれば長らえていくものなのである。そして、ただ単に存在するだけで生命というものが生じるならば、それはとても虚無的なものになるだろう。たとえ何をしたら、根本的なものは決してかわらず、どうしようもない。ただ死ぬまで生きるだけである。そこで、その虚無感を埋められるものが個としての生き方でもあるのだろうし、種としての生命にも関連するのだろう。

種としての生命は個としての生命と違い、個人の中で完結してしまうものでない。それは他者や社会との関わりから生じる生命であると考えた。人は個人では生きていくことができないとはよく言われている。しかし実際にそうなのであ

うか。本当に個人で頑張れば正直赤子や子供時代を除けば何年か生きていけそうな気がする。しかし、そこで誰ともコミュニケーションをとらず完全に生きていくということはある意味では死んでしまうのと同じ事なのかもしれない。この世の中において、生きていき生命をもつということは、自分自身が物事を知覚していくということも大事だが、それと同時に自分自身が誰かに知覚されなければならないのだと私は思う。まあ人と犬みたいな感じでも別にいいのかもしれないが、できれば人と人みたいな感じでお互いのことを認識しあい、何らかの意思疎通を行うことによってまた生命が生じるのではないだろうか。ただ完全に個人で生き他者と隔絶している場合は、正直なところそこに生というものはあるのか私には疑問となってしまうこともある。個人としては生きていけ、大丈夫だろうが、社会として、また動物や種としては死んでいるのだろう。

そして、先ほど述べた個人としての生命というものは個人で完結しまっているがゆえにその個人がいなくなってしまうことで完全になくなるのだ。それと違い、種としての生命においては、とある個人がもっていた生命観や思想などが受け継がれてゆく。庄内地方において、様々な伝統や特有の思想が残されていたように、人と人とが関わってゆくことによって、個人のみがいるのと違い、次の世代やもっと先にとつながっていくものがあるのである。そこにもまた、生命を見つけることができるのではないだろうか。伝統や多数の人々が共有している思想などは一種の生命だと私は思っている。

ここまで私が一人で色々と考えて書いてみたのだが、正直生命について考えるということはある意味では非常に無益なのだと私は思っている。生命について云々考えていくのは自分自身の心の中にある悩みなどが少しは解決するかもしれないし、何もしないでも一人で時間をつぶせるという点において素晴らしいことである。しかし、生命について考えてそれで日々生きていけるかと言ったらそんなのは一握りの人間のみである。私も生命を考えたから何か特殊な技能が身について将来稼ぐのに役立つのかと考えたらそうは思えない。そういう意味では本当に無駄だ。しかも生命については明確な答えがでるのかよくわからないが、とにかく堂々巡りになるなどして結論をだすのが非常に難しく、時間がかかる。ただ考えているだけでは色々導き出すのは厳しいだろう。そこで、ただ考えるよりは何かしら行動をして自分で様々な体験をしていくということの方が人として健康的に過ごせるのではないのかと思っている。

宗教とともに生きる

文学部2年 伊原 貴義

今回の庄内セミナーを通して、私の死生観というものには宗教に根付いているものなのではないかと考えた。私が本セミナー初日に書いたマインドマップでは、「生命」というキーワードに対し、生物的なものからはじまり、遺伝的なもの、そして宗教的なものなど様々なものに派生していた。しかし、本セミナーの最終日に再びまとめたマインドマップでは、前述した生物的なものや遺伝的なものよりも、宗教的なキーワードがどんどん派生していった。それは本セミナーを通じて様々な人の意見を聞いたり、実際に即身仏を見たり、山伏体験をしたりなど、宗教的要素の強いことを行ってきたからといえればそれまでだが、そこにはやはり自分の中でなにか通じるものがあつたし、実際、宗教なしでは生命は語れないのではないかと考えた。

本セミナー3日目に山伏体験をした。みんなで白装束を着た。白装束は死に装束、つまり私たちは一度死んだのだ。死んだ私たちは母なる山で修業をすることでよみがえる。今回は1日だけのミニ山伏体験ということで滝行や参道歩き、床固め、南蛮いぶし、火渡り、これら5つの修業しかできなかったのだが、この一連の修行で私たちは死んだ状態から生き返るという現象を体験した。本セミナー初日の八朔祭では、実際にその日まで長期間修業をしてきた生の山伏を見た。おこがましいかもしれないが、私の中ではそのリアルな山伏と、山伏修行をしている自分とが少なからずリンクしたような気がした。「うけたもう」の一言から始まり、山伏修行をしている間は自分でも驚くほど無心になることができた。山伏については修行の前に一度お話を伺っていたのだが、山伏体験の後、これが山伏の修行なのかと改めて山伏という存在の宗教性を痛感した。

ひとが生きていく上で、何かにすがりたいと思う気持ちは当然のことながら存在する。昔は現代と比べ、科学的な知識が乏しかったということもあり、天災や不幸があるとまず人々は祈った。またこれも現代に比べて比較的、時間的な余裕があつたということもあり、昔の人々は宗教的な行事に時間を費やすことが多かった。つまり、昔の人は現代よりも宗教と密接にかかわっており、生きる上で、宗教というものは自分と切っても切れない関係にあつたのだといえる。つまり、今回のこの山伏修行というのは、やはり長い間続いてきた、非常に伝統的、そして土着的な文化であり、昔から羽黒の人々にとってなくてはならないひとつの文化なのだ。そう考えると、自分たちが行った山伏修行というものに歴史の重

みを感じるとともに、現地の人々にとっての、そして同時に自分にとっての「生きるとは何か」という問いの答えが導き出すことができるのではないかと考えた。

よく、「生きる」ということと「死ぬ」ということがセットで語られる。しかし私はここで「宗教」というものも同時に語りたい。生きるということは宗教とともに生活することなのではないか。確かに「私は無宗教だ」という人もいるが、そのような人も「信じている宗教はない」という、その人にとってある種絶対的な信条をもっている。これも立派な宗教なのだと思う。そう考えると、前述したとおり、ひとは宗教とともに生きているということになる。宗教があるから安心できる、宗教があるから不安でも耐えられる、このように宗教という人類を超越したものにたいする信仰があることで、ひとは今まで幾多の困難をも乗り越えてきたのではないか。生きるということは宗教とともに生活すること、今回のセミナーを通して、このような生命観が私の中で浮かんだ。

またこれに関連し、生命観について興味深いことがもう1つあつた。それは慶應義塾大学先端生命科学研究所(TTCK)の存在だ。即身仏の保有率地域として全国1位、そして山伏修行が行われているこの庄内・鶴岡という地域に生命科学研究の最先端研究所があるということが非常に興味深い。庄内には、白装束を着ることで一度死の世界へ行き、修行を通して生き返る山伏や、人々の平和を祈って仏となった即身仏がいる。その一方で、メタボローム研究という、世界でも最先端の生命科学研究をしているということ、偶然の産物かもしれないが、庄内出身の私としては、「生と死」について考えていく上で、これはなにかのご縁があるのではないかと考えざるを得ない。

以上のように、私にとっての生命観とは宗教とともにあるものである。頭の中の考えを具体的にまとめることができず、非常に抽象的な答えになってしまったことが個人的に少し悔やまれる。しかし「生命観とはなにか」と言われても、これは答える人によって答えはバラバラで正しい答えがないものではないだろうか。今回のセミナーのセッションでも様々な人の生命観を垣間見ることができたような気がする。このような絶対的な答えがない問題に対し、身体を使って考えさせてくれるきっかけをくれた教養研究センターには感謝を申し上げたい。また、庄内出身者として、たくさんの学生が庄内に来てくれたこと、本当にうれしく思う。

“分かる” から “成る” へ

商学部3年 岩崎 貴大

「格別な体験だった」というのがセミナーを終えての第一の感想である。今回のセミナーでは、羽黒山で行われる八朔祭の見学にはじまり、即身仏の拝観や修験体験など、庄内の地でしか得られない無二の体験を通して様々なことを感じ、考えることができた。初日、私たちのセミナーは『「自分」とはどのような存在であるか』ということやそれぞれの生命観について、つまり普段どこか自明と思われていることを前景化し、文章やマインドマップで形にしてグループで議論を交わすことから始まった。自らの考え方や感じ方、個人的な体験（経験）、それまで歩んできた道のりやその長さ、関心や専門などいけば自分の人生／生き方を提示し、そしてそれに対して各々がリアクションを起こすことによって、新しい考えが引き出されたり、共通点を見つけてはそれまでの考えが深まったりと、あたかもグループが一つの有機体であるかのようにそれぞれの発言が波及を重ねて連鎖していく様はこれまで中々経験することのない、（もちろん気恥ずかしさはあるのだが）非常にスリリングで知的な興奮に富んだ、「いとなみ」と呼べるものであった。これに加え、市内の見学で庄内に生きた人々の生活に触れ、ゲストを招いて「生命」や庄内の歴史・文化を深く掘り下げるためのセッションがあり、そしてこうした様々な体験の先にセミナー参加者との対話の機会が常に開かれていた。この4日間のセミナーは正しく体験と呼ぶにふさわしいもので、あらゆる感覚をフル動員し、そしてそれらに付随して湧く感情や思考を抜きに、とても言葉で語りきれるものではない。青天の空に雄々しく聳える山々や闇夜の羽黒山から見上げた満月の像、滝行・忍苦の行（密室で煙に燻される）では、終わりが見えない中でただひたすら苦しさや逃げ出したい衝動と対峙し、極限の状態に追い込まれていく、あの辛さとその後の開放感。日常生活の快適さ・平安さのありがたみを痛感するとともに、それと引き換えに、数多の情報や刺激に囲まれていかに自己や他者との「対話」が失われているかを思い知ったのである。

滝行や忍苦の行など、「修行」と呼ばれるものは心の鍛錬である、とは修験体験に臨む際に山伏の方が言われたことである。それは己の生活のためのスキル＝生業を磨く「修業」とは違い、滝に打たれ、煙に燻され、静寂の中で佇むという異空間で、ひたすら自己と対話し心を鍛える行為なのだと思う。

う。ある参加者は、人間は極限状態に追い込まれることによって身体感覚・思考が鋭敏になるのではないかと、言っていた。それは正にこのセミナーで山伏や即身仏を安置する注連寺、大日坊の方の話をうかがって感じたことでもある。ただ同時に、そうした感覚や思考が研ぎ澄まされていくのとは別に、自然に身を置き、自然の大きな力を受けると共に、自分の弱さのようなものを知ってしまうこともまた修行であると思う。即身仏が生まれる時代背景には飢饉や伝染病など人の力を超えたものがあつたという。恵まれた自然に囲まれた地であるから、豊饒を、または死者の魂の還る場所として山に祈る、そういった生活に則したはたらきがあつたのではないかと思う。

八朔祭、山伏たちが祭壇に火を炊き、その大きな火の玉を仰ぐようにして声を発する、その光景。修験体験で己を異世界に置いて、火を見る、息の音を聞く、樹齢数百年の杉並木を両端に2446段の階段を下る、足袋から伝わる感触、1400年前に建てられた五重塔をしばし見つめる。そこに「何か」を見出す。その「何か」はアウラとも something great とも霊とも言うことができるだろうが、あの目には見えないものに対する敬虔な感情こそが祈りや信仰の原型ではないだろうか。

東山さんは遠藤虚籟という綴織職人の生涯と彼の思想を通して、他者との連関で自分は生かされているということ、一人の人生には、その人を支える無数の命の存在があることを説かれた。このセミナーの開始時点でのマインドマップを振り返ると、個人（意識、記憶、欲望など）に焦点を当ててばかりいた私が、こうした様々な体験を通して、またセッションのうちでも特に東山昭子さんの言葉を受けて、そういった「その者自体」としての見方だけではなく、「～のために」という関係のうちに人間あるいは生命を捉え、細胞レベルのミクロな生命と、宇宙・地球といったマクロな生命、それら二つの中間にある、世界や社会・自然といった我々人間を取り囲む環境、現世・来世、歴史や時代という時間・空間を超えたものに対する気づきが得られたのではないかと考えている。

最後に、素晴らしい体験の機会を設けて下さったセミナーの関係者の皆様にお礼を述べたいと思います。ありがとうございました。

庄内の地を「体験」して思うこと

文学部4年 印南 まどか

体験

庄内セミナーは生命について考えることが主目的であった。しかし私は最終的に、その目的を果たすための手段であった「体験」そのものの意義深さを強く感じた。

自分自身が「体験」していると感じたのは、山伏修行の床固めの最中であった。先達は五重塔の前に腰をおろし、塔に語りかけなさいとおっしゃった。土の上に腰を下ろすと草や石が体に当たる感覚がし、やがて静かな空気に包まれた。ただ黙々と塔を見つめ、しかし私は何を語りかけるべきなのかと思案しているうちに、ふと奇妙な感覚にとらわれた。五重塔と自分が、まるで植物のように大地から「生えている」ように感じたのだ。一度その感覚にとらわれるとそのようにしか思えず、芽を出したばかりの小さな雑草が、何千年もこの地に根付いている巨木を見上げて圧倒されているようであった。積み重ねた歴史は異なれど、しかし大地に根差し養分を吸い上げて生きているという点では、私も五重塔も全く等質のものであると感じた。いわゆる「生物・非生物」という垣根を越えた、「大地に根付く生命」という考え方を得たのであった。

このような感覚は、東京で生活している時分には想像すらできなかったものだ。近所の神社に毎日参拝しても感じられないかもしれない。「生命とは何か」という思いを胸に入山し、倒れる巨木を間近に歩き、何千年分もの雨風が染み込んだ五重塔に語りかけたからこそ得られた新たな生命観である。これこそまさに、私の思う「体験」である。

相互関係

「体験」と「相互関係」とは不可分だと思う。セミナーでは郷土文学研究家の東山昭子さんが庄内の綴錦織作家である遠藤虚籟についての講演をしてくださったが、その際も「関わり」を強調して説いておられたのが印象的であった。この世界は決して自分だけでは完結せず、自分も他者も含めた生命の総和である。その中には輝かしい業績を残し評価される者もいるが、一方では彼らの偉業の犠牲となった者もいる。しかしたとえ自分が輝かしい業績を残せなかったとしても、謙虚に「犠牲となる側」の生命だと思えることができたなら、後世の繁栄を祈ることができるようになる。こういった遠藤虚籟の考え方は、あまたの生命が存在する世界において生命どうしの対立や困難を乗り越えるために欠かせないと感じたが、しかしこの考え方はどの範囲にまで適応できるのだろうかと考えずにはいられない。ここに強く、「相互関係の上で生きる人間」というものを感じてしまう。

少し話を戻せば、私は庄内を訪れ羽黒山で床固めを行ったがゆえに新たな考え方に会った。逆を言うと、私が庄内を訪れる以前はそのような考え方はなかったし、それどころか私の中で庄内は「庄内」という言葉でしかなかったと思う。「庄内」で生活している人々はいるが、私の中では実体が無いものと同じような扱いであったろう。ひょっとすると地球の裏側には「Syonai」とかいう名前の土地があるかもしれないが、「庄内」もその「Syonai」も私にとってはさして変わらないし、極端に言えばどちらがあってもなくても構わなかったのだ。ともかく私にとっては「庄内」という言葉でしかない状態からスタートしたのだが、実際に庄内の中に身を置き過ごす中で、庄内という土地は私に働きかけてくるし、私は庄内を見て聞いて触れて行動しているし、まさに相互関係が成立して私は庄内を知った。

つまり相互関係とは人間と人間だけの間に成立するものではないと思う。人間以外の生物、植物、土地、人工物、光、風などどんなものでも出会えばそこに関わりは成立すると思う。「この目で見る」「この手で触れる」ということがどれだけ重要かということもこのセミナーで学んだことの一つである。

「関わり」という制約

一方で関わり合うということは、縛り付けるということにも似ていると思う。これが先ほど遠藤虚籟の話で持ち出した、「犠牲の適応範囲」の問題だ。たとえばたった今この町で誰かが亡くなったとしても、私はその人の死を心から悼むことはできない。その人のために香典を包むこともなければ涙を流すこともない。その人は生前、ある日私が落としたハンカチを拾ってくれた人かもしれないが、その人だと知らなければやはり赤の他人の死であるし、知ったとしてもそれくらいの接点では心が動かないだろう。

このように、人はある程度の強度の関わり合いを持たなければ、その人を思うことができない。「その人のために」という発想ができない。関わり合いの上で生きていく我々は、ともすると人を「仲間」と「他人」とに分けてこだわりがちだ。これはセミナー中の講演で加藤元一郎先生がおっしゃっていた、「自己は身体から切り離すことができない」という考えと通ずるものがあると思う。「仲間」というのは関わりを持ち一つの状況を共有した存在のことで、言わば身体のようなものではないだろうか。自己は身体から切り離すことができないように、関わり、あるいは関わりを持った仲間からも切り離すことができない。しかしそれは通常のことであり、

認識しておかなければならないことでもある。

他者を思いやるということ

ところが、直接的な関わり—会話をしたり触れ合ったり—をせずとも、他者に強い思いを抱く場合があると思う。例えば先ほどの見ず知らずの人の死の話しだが、たまたま乗り合わせていたバスが事故を起こし私は生き残ったがその人は死んだ、という状況ではどうだろうか。私はその人を「事故にあった同じ被害者の一人」として位置付け、その死を心から悼むであろう。たとえ言葉を交わしていなくとも、強烈な状況を共有することも関わり合うこととなり得るだろう。

私はこの強烈な状況が「記録的な大飢饉」や「戦争」であり、他者のために祈る即身仏や遠藤虚籟を生み出したのではないかと思う。もしも戦争が起きなくても虚籟は金にならない綴織を続けたか、などと考えても無意味かもしれないが、少なくとも戦争が起きたことは虚籟の綴織制作にとって意味があったと思う。

聖人と呼ばれる人の多くは、この世の生きとし生けるものの救済に人生を傾けた。しかし彼らが生命というものをどこ

まで想定していたかはわからない。聖人は政治的混乱期や天災などで暮らしが安定しない時期によく現れるし、やはり多くの仲間と強烈な状況を共にしなければ、他者を救おうという気持ちも生じ難いものなのかもしれない。とは言え劣悪な状況であれば自分一人生き延びようとするのが人間の性である。それを思えば、たとえ関わりある人のためだったとしても、他者のために祈るという行為は容易には真似のできないことである。

関わり合いから切り離れた自己はあり得ないが、私の他にも「自己」は生命の数だけ存在する。私が全世界の生命のために祈ることはできなくても、関わりを持った生命への祈りと祈りが触れ合い重なり合い、世界を覆うことは可能なはずである。そして私個人の祈りの範囲を広げるために、さらに広い世界に出て、土地を歩き、人と触れ合い、関わりを持ち続けなければならないと感じる。まさに体験することが生きることであり、同時に他者の受容性を高め、生を豊かにするのだということは、庄内セミナーで得た大きな気づきであった。

自然と生命

経済学部1年 大野 雄一郎

私が夜行バスから最初に鶴岡駅に降り立った時に感じたことは空がきれいだな、ということである。セミナー参加中の4日、天候に恵まれたこともあるが、空を見る機会が居住地である横浜にいるときより多かったように思う。どこまでも澄みきった青い空、そこに気持ちよさそうに浮かぶ純白の雲。空なんて世界中のどこからみても同じであると思い込んでいた私にとってはとても意外な発見であった。

セミナー終了後、この理由を探してみたところ、横浜では、コンクリートに舗装された道路、視界を遮るビル群、いたるところに張り巡らされた電線がある一方で、庄内は青々とした緑で覆い尽くされた山々が広がるという環境の差であるという結論に達した。セミナー後に行った観光客の誰もいない、砂浜にも足跡一つない日本海にもえもいわれぬ感動を覚えた。庄内に残る雄大で力強く、それでいてやさしい自然に触れる中で、古代の人々と同じように、自然に対する畏怖や敬意の気持ちが自分の中にもはっきりと存在するを感じた。

アニミズムと呼ばれるそうした思想は、山伏修行体験の山を母親、人間を胎児としてみて、修行のために入山したときから一回死んで、火渡りの行を終えた時に山から再び生を授かるという考えに影響していると考えられる。その他にも、八朔祭の際に山伏たちが囲んでいた火にも、「ただの炎」以上のものを感じずにはいられなかった。宗教を自分から遠ざけて考える傾向のある私にとって、自分の中にもこうした一種の信仰心を感じたことは大きな発見であった。と同時にこうした感情というのは誰しも持っているものではないかとも感じた。こうした新たな発見から、改めて「自分」や「生命」について論じてみたいと思う。

まず、事前課題で考えた「自分」では、「自分」は他者によって定義される存在で、「心と身体と頭の関係性」では心が身体と頭を支配するとした。今でも「自分」が他者によって定義されるものである、という根底の考えに変化はないが、ここでいう「他者」を以前は「人間」、すなわち自分を産んで育んでくれた両親や自分の生活を支えてくれる友達といったものを中心に想定していたが、「自分」に対して圧倒的な力を持ち、水から食べ物からすべてを与えてくれる「自然」もまた前提条件として欠いてはならないものであるということを再認識した。

また、「心と身体と頭の関係性」に関する見解にも変化が生じた。3つのなかで心を最も重要なものとして挙げたのは、自分の中でやはり対人関係中心に物事をとらえていたことに起因するのではないかと思う。山伏体験での修行というのは、ある時は冷たい滝に打たれ、ある時は一定時間同じ体勢をとられ、またある時は延々と続く道を黙々と人との会話を断ち切って進んでいくなど、心を無にして、または意識を対・人ではなく自己の内側・身体へと向けるようなものが多かったように思われる。

自然という視点に立脚して考えてみれば、人がどのように感じるのかなんていうのは、無意味なことですごくちっぽけなようなことのようにも思えてくる。私たちは人とかかわりの中で、共感しあい、友情・愛情を育み、時には憎しみ合ったりするためについ「心」に目を向けがちであるが、自然は人間がどう考えているのかなど全くお構いなしであるのだ。物質的に存在するものとしてあるのは「身体」だけなのである。以上のことを踏まえると、「身体」はより広義な意味での「自分」であり、「心」は同じく「自分」に欠かせないものであるがより狭義なものであるという結論に達する。

実際に精神障害で「心」を失ってしまっても「身体」が存在する限りその人は他の何者でもないその人であると考えられている。即身仏として自己の体を残そうとしたのも、こうした考えが背景にあったのではないかと思われる。生前に体内の脂肪分を限界までそぎ落として、死後、「永遠の身体・名誉」を手にする。現世で不遇の時を過ごしていた一世行人にとって、想像を絶する過酷な修行を乗り越えてでも欲する価値のあるものであったことは、共感できないまでも何となく合点がいく。

では、「生命・死」とはなんなのか。わたしは、「自然における連鎖・関係」であると考え。 「生命」は何もないところに突然発生したりはしない。すべて、あるものが別のものを生み出している。そして、産まれたあとも周囲との関係を切り離しては生きてゆけない。幼少期は自分の命を他者に預けなければ生きていけないし、成熟しても他者の「生命」を頂かなくては飢え死にしてしまう。こうして脈々と受け継がれてきた命の連鎖が、またある個体としての「生命」を生み出す。一方で、私たちが敬遠する「死」も、そうした循環の中で大事な役割を果たす。死体から分解された養分はまた新たな「生命」を生み出していく。「死」は「生」の一部分なのだ。これが、「自然」という大きな枠組みから見て、今回得られた一つの解である。

大局的な見方としては、これでいいだろう。しかし、異なる次元の話として、いざ「自分自身の生と死」について論じると途端に及び腰になる。自分が死ねばどうなるのか分からないということに変わりはなくその不確実性から、生と死を切り離して、死を恐れる。ここで、意見というより抱負を述べることでこの問いに答えると、よくわからない先の死のことでよくよく悩むよりも、五感と脳みそをフル回転させて、「今」この瞬間を一生懸命生きて、もがいて、楽しみたい。そうやって積み上げてできた「自分の歴史」のなかに事後的に生命の価値・死の意味を見出したいと思うし、そうやってたどり着いた答えが美しくてきれいなものになればいいな、と期待する。

最後の「個人的な死生観」については不十分な解しが得られなかったが、これから再び都市圏で生活する中で、庄内で感じられた自然の大きさ・すごみというのを忘れずにヒントにして「自分」や「命」といった難題を継続的に考えていきたいと思う。

私の死生観＝幸福論

法学部（法律）2年 小川 健吾

お詫びなど

はじめに、このレポートは後にレポート集として刊行されるとの事なので、お詫びを申し上げます。思いのほか文章が長くなってしまったのだ。もし途中で飽きてしまったら、心の中で「長いよバカ野郎！」と叫びながら読み飛ばして最後の一行だけ読めばそれなりに満足していただけるのではないと思う。私がセミナー中にこだわった「ある言葉」で文章は締めくくってある。まだ飽きていないと思われるのでこの時点での読み飛ばしはご法度である。ご辛抱を。

続いて、本の紹介をしたい。ロシアの文豪トルストイの「イワン・イリッチの死」という作品である。「全ての人間は死ぬ、ソクラテス（この作品ではカイウスとなっている）は人間である、ゆえにソクラテスは死ぬ」という有名な三段論法の例を頭では理解していても、ここでの抽象的一般的な「人間」と自分を同一視できない苦悩、あるいは死期が迫るにつれて募る建前や嘘への嫌悪感、などの秀逸な描写には思わず唸ってしまう。短編なのでぜひ手に取ってみたい。後に引用するが、私の死生観に多大なる影響を与えた作品である。もし通読して駄作だと感じたら遠慮なく私の元へ本代を請求しに来ていただいて構わない。ただし、40人近くが私のところに請求に来ると私は壊滅的な打撃を受けるので、単に「ジョンをつぶす」ための手段として共謀してこの制度を濫用しないようお願いしたい。良心的な皆さんのことだから大丈夫だとは思いますが念のための但し書きである。

序

閑話休題。真に僭越ながらこのレポートには私の死生観を記すこととしたい。客観性に乏しいエッセイとして読んでいただけたら幸いである。

セミナーを経て私の考えはコペルニクス的転回とはいかないまでも、メンバー（スタッフの方や講師の方も含めたセミナーの全参加者をこう呼ぶこととする）からの斬新な意見の提示、私の考えに対する冷静で的確なアンチテーゼを滴うかの如く浴びることで、磨かれ、より確たるものになったと言える。その成果をこのレポートに記したい。

第一章：葬儀屋の苦悩

正確な時期は覚えていないが、以前にNHKの番組である「プロフェッショナル」で葬儀屋の「ティア」が取り上げられていた。

ティアの戦略は、今までブラックボックスの中にあった葬儀の個々の費用をあえて公開することで、元来の葬儀屋がど

れだけうまみを得ていたかを示し、安価な正当価格で葬儀を提供することを試みるものであった。しかし、はじめのうちはこの手法は大いに煙たがられたと語っていた。搾取の対象である個々の商品の単価をあえて公開することは葬式のコードに触れ無骨であると捉えられたのである。そして私が特に印象的だった場面は自宅まわり営業の際のインターホン越しでの断り文句である。

「今は死ということまでは考えておりませんから…」

何気ないこの台詞は私の中にざらついた感触を伴って埋葬された。

ティアの例は現代の日本人の死を無意識のうちに忌避する傾向を示しているように思える。そしてこれは私の皮膚感覚とも合致する。

ここで前提を整えたい。死を覆い隠そうとする潮流とは異なり、私がいかに生きるかという問題を考える際には「いかに死ぬか」という問題が付随する。よって私の視点は「死を除いた生＝人生」ではなく「死を内在した生＝人生」という方向で展開することを明示しておく。

第二章：イワン・イリッチ（ロシア人）

自分でもややこしくなってきたので直観的に理解できる例として先述したトルストイの作品を引用する。

〈あいつは花の陰からおおびらに彼を眺めている〉（トルストイ「イワン・イリッチの死」 米川正夫訳 岩波文庫 2010年 65ページ）

〈病勢が進むにしたがって、腎臓がどうかしているなどという考えは、しだいに怪しく疑わしくなっていく、その反対に死の迫ってくるという意識が、次第に現実味を帯びてきた〉（前掲書 91ページ）

イワン・イリッチにとって痛みは「腎臓の不調」ではなく「死」を匂わせるものとなっていく。彼は痛みを通して死を覗き、自己の内部に死があるという意識に至る。「生が無い」のではなく「死がある」という訳である。これ以上深入りすると言葉遊びに堕する恐れがあるのでこの辺で切り上げる。分かりやすい例を挙げるつもりでトルストイの作品を引用しようと思いついたのだが、途中で図示するのが手取り早いことに気づいてしまった。よって、じゃんけんだと反則になってしまうが、これはレポートでありじゃんけんではないので堂々と後出しをする。

まず図1を見ていただきたい。これは「死を除いた生＝人生」型のモデルである。人生の外側に死が想定されている。死の部分は斜線で示してある。ただしこれは便宜的なものな

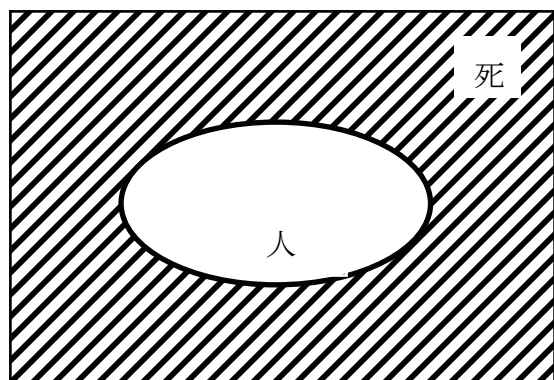


図 1

ので斜線と「死」という文字はないものとして理解されたい。

次は「死を内在した生=人生」型のモデルである。図2を見ていただきたい。こちらでも便宜的に死の部分大きめに示してあるが実際は極限的に小さいものとして理解されたい。

なんだか集合論の図のようになってしまったが直観的には分かりやすくなったことと思う。この簡略化した図は圧倒的に分かりやすいが「生（なま）の情念」ではトルストイに軍配が上がると思う。ただし図示したものから各々が自分視点の生（なま）の情念を生成することが出来るのであればそちらが勝ることは言うまでもない。

第三章：生成変化—長明さんご無沙汰しています！

ここまで「死を内在する」という視点を説明してきた。そんな時、ふと私の頭の中で鴨長明の方丈記が響き渡る。

行く河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず
万物は流転する。無常である。無論、人間もその例外にあらず、分子生物学によると人間の身体は六か月経つと完全に細胞が入れ替わっているらしい。つまり六か月前の自分と今の自分は物質としては全く異質な存在なのである。

自身の実感としての例をあげるならば、私は物心つく前に台所の引き出しから小麦粉のパックを取り出し、そのパックを残酷に破壊することで台所を小麦粉の海にするという地獄絵図を成立させたいのだが、全く記憶にない。確かに写真は残っているので事実は存在したようだがどうも腑に落ちない、ということがある。物心つく前の自分の愚行をいくら聞かされても自分で為したという記憶はなく、その時の自分と今の自分を同じ人物と考える方が困難に思える。

我々は一日（最長でも11日：ギネス記録2007）おきに睡眠をとることで意識が断絶しているのだから毎朝起きるたびに別の自分を想定していたのでは生活が成り立たない。そのため「自我」を無意識のうちに想定し、日々の生活を営んでいる。

つまり物質としての生成変化が事実であり、それを同一物として束ねるのが「自我」という観念であると言える。

第四章：解体屋はいますか？

死を据え、無常を認識した私は次に絶対的と思われる「自我」という観念に疑いの目を向ける。すなわち日々終焉にむ

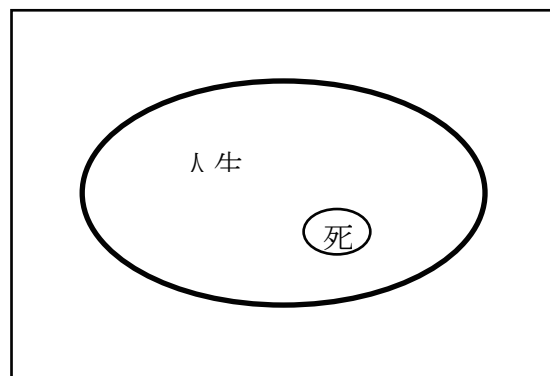


図 2

けて着実に変化していく生物、物質としての自分に合わせて自我の解体も必要なのではないか、ということである。結論から言うと自我の解体は必要であると考え。一章の終わりで述べた「いかに死ぬか」という問題は自己の解体なしには良い結果に至ることが困難であるように少なくとも今の私には思えるからである。

この視点から見ると「若い頃は絶世の美女と言われたわほほほほほ」と主張するおば様（非実在）は自我の解体に完全に失敗しているといえる。もちろんこのおば様（非実在）に対しての批難の含みは全くなく、価値的判断においては無色である。単に私の想定する自我の解体という範疇からは逸脱するということにすぎない。

無論、特別な働きかけをせずとも年齢を重ねていくにしたがってうまい具合に自我の解体がなされていく可能性は大いにありうる。この意味では自分からの働きかけは十分条件でこそあれ必要条件ではないと言える。だからと言って「Let it be」…それ以上でもそれ以下でもない。レポート終了。としたのではビートルズファンからさえ石が飛んできそうなので、具体的にどのように自我の解体を試みるのか、という問いへの私なりの見解を示すこととする。

私の感覚では、仏教の「空」の思想が私の目指す自我の解体というイメージに非常に近いように思える。非常に乱暴に「空」の思想を要約すれば「この世に存在する全ては仮説であり、実在するものは何もない。あるのは関係だけである」と言える。これだけでは全く意味が分からない。そこで「空」のイメージをよく表すものとして頻繁に引き合いに出される慈円の歌がある。

ひきよせて むすべば柴の 庵とて とくればもとの
野はらなりけり

野原にある柴を結べば庵となるが、その結びを解いたならばただの野原となる。つまり、この庵は「ある」とも「ない」ともいえる。唯一「結ぶ」という行為がこれらのあり方を決定している。「有」の対義語は当然「無」であるが「空」はこれらのメタレベルに位置しているのである。

この視点で自分という存在を考えると、現時点で自分が自分であろうがなかろうが地球全体としてのエネルギーは概ね一定であろう。死後に灰と化したかつて私を構成していた物質は土の中で微生物に分解され、別の何か、植物がある

いは動物か、を構成する。現在は自分という姿をしているが時の流れにしたがって物質は形を変え、自分が現在の姿であろうとなかろうと全体としての秩序は保たれる。

そんな中で物質としてのサイクルには還元できない要素が一つだけある。それが「自我」であろう。そして「自我」は自分が「ある」という具体性を付与する。この具体性に起因する生への執着を排除し「空」を悟ったところに私の目指す理想の境地—本当の意味での死の超越があるように思える。

第五章：限りなく透明に近いブルー

しかし、である。理想は実現しそうもないから理想なのであって突発的な感覚、あるいは分かったような言葉を並べ立てて理想論を押し切ろうとすればそれは観念界のお遊びに終始してしまう。

それならば現実を見据えたうえで論を立てよ、ということになってくるのだが、21年間の人生経験しかない私から紡ぎ出される現実的な解決策などたかがしれている。今、図らずも「解決策」と言う言葉を使ってしまったが、それは現時点において最も蓋然性が高いと私が認識するものということ以上を決して意味しない。

ここで第二章の後出しじゃんけんに引き続き反則技をつかうこととする。ここまでは自力本願の「悟り」の方向性で話を進めてきたが、「悟り」と対立する概念である他力本願の「救済」の視点を援用する。

現代社会において悟りを目指す生き方を貫徹するのはさすがにハードルが高すぎる。それゆえ私は「悟り」＝透明ではなく、多少雑念が入った「限りなく透明に近いブルー（内容的には全く関係ないが村上龍氏の小説のタイトルから拝借）」を目指したい。死の超越のために自力で為せることは追求するが最後の一押しは「他者」にゆだねる。この「他者」が何にあたるかはまだ分からない。一番もっともらしいのは「家族」であろうか。世間で往々にして語られる「子供のためなら死んでもいいと思った」という台詞は私のイメージする死の超越に近いように思えるのだが、この感情を「未婚ハ子なし」の私が理解できるはずがない。そもそも家庭を持ったからといって全員が抱ける類の感情ではないだろうとは思うが。補足になるが、死の超越とは「死んでもいいと思う」ことであり「死にたい」とは本質を異にする。そして後者の場合には死の超越はなされていない。ただし、ここでの「死にたい」は現前の苦痛からの逃避という文脈で語られることを想定している。よって、一般的な自殺は後者に属するが、例外として三島由紀夫のように死ぬことが自己実現の手段であり進ん

でそれをなしたような場合は前者の範疇となる。もっとも彼の内在的論理をすべて紐解くことは出来ないのもその真意は明らかではないが。

死の超越は前掲の「イワン・イリッチの死」でも描かれているが、またしてもこの作品を引用するのは野暮なので、五味太郎氏の言葉を引いてこの章の結びとしたい。

〈ついこの間、ふっとこのまま死んでもいいんじゃない、と思ったのです。死にたいと思ったわけではありません。死んでもたいしたことないと思えたのでした。ほんの一瞬でしたが。ほくは45才です。〉（五味太郎 「じょうぶな頭とかしこい体になるために」 ブロンズ新社 2005年 75ページ）

結び—庄内セミナーという空間

庄内という平時とは異なった空間に身を置くことで、慌ただしい日常の中では目を向けることを怠りがちなトピックに真剣に向き合うことが出来た。そんな中でのメンバーとの対話を含めたコミュニケーションは、稚拙な表現になってしまいが、大変有意義であった。

共にセミナーをつくり上げてくれたメンバーには本当に感謝している。ありがとうございました！

そして再び私は慌ただしい日常の中に置かれ自省をするゆとりもなく生活している。秀吉風に言うならば「庄内のことは夢のまた夢」の状態である。そのような日常では既成の前提を一つずつ疑ってはまともに生活できない。またふとした時に日常では埋没している問題に向き合えたら、と強く思う。

最後に、私が歩んだ人生はまだ21年であり、そんな若僧が死生観を語るなど思い違いも甚だしい。なぜなら経験不足の私の視点とは全く違ったところに幸福が転がっている可能性が非常に高いからである。それゆえこの先に経験を積み重ねていく中で見解が二転三転することはほぼ確実であると言える。しかし現時点での自分の足跡を刻むことには何らかの意義があると信じてつづ良識に麻醉をかけて何とかここまで辿り着いた。

「死」を見つめた上でそれを超越し力強く生きる。そして「ああ、いい夢見たな（他の台詞にも代替可）。」と思いながら幕を引く。そこに幸福がある。死ぬために生きるという逆説である。これと類似した思想は葉隠にも示されている。葉隠全体を象徴する最も有名な一節を引いて結びとしたい。

武士道というは、死ぬことと見付けたり

こころと身体 なかとそと

経済学部 4 年 小倉 良和

今回のセミナーの二日目、加藤医師からこころと身体の関係について講義があった。その内容は、西洋ではデカルト以来こころと身体は別だという考え方があり、一方日本ではこころと身体を一体として考える伝統があるということだった。さてどちらが正しいのだろうか。答えはこれらの命題の中間にあると思う。つまりこころは身体と自分が思っているものの中に存在すると感じられる。本稿ではその点と庄内セミナーなどでの経験を踏まえて、こころと身体の関係について考えていきたい。そしてそのあとと生命の絡みについて若干の考察を試みたい。

こころが身体の中にあるということを最も感じられるのは、どのような時だろうか。それは病気の時だと考える。具合の悪い時を考えてみればいい。きっと機嫌が悪いだろう。あと元気がなかったりすることもあるだろう。このことからこころと身体が一体なことが推測される。では逆の事例はなんだろうか。靴を履いているときを考えてもらいたい。自分の身体でもないのに靴の底が感覚を伝えていることに気が付くだろう。こころ＝身体ではないことがわかる。しかしもう少し考えてみよう。靴をこころが自分の身体だと思っていたとしたら。こころは自分の身体と考えているもののなかに存在するのだと考えられる。

ここで私の経験をもとに考えてみたい。私は中学時代から陸上競技の中長距離走に取り組んできた。800 m 走、1500 m 走、5000 m 走、マラソンに出場してきた。まず思い知らされたのは、こころと身体ダイレクトな関係だ。足が痛いと感じる、酸欠、水不足で暑くて苦しい。ここまで来るとこころと言っているのか迷うほどのものである。それほどのものでなくても、足を運ぶたびに、前に進んでいることを感じる…それは確かに感じたことである。痛みにせよ、水不足にせよ、体のなかで。その一方で一緒に走っている人の好き嫌いは、恐らく体感的なものではない。その人の顔立ちや表情、言葉をもとに、頭で感じたことであるからだ。外からはいつてくるものと言てよい。ここでこころと身体の関係性を考えると錯乱する。体の中で感じることは、こころと身体的一致を示しているものであるが、体の外から感じるものは確かに身体（耳や目）を介しているが、こころと身体一体性を感じさせるものではない。このことはこころと身体の関係を考える際に、その情報が、体のそこから来たものか、なかで感じるものか場合分けしなければならないことを示唆しているよ

うに思われる。

さて庄内セミナーを思い出してみよう。我々は3泊4日の短い日々のなかでさまざまなことをした。講演を聞いたりもした。この合宿がなければ決して出会うことのなかった人々と話もした。鶴岡の街をめぐった。そして山伏体験をした。講演や人々から聞いた話、それはそこからきた情報である。おそらく鶴岡の街も。それに対して山伏体験は、からだのなかで感じる人が多いはずだ。確かに山の空気を嗅いでこちよいかは、こころと身体一体性を感じづらい。しかし煙でいぶされた時の苦しさ、水に打たれたときの寒さは身体の中であら感じたことである。私は山を歩いた時に、物足りないと感じ、走りたいと思った。それはおそらく身体の中で感じたものが少なかったからだろう。

第二段落で、こころは自分の身体と考えているもののなかに存在するとした。それ自体はまちがっていないだろう。金縛りで幽体離脱して自分を見つめているときも自己の身体から考えるものから見つめているのだから。しかしこれまでの話をまとめると、情報が身体の中から来たときはこころと身体一体感を感じにくく、情報がなかのときは、感じやすいということになる。

以上、こころと身体の関係を考えてきた。それは人間の個体という1つの生命を考えることであるといえる。ここからは生命と生命の関係について、動物を中心に考えたい。動物の世界を貫徹する原理、それは弱肉強食であらう。サカマキガイがコケをくい、それをコイが喰らって、そのコイが死ぬと菌が分解し、その養分を植物が用い、また貝に食われる、そういう世界だ。人間の世界ではそういう露骨な弱肉強食はないが、食わせる人と食うひとの関係はあるのではないだろうか。親と子供の関係がそうだし、一生懸命生きて話題を提供する人もいれば、いたずらにおもしろがって消費する人もいる。会社にはいつて利益をたくさんもたらす人もいれば、月給ドロボーもいるだろう。企業の大小問わず。

ここでの弱肉強食の考え方は、動物ベースで、植物が無機物を吸収し、光合成をする過程を、十分に反映できていない。また生命個体について考える際も、人間以外の動物にこころがあるのかという、難しい問題を考察していない。その点をご海容いただき、この文章で何かを感じていただければ、ありがたい。

つながりから見る生命 ～自分ができること～

法学部（政治）2年 加登 聡介

人は人とのつながりなしには生きることができない生き物である。経済的、社会的、文化的または時間を超えて歴史的なつながりを持つ。そして家族などの認識しやすい小さな枠組みから社会、世界など直接的に感知することが難しい大きな枠組みを持ち合わせている。その枠組みの中でつながりを感じてそれが生きがいとなり人は生きていくが実際には常につながりを感じながら生きていくことは非常に難しい。入学、就職などによって今まで属していたコミュニティから半ば強引に退去を求められ、新しいコミュニティへの適応を必要とされる。しかし、それに失敗し、心の病に至ったり、最終的には自殺してしまうケースもある。つまりつながりというものは生きていく上での生命を守る盾としての生きがいに密接にかかわっているものであると思う。

このような考えに至ったのは庄内セミナーでのある出来事が大きな影響を与えている。僕はセミナー中、朝6時ごろに起きて宿泊所の周りを散歩していた。そこは自然に囲まれていて、空気もおいしくてすがすがしい気持ちになることができた。しかし、そこでも自分の中には解消しきれない何かが確実にあった。周りの人たちは非常に意識が高く、セミナーの内容にあわせたり、もしくはそれにあわせない形でも活発な議論を行っており、この機会を有益にしようという思いが伝わってきた。僕自身はそれほど高い意識があって参加したわけではなく、ただ山形に行って楽しく過ごしたいと思っていたので衝撃を受けた。ただ僕はそれをうらやましいと思うとともに違和感を感じていた。それを解消するための何かヒントを見つけるために散歩で一人になりたくて模索していたのかもしれない。そして、散歩している時にたまたまあるセミナーの参加者と出会ったのである。その方も散歩しようとしていたらしかったが僕を見つけると一緒に話そうと誘ってくれた。そこで話した内容は僕がセミナーに際して悩んでいた周りの人の高い意識に関する話ではなく、事前課題の話から他愛もない話まで色々なことについて話をした。その時に僕は自分がセミナーとどう付き合っていくかという答えは出ていないのにもかかわらず、ここからセミナーを頑張っていこうという気持ちを得ることができた。そして様々な方と様々な話をすることができ、またそのうえでセクションを自分なりに意図や訴えかけてくるものを考え、感じながら自分の形で経験をよりよいものへと作ることができたと思う。

つまり一つのつながりがある問題の根本的な解決にはなっていないかもしれないがもっと大きなところでの問題の解決へとつながっていたのである。それは自分の中である種の適当さとなり、悩んでいる問題がどうでもよくなり、生きている今をよりよくしようという思いになった。実際のお会い、対話が自分の中に変化をもたらしたのである。しかし、前述したように人と人の対面だけがつながりのすべてではないことも明らかである。僕自身、直接的ではないところにもつながりを感じた。

このセミナーが開催されるためには多くの人の協力がないと存在し得なかった。この企画を提案して実行に移した教授の方、それに共感を感じて一緒についてきて下さった大学職員の方、また色々と面倒を見てくださった現地の方、はたまた移動するときに使ったJRの職員の方など上げてしまえばきりがないほどである。またその上でそれらの方たちをサポートしてくれている方も考えるとそれ以上に膨大な数となり、またこの計画が実現にいたった現在までに培われてきた技術、思想などの土壌まで考えると自分に関係のないものがあるくらいにまでつながりが広がっていく。その広範的、歴史的つながりを感じつつも僕自身はそれを認識したり、自分の糧にすることで多くの人たちが作ってきたものをよりよいものにする今起こすべきアクションが必要になってくると思う。実際にたとえどんなにすばらしい内容で評価された計画であっても参加者がだれ一人としていなければ何の意味もなさない。つまりこのセミナーはもともと作られてあったものではなく計画者側とそれに賛同する参加者の両方のよりよくしたいという思いが作りだした共同作業によるものなのである。それに成功すると二者に連帯感が生まれる。それが発生したことが自身の楽しさになったり、充実感となる。

ここまで直接的なつながりと間接的なつながりの両方の面からよりよい生命がどうあるべきかをこのセミナーでの体験と合わせて自分と他者という観点を中心に論じてきた。直接の人との対話を楽しみつつも色々な形で支えてくれる見えない人たちへ感謝するとともに今まで形作られてきたものに自分としてできることをやっていくことがまた新しいつながりを生み、自分の生命が豊かなものになっていくのである。そこにつながることの面白さがあるのだと思う。

庄内地方の生命観から現代の「生」を考察する

法学部（法律）1年 亀岡 優輔

自分が、庄内地方で体験したすべてを鑑みるに現代の「生」を考えるためのいい機会を与えられたのだと思いました。自分が庄内セミナーに参加したのは、庄内が現代に残る数少ない前近代的宗教観に培われた「生」の存在する土地であり、山伏、修験道が存在し輝きを残していることに心惹かれたからです。自分は現代の「生」に対して感じているものは三つあります。それは、「死んだら終わりという絶望感」、「命に身体的リアルが伴わないこと」そして「自分を認識する他者の存在の欠如」が存在し命の価値を下げているのではないかとことです。この三点についてセミナー参加以前から比較分析できないものかと考えていましたが、庄内の生命観に心打つものがありました。この三点は相互に影響を与えるものであり、分析の対象とすることで現代の「生」になにか輝きを取り戻すヒントになるのではないかと思います。

まずはじめに、「死んだら終わりという絶望感」に対して考えてみたい。近代に起こった科学革命は宗教の分野である「来世での救済」を否定し、神、仏の存在をも否定した。このような状況では、人は現世中心の考えでしかものを見なくなり、死後のことを考えたり、刹那主義にはしりうる。現世での快楽を求め罪を犯す者や自己中心的で他人の命を軽んじる者を生み出しているように思える。つまり「生」が上記の絶望感から陳腐なものに成り下がっている。庄内の生命観はどういうものだったのか。それを知ったのは今回のセミナーで訪れた注連寺の住職の「死者は過去の人物ではない、未来の人物だ」という言葉からでした。要するに、この地で亡くなった人は自分が死んだときに彼岸で会う人だということを述べていた。庄内の生命観では死者は霊山を通して彼岸へ赴き、お盆には霊山から下って一時的によみがえってくるという。この生命観は不合理だ云々は別として、これに依れば庄内の人々は霊山を通して生き続けるのであり、自分が現在だとすれば、亡くなった親は未来人で、自分の子息もこれからを担う未来人となり一家が途絶えるまで延々と続く生命の循環が発生する。そこでは「生」は現世一回限りでなく刹那主義の出る幕はない。一時の快楽のための罪は永遠と続く罪となり、一人一人の命に豊かさが付与される。これは非常に有意義であるが、このような生命観は現代人が危険視する宗教がファクターで、戦後の日本人は国家神道の反動から宗教にトラウマがあり、宗教による知や生命観に正当な評価が下しにくい状況である。この状況を身体的リアルの欠如がさらに助長する。

続いて、「命に身体的リアルが伴わないこと」について考えてみたい。我々は現在、自分の命に重みを感じられるだろ

うか。確かに、我々の命は尊いものだと頭では理解をしているだろう。しかし、頭だけの理解で足りうるほどのものなのだろうか。このように考えたのは当セミナーで行った山伏体験のうちの一つの南蛮燵の行を体験した時だ。その行は部屋に閉じ込められた後、その部屋で煙を焚き、煙が充満する部屋の中でひたすら座禅をする行でした。自分がこれを体験して一番苦しかったのは呼吸が十分にできなかったことです。この行が終わり、部屋から出て、普段吸っている空気を改めて吸うことで、呼吸できるありがたみが身体感覚と通じて伝わり、感じました。山伏という宗教者は宗教的知識もさることながら、修行を通してその知識や命そのものにリアルな感覚が伴っていたのではないかとその時思った。自分自身あの体験の後、吸う空気に非常に敏感になった。南蛮燵の行は自分の生と死の極限状態まで持って行った。

戦前の日本では宗教において教義や言葉の「命題知」以上に修行と身体「身体知」を重んじていて、山伏の修行も現在よりも広く行われていた。また教育も「心知体」を重んじていた。つまり「心身一如」が日本の宗教、教育では前提であって、それによって人々は知識にリアルを持たせていたのだと思う。翻って現代は、知識偏重、理性絶対を方針としていて西洋の思想界もメルロ・ポンティが取り上げるまで身体視点を残していた。理性が支配する世界の下では感情、情動の存在を原則今まで認めてこなかった。しかし、当セミナーで講演なさった加藤元一郎先生は、デカルトの物心二元論を精神科医としての視点で幽体離脱(Out of Body Experience)の存在から肯定し、そのうえで「私」という精神、魂と身体を結びつけるうえで情動の存在に意義を認めていた。また、情動は意思決定にも影響を及ぼすことから現在の経済学ではプロスペクティブ理論で経済活動を分析するようになった。また精神(理性)と情動だけの関係でなく、身体と情動の関係においてもJames-Lange説から、情動と自律神経活動が並行し、情動に特有の姿勢、動作をとっている人はその情動を体験するということがわかってると講演なさった。(具体例として、上記の説では「悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだ」と述べている)

以上のことから、現在では失われてしまった身体的リアルの視点が再び脚光を浴びつつある。我々はもう一度「身体」を大切にすべきなのではないのだろうか。そのことで、我々の「生」は再び豊かさを取り戻すのではないだろうか。

最後に、「自分を認識する他者の存在の欠如」について考えたい。我々が生きていることを認識するのは自分だけでしょうか。我々は何人の存在なしに生きていくことができ

るのでしょうか。私はこの答えに否と言いたい。認識論には強く踏み込みませんが、認識論的に考えたとき、認識している私 (active myself) を客観的に示すためには同時に認識される私 (passive myself) がいる。つまり認識してくれる他者が必要不可欠なのです。認識論を超えて見ても、生活を営む上で人が一人で生きていけるのでしょうか。もし、一人で生きていけたとしても誰からも認識されないような人生は本当に生きていけるのでしょうか。現代は無縁社会と言われ、孤独死や独り身の生活者の問題が大きくなっている。また、若者も仲間を求め集団に迎合していく人、集団の為に我を殺す人が多い。はたして私たちは孤独な単体なのだろうか。

ここからは最後の点について「他者の存在を必要とする私」と「自分が自分であると信じる私」の二点からアプローチをかけたい。まず、「他者の存在を必要とする私」について論じたい。認識論的なことはさっき記述した通りだが、実際の生活の中で、庄内の土地は農村地帯であるため村民の協力なしに農業を営むことは難しい。それは現代も論を俟たなければ、昔は言うまでもなくそうである。村落共同体は相互扶助と相互監視の効果を果たしており、その一員であることが一体感を人々にもたらしてきた。しかし反面、相互監視のもとでは自由は制限され、秩序を乱す者は村八分にあうなどの空気があったのは否めない。しかし、現代の無秩序に広がってしまっている自由に比べて秩序立てがある分それぞれの人にも平和はあったのではないかと思う。また村民の中の一部としての自分があれば、宗教的思考によって裏打ちされた(偉大な先祖から受け継いで存在する)自分もいる状況では他者が自分の存在を豊かにしている。そのような人々の集まりとしての村落は一人一人が尊く、人間的温かみを持った空間ではなかっただろうか。そう考えると「私」が十分認識される環境は今の我々に不足してはいないだろうか。

もうひとつのアプローチである「自分が自分であると信じる私」は、現代の他人に流され生きる没個性的な「生」を問い直す。自分が当セミナーで拝見した即身仏の解説をお寺の住職に聞いた時は、彼らが、衆生のために自らを犠牲にして

祈った利他主義の鑑だと感じたが、その後の講演で、即身仏が成立する背景に、即身仏となる彼ら自身が社会的に「賤」の部類に属するような人々であり、「死」以外にこの世に居場所がなかったのではという解釈があると聞いて見方が変わりました。完全な利他主義など存在しないのではないだろうかという考えが浮かびました。即身仏は肉体は滅ぼうとも祈り続けることで仏と同様の永遠の生命を得られる。そのとき即身仏になる本人が社会的に「賤」に属する者と知ると、そこには衆生の為ということに加え、自らの存在を後世に残すという利益が得られるのではと思った。即身仏になるには苦行が必要であり、生半可な覚悟では成れないものである以上そこには即身仏になる人物そのものが意志せざるをえないものである。自分の意思で自分の「生」を選び取った即身仏は実存的な生を送ったのだと思う。そこには利他だけでないいわば「利我」がある。このような姿勢は我々が見習わなければならないものではないか。宗教が力を失い、価値相対の世界では絶対的な自分は存在しない。そこでは自分が「生」を選びとらないといけない。自分が「これだ」と思うものを自分で見つけ、それが自分の中で「正しい」ものだ信じ続ける力がないと生きていけない。他人の為だけでない自分の為でもある「生」はたとえ自己満足で終わろうとも正しいものであり、自分の生き方が成立してないなかで他人に奉仕するような行為こそ偽りの行為なのではないかと思う。実存的な生を即身仏から学べたことは非常に意義があった。

以上のように庄内の生命観から現代を考察したのだが、自分はこのセミナーから、昔を学ぶ必要性を痛感させられた。「温故知新」というように、この現代の「生」を豊かにするためには昔から学びとらなければならない。共同体が崩壊したあとの現代は人々が点と点の集合で終始している。この状況を解決するために我々は尽力しなければならない。宗教の再評価、身体的リアルな復権、共同体の再評価と再構築、実存的生の志向こそ、我々の「生」を豊かにするヒントだと自分は確信する。

セミナーを通して考えた生命観

理工学部2年 川野 瑞季

庄内セミナーを通じて体感・体験したことを元に生命について考える。生命、という対象や方向性が多岐に渡るので、今回は特に人間の生命に焦点を絞り論じる。

まず、「自分が生きている」とはどのような状況か。

最初に、「自分」とは何を指すのかについて「身体」という観点を中心に考えたい。私は、庄内セミナーにおける議論を通して「身体はどこまでオリジナルであれば、自分と言い切れるのか」という議題にぶつかった。「身体は何%がオリジナルでない人口的なものに置き換わったときに、自分ではなくなるのか」もしくは、「身体の中の部分が人工物に置き換わったとき、自分と定義できなくなるのか」ということだ。ここで使う「オリジナル」という言葉の定義は「原型・原物、唯一無二のもの」とする。私は初め、自分であるかどうかのラインは、自分のオリジナルな脳を有しているか、だと考えた。オリジナルな脳を持っていれば、自分独自の考えや感情も持つことができるからだ。では、「その脳の細胞が遺伝子操作によって受精卵の段階で人間によって手を加えられていた場合」はどうか。そもそもその脳はオリジナルと言えるのか、という問題になる。手を加えているという点で、オリジナルとはいき切れない。では、その脳を有した人間の姿をした生物は、何なのか。自分を持たない人間なのか。本当に、オリジナルな脳を有しているかどうか判断の基準に成り得るのか。私は現在、この問いかけに対する答えを見つけれられていない。

また、この理論に沿うと究極的には目に見える身体は自分という定義には必要ない、ということになる。しかし一方で、庄内セミナー二日目に行われた慶應義塾大学医学部の加藤元一郎氏が講義のなかでも挙げられた、「東日本大震災によって行方不明となった自らの子供を探し続ける親族」の例を考えたとき、私自身が同じ境遇であつたら同じ行動をするであろう、と考える。これは大きく矛盾してしまう。身体がなくても自分というものが定義できるのであれば、一体何をどのような目的で探すのか。身体は物なのか。私はこの問いにも、現在答えることができない。

次に「生きている」という事について考える。

「生きている」という事を定義するのは難しいが、「生きている」ことを実感する瞬間について言及するのであれば、その例の一つとして、対極である「死」を意識した時が挙げられる。庄内での山伏修行体験のなかで、燻された部屋で耐えるというものがあった。私はこの修行中、「自分はそのまま死ぬのではないか。」と死を本気で意識した。そして、この経験を得たことにより、その後の生活の中でなにか緊張感

のようなものを持つようになった。これは恐らく、「死」がある種のツールとして用いることで、実態のつかめていない「生」というものを見いだそうとしているのではないかと考える。「死」をツールとして用いるという表現は不適切かもしれないが、「死」が必ず存在し皆がその運命を共有しているからこそ、見える景色や持てる感情・思考が存在しているのは事実だ。

ところで、「死」とは何なのであろうか。死んだら終わりなのか。また、死はプラスなものなのか、マイナスなのか。「死んだほうがマシだ。」と考え自殺するという人は少なからず存在する。しかし、本当に“マシ”(＝プラス)なのであろうか。この議題について、私は友人とセミナー期間中に熱心に議論した。未熟ながらここで私たちが至った結論は以下のようなものである。仮に、死後の世界は存在せず死んでしまったら全てが無になるのであれば、死後その死がプラスであったかマイナスであったかの判断は下せないであろう。仮に死ぬ直前にひどく苦しんでいたとしても、死んでしまったら苦しいかどうかを感じる意識さえなくなってしまう。苦しみというマイナスの感情は消えるが、同時にマイナスの感情が消えたことを嬉しく思うことすら出来なくなるのではないかと。あるいは、もしも死後も意識または魂という概念が存在し続ける場合はどうだろうか。自殺を考える程のなんらかの苦しみを抱えていたのであれば、それらからの解放に喜ぶことは、前者とは違い出来るかもしれない。しかし後に、様々な人が努力して生きているにも関わらず、自ら生命を絶ってしまった罪悪感に悩まされるのではないかと。確かにプラスは生まれるかもしれないが、最終的にプラスがマイナスに勝ることができるかは疑問が残る。

結局のところ、死は終わりなのか、という問いに答えることはできない。ただ、一つ思うことは、死なれた側は終われない、ということだ。これは「他者との関わりの中での生命」という、また別の視点の議論になるのかもしれない。死なれてしまった側、残された者は、死んでしまった者との間にある思い出や果たせなかった約束などを抱え続けることになる。一人の人間が死んでしまい、この世から目に見える物体として存在しなくなったとしても、彼の残したものは有形であれ無形であれ、この世からなくなる事はない。

このように、現在の私は多くの答えられない難しい問いを抱えている。しかし、これらの問いが明確になったこと自体が、今回庄内セミナーに参加したことで得た大きな収穫だと考える。以前は、漠然とした言葉にできない何かを抱え、思い悩んでいるだけであつた。しかしこのセミナーを通して、

それらに輪郭を持たせるための、立ち止まるべき位置のようなものを沢山得ることができた。これらを元に、今後時間をかけて考え整理していきたいと思う。そもそも、生命観とは常に変化していくもの、むしろ日々創り上げていくものだと考える。ゆえにこれから、これらの問いに頭を悩ませながら、一方で考えるということが出来ること・生きていることに幸せを感じながら、結論を求めすぎず、思考の過程を大事にしながら過ごさせていけたらと思う。

また、人に自分を伝え紹介し、認識して貰おうと言葉で表現することを通して、自分の性格・考え方の偏り・無意識に重要視しているものなど、ものを考える際の自分の立ち位置を確認することができた。今後は、それを把握した上でどのように相対化し思考していくか、という点を確立することを目指したい。

知るだけで終わってはいけないということを痛感した4日間でもあった。知識を得て、それをもとに自分の頭で考え自分のなかで落とし込むことで初めて、実りある時間を過ごす事ができるのだということを感じたので、今後も積極的に心と頭と体を使って体験・思考し、生きていきたい。

そして、生命や宗教、即身仏に関して知識を深めるなかで、全てにおいて究極的には、「当事者が納得できるかどうかの問題」だということを強く感じた。私にとってこの結論を得たことは、とても強い武器を手に入れたことと同義のように感じる。この極論を頭の片隅に置いておくことで、思い悩みすぎずに楽しく過ごせるようになったからだ。その点でも、今回のセミナーに大変感謝している。

最後になったが、この庄内セミナー開催を企画・協力して下さった地域や慶應義塾の多くの方々、そして沢山のことに気付くきっかけを頂いた庄内地域に感謝の気持ちを伝えたい。そして、一緒に4日間を過ごしたメンバーにも感謝を伝えたい。知識を持ち、それを他者に伝えるため適切に表現できる能力を持っていることはもちろんのこと、当たり前を当たり前に行うことの出来る人たち、礼儀と思いやりを持って相手や物事に正面から真摯に向き合うことの出来る人たち、常に多くのアンテナを張り良い意味で食欲に生きている学生や社会人という人生の先輩に会えたことが、私にとってとても素敵な収穫であった。

「生命観」を考える ～庄内セミナーを通じて～

文学部4年 工藤 春香

(1) セミナー参加前に私が持っていた生命観、死生観、身体観

私は「死」について考える時はいつも、「終わり」「無」といったネガティブな単語を連想していた。死は私たちの人生の終着点であり、死によって私たちが一生をかけて築き上げた経験や思い出、財産がリセットされてしまう。だからこそ「今、この瞬間を後悔の無いように過ごしたい」と私は常に考えていた。

また、「身体」について私は、心と切り離しが可能な「別物」として捉えていた。例えば私は幼少の頃から偏頭痛持ちの体質である。頭痛の日はランダムにやって来るので予測して制御することは基本的には出来ない。頭痛が酷い時は、いくら終わらせなくてはならない課題やどうしてもやりたいことがあるとしても、身体を動かすことが出来ないということがある。この時私にとって身体は、確かに自分の所有物であるにも関わらず、全く制御不可能な状態なのである。このような経験から、私は庄内セミナーに参加するまでは「身体と心は別物である」と考えていた。

(2) 庄内セミナーを通して学んだ生命観

庄内セミナーを通して特に自分にとって印象が大きかったものが二点ある。一点目は、湯殿山注連寺と湯殿山総本寺大日坊瀧水寺で観た即身仏である。二つの寺で即身仏についての話を聞いたが、どちらの住職の方も共通して、「一世行人達は荒れた世の中と民衆の救済を願い修行を経て即身仏となった」ということを言っていた。ここで私は、「死が持つ“つながり”」の可能性を感じた。即身仏となった者達の死は、その時代の民衆、その後の世の中に繋がっている。そして、数百年という時間を経た現代にも形を残し、私たちへと繋がっている。以下は「死とは何か」という問いについて決まった答えが無いことを承知の上で述べる。もしも死が、私がセミナー参加以前に捉えていたように「終わり」や「無」を指すのならば、即身仏は単なるモノとしての死骸と扱われ、廃棄されていたであろう。しかし、私たちにとって死とは、ただの「終わり」ではなかった。私たち人間は、死んだ者に対して尊敬や崇拝の念を抱いたり、誰かの死から何かを考えた

り心理的に影響を受けたりする。実際に、私たちの目の前に座っていた即身仏は、確かに観た者に畏敬の念を抱かせるような「何か」を持っていたのである。ここから私は、死が“つながり”の可能性を持つということを感じた。

二点目は、慶應義塾大学先端生命科学研究所（以下 IAB）で現在行なわれている遺伝子の研究についての話である。IAB では、バクテリア等の細菌類を USB メモリ等のように記録媒体として使用するという実験が進められているという話を聞いた。全ての生物は、その固有の遺伝情報を記録するゲノム（染色体、遺伝子）を持っている。バクテリアのゲノム DNA 配列に人工 DNA 配列を挿入することによって、データをバクテリアに長期保存する、というものである。一見、これはパラレルの世界のような話であるが、この研究こそが「生命のもつ連続性」の他ならぬ証明になるのではないだろうか。私たちが現在使っている USB メモリや CD-ROM 等の記録媒体には、いつか「モノ」としての終わりがやってくる。これに対して、バクテリアには数百年から数千年もの間、記録を保存出来るという。モノには終わりがあるが、生命には繁殖、生産といった無限の“つながり”の可能性があるのである。私は IAB でこの実験の話を聞き、生命が持つ連続性の偉大さについて感銘を受けた。

(3) 庄内セミナーを通して感じた身体観

庄内セミナーにおいて印象的だった議論がある。それは、「身体は心を表現するものであるか」というものである。私たちは空腹を感じると、お腹の音が鳴る。悲しみや悔しさを感じると、目から涙が出る。しかし逆に、頭痛から「頭が痛い」と感じるように、身体の状態が感情に影響する場合もある。また、自然に涙が出るといった状況のような、心と身体どちらが先に反応したのか説明し難いという場合もある。

この議論を通して私は、身体と心は別物なのではなく、互いに相関して成り立っていると考えるようになった。そして、身体と心の両方を持ち合わせたものこそが「自分」「自己」なのではないだろうか。

また、セミナー二日目での慶應義塾大学医学部精神神経学教室の加藤元一郎先生の講演において、「日本人には死体が無いとその人の死を認め難いという心性がある。だから日本では脳死判定や臓器移植がなかなか進まない。」という話を聞いたが、これが大変印象的であった。私たち日本人が特に「心身相関」の考え方を強く持っているということがわかる。私たちにとっては、心でも、身体でも、そのどちらかが欠けてしまっているのは、それは「自分」ではなくなってしまうのである。

(4) 気付き

今回、生命の連続性、心身相関、宗教観、そして庄内の伝統文化等、私がセミナーにおいて学んだことは沢山あった。しかし、一番自分が得たと感じるのは、「気付き」である。セミナーに参加する前は、私は死について「終わり」としか考えていなかったし、宗教についても「憐れむべき偶像崇拜」であると考えていた。しかし、フィールドワークや議論、住職の方の話を聞いてから、自分の生命観に新たに「つながり」という考え方が加わった。宗教に関しても、プラシーボ効果が含まれているとしても、私たちにとって何か意味を与えているからこそまで長い時間を経て伝わってきているのではないかと考えるようになった。来年、社会に出ていく直前に、一見当たり前とも言えるかもしれない、しかし自分の人生にとって大きな意味を持つ「気付き」に出会わせてくれた庄内セミナー、その運営の方々、協力いただいたの方々、そして共に議論を交わし自分なりの答えを探す手掛かりをくれた参加者たちに感謝の意を表したい。

庄内で考える

社会人 首くくり栲象

庄内セミナーはわたしにとって愉快的日々でした。いままも日程表を眺めては、かの日の出来事のあれこれを反芻しています。

それは過ぎた日々をいくぶん懐かしんでいるのですが、それだけではないのです。

できる方法があれば、その方法によって、あの時といまを丸め、もういちど庄内の日々を、ここにいながらあそこにい

るかのごとく、いまを生きたいと思うのです。

ここと、あそこ。いまとあのとき。

ふたつは赤い糸で繋がっているのではない。球体の表面に同次元的に写し出されているのだと…。

われわれは庄内で二つの山を見ました。ひとつは月山、も

うひとつは鳥海山です。

鳥海山は日の出る山と言われ、生を象徴します。翻って月山は、死者の赴く山と聞きました。

ひとはどこから来て、どこに往くのか。また、かようにも問えます。

われわれはなぜ産み出され、生かされ、どこにつれていかれるのかと。

注連寺での即身仏拝観のとき、本殿の右側面、開いた戸の遠望に高い山が見えていました。方丈さんはあれが月山だといった。はたして、すでに、注連寺は月山に位置するはずです。月山に位置する注連寺から月山を眺める。これはどうゆうことなのだろうか。

注連寺の次の大日坊にも即身仏は安置されていました。修験者は自己の身体に衆生救済の願目を背負わせます。その動機を支え続けるのは、自らが犯した罪科への力業なのでしょう。自らを救済の埒外に置き、五穀、十穀を絶つ。皮と骨ばかりの身体に、死後内臓の腐敗を食い止める対策で、水銀を服毒する。

ガラス・ケースに安置された即身仏は即身仏となるために、衆生達は、皮と骨ばかりの修験者の遺体を土中から引き出し、腹をかさばき内臓を取りだし、天井裏に吊し上げ、何十万本かの線香の煙りで何十日間燻す。

修験者に衆生救済の願目があったにせよ、その工程は地獄の形相に思えるが、見事、ミイラ状態に仕上がれば金糸、銀糸の法衣を着せられ、霊験あらたかな即身仏として衆生の眼前に出現する。

罪科にまみれた修験者の人生は、このとき衆生救済の人に変貌するのだろうか。またその変貌が修験者の歓喜なのでしょう。

衆生救済の埒外に身を置き、その力業で苦難に耐えぬいたにせよ、絶体絶命のときはくる。そのさなかで歓喜は沸いてこなくてはならない。元来、救いとはそのようにやって来る筈です。でなければ救いではない。

庄内セミナーの初日。われわれは八朔祭の見学に羽黒神社へ赴きました。深夜の零時、市松模様の装束の山伏が、約百人は居並んでいたでしょうか。わたしたちの到着時、八朔祭はクライマックスにさしかかっていました。ブナの木を井形に組み、椿の木を燃やし、闇夜の境内を紅蓮の炎で照らしていました。山伏はそれぞれ氏名で呼ばれ「承けたもう」と声を発し願目を唱え、長い竿を炎に差し入れる。炎はその度に天空へ激しく立ち昇った。

その儀式のあと、山伏は隊列で神殿へと進み、御神体に拝列し、先達の法螺貝の合図で頭を垂れた。

……われわれは山伏たちの背中を見ている。

わたしは目を本殿の屋根に転じました。茅葺きが施され

ていた。茅の厚みは1メートルをゆうに下らない。その屋根の重量は途方ない重みであることは一目瞭然でした。とうぜん巨木は梁だけではなく至るところに見受けられる。その重みを支えているのは柱だった。大黒柱を見ることはできなかったが、本殿から異様に張り出した庇を支えているのは、左右に配列された四本の柱だった。計ってはいないが、ふた抱えもあったであろうか、杉材で真っ直ぐな柱だ。柱になるために成長の真っ只中で伐採されたのだろう。樹皮を剥かれ、チョウナやカンナで整えられ。爾来、神殿の庇を支えつづけている。

山伏たちは御神体の額面に向かい、黙然としている。わたしは庇を支える柱と山伏が、互いに親く身を寄り添っているように見えてきたが、さらに瞑目をこらせば、山伏たちの沈黙も、柱の沈黙によって支えられているのだと思うのです。

…耐えることだ…と。

わたしはこの庄内セミナーの課題である「生命」に、この一言を当て嵌めていました。生命は耐える。庇を支えている四本の柱はこの一言の美しさだとおもった。

その柱はわたしの中にもあるだろう。かぐや姫の神話のように、狭い関節の中にいるかもしれない。重い性の岩盤の下敷きになってうめいているのかもしれない。

この庄内セミナーの過程がすべて終了したとき、わたしは共に課題を論議してきたグループの仲間に、何が一番印象的であったかを尋ねてみた。還ってきた言葉は「みんなで討議しあったことです」と。わたしは瞬時に同感であることに気づかされた。まだみんなと別れてはいないのに、すでに遠くはなれ、それぞれが帰る処に帰り、日が陰り、夜がやって来て、ひとりその場に残っているかのごとく同感した。

わたしたちがどこから来たか、そしてどこにゆくのか定かではない。しかし、そうであっても、一滴は水面に確かに落ちて、波面は広がった。いずれ死体となり、ウジ虫を這わせ、その養分は土中に沈む。泥の一粒になるまでどのくらいの歳月を経ていくのか。またその一粒が人形を形成し、息吹をあたえられ、土中から立ち上がるまで、幾万年をついやすのだろうか。一粒の泥。掌に包み、耳に近づける。鈴の音色が聴こえてくるという。

孔子はいう。未だ生を知らず、いづくぞ死を知らん。と、生の山と云われている鳥海山の山頂は、雲が、いまも、旗のごとく翻り、その全貌をようとして見せてはくれないだろう…。

庄内セミナーでの気づき

理工学研究科2年 奥石 治樹

はじめに、私が庄内セミナーに参加した目的は、「今後、自分はどのように生きていきたいのか」という少々重い問いに対する答えを見つけることでした。約半年後に社会に出るという時期に、修行を通して自分自身と向き合い、また、講師の方々や他の参加者の価値観に触れることにより、自分自身が望む人生をある程度ははっきりさせておきたいと思っていました。そして、私は本セミナーに参加することにより、1つの意見を持つことができました。結論から述べると、私は、「今自分が生きていることに感謝しつつ、人生を楽しみたい」と考えています。以下に、「感謝」「楽しむ」という2つの項目に分けて詳しく述べたいと思います。

まず、「感謝」について述べさせていただきます。私は、「今、私が普通に生きていることは、決して当たり前のことではない。生きることができている現状にもっと感謝すべきである。むしろ感謝したい」と考えています。私がこのような考えを持ったきっかけは2点あり、1つはいぶし修行を行う前に山伏修行体験塾の塾長がおっしゃった「この体験をすることによって、おいしい空気を吸えることに感謝しよう」という言葉です。私はこれまで、空気を吸うことを当たり前のことと捉えており、このありがたみを考えたことは、恥ずかしながら一度もありませんでした。しかしながら、私達がおいしい空気を吸うことができるのは、植物という生命体が酸素を作り出してくれるおかげであるということを考えると、植物への感謝の念が沸々と湧いてきました。さらに、私達が日々当たり前に行っていることも、多くの生命体の存在なしでは考えられないことばかりでした。食事をすることは、私達は多くの動植物からエネルギーを得ていると言えます。このように考えると、「いただきます」「ごちそうさま」の意味合いが自分の中で変化してきました。以上のように、私は、塾長の言葉をきっかけに、他の生命体への感謝の気持ちを強く抱くようになりました。さらに、私が「感謝」を意識するようになったもう1つのきっかけは、東山先生がおっしゃった「自分の人生は自分だけでは存在しない」という言葉です。私はこの言葉から、周囲の方々の存在の大きさを改めて意識しました。家族や友人、またメディアを介してしか何うことができない方々も含めて、私はこの方々なしでは生きていけないと再認識しました。そして現在は、周囲の方々と支え合い、楽しいことも辛いことも含め、多くのことを共

有しながら生きていきたいという考えを持っています。このように、私は、東山先生の言葉から、周囲の方々への感謝の念を強く抱きました。

次に、「人生を楽しみたい」ということについて述べさせていただきます。私は自分の感情を抑えつけずに、思いのままに生きていきたいと考えています。これは決して自分勝手に振る舞うという意味ではなく、周囲の目を気にしすぎるあまりに自分の感情を抑えつけることはしない、という意味です。私は、羽黒山に登っている間に「自分は今後どのように過ごしたいのか」ということを考えていました。ようやくたどり着いた答えが、単純ではありますが、自分の人生を思いっきり楽しみたいということでした。そして、私にとって「楽しむ」とは、自分の気持ちを素直に表現することであると、これまでの人生を振り返ることにより、気づきました。さらに、他の参加者の振る舞いを見て、この考えがより強固なものになりました。他の参加者は、意見を述べるときははっきり述べ、楽しむ時はとことん楽しんでいるように私には見えました。もちろん周囲の方々のことを考えた上でという前提があり、その上で自分を出しているように感じました。この考えのもと、セミナー終了後から約1ヶ月半を過ごしてみると、日々の生活をこれまでより楽しむことができていますように感じています。また、自分を出すことで、周囲の方々との関係も、自分が望むようなものへと変化しているのではないかとも思っています。

さらに、東山先生がおっしゃった「こうあるべきだと一つに決めるのではなく、多くの考えがあって、それを一つずつ行動に移していくことが大切である」という言葉が印象強く残っています。私は今後の人生について、現時点では上記のように考えていますが、考えが変わる可能性も大いにあると思っています。むしろ、変化を恐れず、新たな発見を望むような人生を送りたいと考えています。

最後になりますが、私にとって庄内セミナーは大変有意義なものでした。セミナーを立ち上げてくださった教養研究センターの方々ならびに先生方、また、講演や体験などを通じて私達に考え、感じる場を提供してくださった方々、そして私に多くの発見をくださった他の参加者に変感謝しております。誠にありがとうございました。

「死ぬ」という生き方

法学部（政治）2年 児玉 早織

幅広い年齢層の仲間と「生命」という一つの主題について考えたこの4日間は、私に新たな生命観を与えるとともに、自身の生命を再考させるきっかけとなった。特に、即身仏の拝観と庄内の文化を体感したことで、私は生命とは精神の認識の一つであると感じた。

即身仏とは、山に籠もり断食をしながら修行に励み、最終的には地中の土蔵の中で瞑想をしながら死を迎える仏教の修行の一形態である。「ミイラ」という訳し方をされることもあるが、その作り方も意義も全く異なるため、適切ではない。ミイラは死後に行われる人為的加工によって死体を長期保存することで、死者の蘇りを目的としている。対して、即身仏になることを決めた者は、死体が腐らないよう漆を飲み、木喰をし、そして食物を断つなど生前から準備をする。そして修行をしながら、最終的に死を迎えることで悟りを開いたことになるのだ。つまり、即身仏の目的は「死ぬこと」にある。では、なぜ通常の修行で徳を得るのではなく、即身仏という過酷な方法を選ぶのだろうか。私の予想と反し、即身仏となった者の生前の身分は「一世行人」と呼ばれる寺の中でも最下層のものであった。彼らは生前の罪悪感や心の傷から、徳を得るため寺に入った。修行に励み、自身を仏教に捧げることで自分の居場所を見つけ、「生」を感じたのだ。例えば、注連寺に祀られている即身仏は、人を殺すという罪を犯した罪悪感から仏教の門を叩き、即身仏となることで、その罪に対する償いとした。したがって、罪悪感を感じたり負い目を感じていた者が、自らの命を仏教に捧げて他者の幸福を祈ることで自己の存在意義を実感することができたのだ。

もちろん、即身仏は宗教的な側面も多く待つ。パフォーマンスとして即身仏は重宝されていただろうし、信者獲得のための手段でもあったろう。セミナーの討論の中では、「寺の宣伝のために即身仏になることを強制されたケースもあるのではないか」という意見もでた。しかし、私は即身仏となった当の本人達は、即身仏になることを自ら希望し、死ぬことによって生きる意味を見出そうとしていたと考える。「死」というゴールを持つ即身仏修行を通し、彼らは魂を鍛え、存在意義を確立したのだ。「死」を持ってしか自己を確立できない彼らに哀れみを感じる者もあるだろう。しかし、彼らにとって死の瞬間が最高に「生きている」瞬間なのであり、即身仏として死を待つ姿が彼らにとっての「自己」なのである。したがって、「自己」を見つけることができた彼らは最高に幸せなのではないだろうか？

この精神を糸塚からも読み取れる。糸塚とは綴織工芸家である遠藤虚籟が、自らの作品をつくる際に出た糸くずを「元は同じ糸くずでありながら、作品とならなかったがために省みられず虚しく捨てられる命」とであるとして、その供養のためにたて

た塚である。この考えの中には、「はかなく生きた者によって支えられている今ある命」を大切にしなければならないという教えが含まれている。そして糸くずは、虚しく捨てられたと同時に、ただの「糸」から「作品となった糸を支えた糸くず」としてのステータスを得たのである。この過程は、ただの「賤」であった一世行人が、即身仏としての死をもってして「聖」となったことと等しい。

私はセミナーで体験した山伏修行でほんのわずかではあるが「死」を感じ、同時に「生」を感じた。修行体験では「南蛮燻し」という、唐辛子の混ぜられた煙を炊きそこに身を置くことで、身の回りに当然の様に存在している空気のありがたさを知るという修行をした。私はその修行を通し、「空気のありがたさ」よりも「生きている」ことを実感した。燻しの中で満足に呼吸もできず苦しさを感じるなかで、私はマゾヒズム的にも「生きているなあ」と感じたのだ。つまり、生きていることが当たり前である私たちにとって「死」は異常な状態なのであり、その異常な状態について深く考えることがあっても、当たり前な「生」について考えることができないのではないかと。

生命とは何か、それを考えることは非常に難しい。なぜなら、死んだことの無い私たちにとって「生」が必然なのであり、「死」がわからない以上それに対する答えは出せない。常に幸せな人は不幸を経験しなければ自らが幸福であるということを感じかないのと同じである。しかし、その「死」は自らのものでなくても良いだろう。例えば、身近な人の死であったり、大病をしたり、そのような方法で「死」が必然のものであることに気付いたとき初めて自らの「生」について感じることはできるのではないかと。宇宙飛行士の向井千秋さんが、宇宙から日本に帰ってきてティッシュ一枚を手にとった時「ああ、これが重力なのか」と感じ、生きていると実感したという。ティッシュを重いと感じることで、「重さを感じないティッシュ」は必然ではなくなる。その過程を経て、今まで見えなかったものが見えてくる。「生」は必然ではない。「死」を認識して初めて心が「生」を認識するのだ。

「生」とは「死」をゴールとした長い道のりだ。そのゴールを目的として走る「即身仏」の考え方もあれば、他者にその道を譲ることに意義を見いだす「糸塚」の考えもあるだろう。その道のりを楽しむことを目的としてもいい。しかし、すべてに共通することは「死」というゴールがあるということであり、そのゴールが見えずにただひたすら進んでしまえば、その道のりは非常に苦しいものになるだろう。私は今回のセミナーでそのゴールを再認識することができた。今後、そのゴールへのアプローチを考えることで、私が存在する意味を見いだし、児玉早織という生命を精一杯生きていきたい。

自分にとっての生命観は

経済学部1年 児玉 隼平

この庄内セミナーでは本当に多くのことが経験でき、またそれを通して自分というものを今一度見つめ直し、様々な考えを持つ人たちと議論をすることでほんやりとながら自分の中の生命観というもの浮かび上がってきた気がする。今の自分にとっての「生命」とは「死」とも密接に関わっているし、「身体」とも深く関わっていると思うが、はっきりとこうであると言い切れるものではなく曖昧なほんやりとしたものである。生命と死と身体との繋がりについて説明するためにも具体的にこのセミナーを通じて体験したこと、考えたことを振り返りながら述べたいと思う。

自分が初めに「生命」について書いたマインドマップでは、その他の部分があまり発展しなかったのに対し、戦争の分野だけ色々な言葉が浮かびあがってきた。それは恐らく自分のバックグラウンドとして広島で生まれ育ったことにより戦争、平和について考えることが多かったからだと思うが、やはり現代において、「生命」をはっきりと意識することは、それこそ3.11の地震などの天災や戦争といった非常時に限定されると思う。逆になぜこのような状態であれば、「生命」を意識するかと言えば、それはやはり非常時においては「死」というものが明確に自分に迫ってきているのだからではないかと思う。

明治時代以前の日本では「死」というものが自分が思うにかなり身近な存在であったと思う。天災や飢饉が起これば、「死」ということが当たり前だったと思う。しかし、明治以降、いわゆる自然的な「死」があまり起こらなくなり、「死」が身近な存在ではなくなるとともに、不自然なすなわち人為的な「死」というものでしか突発的な「死」がなくなった。どういう事かと言えば、戦争などでしか「死」を身近に感じなくなったということだろう。それでも日本は日清、日露戦争といった大きな戦いに勝利をおさめたことでそこでの死者は、なんらかの功績を称えられ名分がたつため、人々は思うことはあってもなんとなく「死」は受け入れたのだと自分は思う。けれど、太平洋戦争で日本が敗れて「なんのために人々は死んでいったの?」ということが解決できなくなった時に「死」というものが忌むべき、そして避けるべきものであるという考えになったのだと思う。そして、現代の若さや美しいものを追い求める風潮化ではより一層「死」が意識されなくなったと思う。

このようになったわけとして、「死」がその瞬間で終わる

ものとして捉えられるものになったからだと思っただけ。 「死」が終わりではなく新たな始まりとして考えるということ。それを即身仏を通して学んだ時に、そのように考えれば現代のように「死」を忌み嫌うものとして捉えることはなくなると思ったし、やはり「生命」について考えるということは「死」について考えることと深く関わっていて、memento moriという言葉があるように死を意識しながら生活することが我々には必要だと思った。

続いて「身体」についても述べてみたいと思う。「死」と同じように「身体」について意識することも「生命」について意識することに繋がると思う。一例として、セミナーで行った修験体験を基に述べてみたいと思う。修験体験では滝打ちや南蛮燻しといった肉体的に厳しいことを行なったが、このような苦行と呼ばれるものが人間には時には必要なのではないかと修行をしながら考えていた。どういう事かと言えば、精神的な苦痛はその人から生きる気力を奪ってその後の行動を起こしにくくさせるが、一時の肉体的な苦痛は普段のありがたさ、当たり前前の良さを改めて実感させてくれて、今後につながるものにしてくれると思うからだ。最も身近に「生命」を感じさせてくれるもの、それが「身体」であると自分は思う。結局自分にとっての「生命」とは、「死」という一瞬で終わるものではなく、その後にも続いていく時間軸における一つの点であると考えられる。

今回のセミナーで議論をしていて、人間における「輪廻」という考えが改まった。今まで自分は、生命あるものが死に至るとそれが新たな生命になると考えていた。けれど、「輪廻」というのは、生命が別の生物に移っていくわけではない。自然的な意味で言えば、土にかえって、肥料となって、ほかの植物や動物の源となったりと半永久的に続いていたり、影響的な意味で言えば、その人が他者に与えた影響が、その影響を受けた人からさらに影響を受けていくという形で受け継がれていくことが輪廻だ」というような考えを聞き、この考えの輪廻なら納得でき、やはり「生命」は「死」という一瞬で終わるものではなく、一生途絶えることのない存在なのではないかと思った。結局、自分にとっての「生命」とはいろんなものと結びついていて存在しうるものでそれ自体で何であるという定義はできないものだと思うが、それでいて自分の「身体」や「自分」以外のものに大きく影響していく最も重要なものであるとも感じた。

「生命」とはなにか

法学部（法律）2年 近藤 啓太

「生命」とはなにか。脈拍があり、呼吸をしていて、心臓が動いている状態、あるいは脳が動いている、といったいわゆる生命活動としてとらえることができる。しかし、この解答では、どこにもたどり着けない場合がある。たとえば、「なんのために人は生きるのか」という問いに対して、「臓器がうまく動いていてくれるから」では問いの答えとはならないときがある。つまり、「生命」というものを人間生物の実際的な生命活動としてだけでなく、その意味づけを行っていくことが必要な場合があるのだ。生きる意味とはなにか、なのだ。そして、その深遠な問いは、人間が生まれ文明がうまれた何千年の間、繰り返し問われ続けてきたものである。

この第三回庄内セミナーを通して、私はこのような意味での「生命」とはなにか、という問いに取り組んだ。大衆救済という大義名分を背負いながら壮絶な自死へと向かう即身仏。偉業を成し遂げる人の影で朽ちていく名もなき人に光を当て、命の尊厳を浮かび上がらせようとした遠藤虚籟。世界最新の機械を備え生命科学の発展の拠点である慶應先端生命科学研究。様々な視点を通して「生命」を考えた。

思うに、「生命」と考えることは否応なしに「生きることとはなにか」つまり自分自身の生き方を考えさせることになる。「生命」のとらえ方によって生き方が変わる。では、庄内人はどのような生命観を持ち、どのように生きてきたのか。遠藤虚籟など庄内の伝統的な生命観は「生きている」というよりも「生かされている」という考え方である。自分だけで完結することなく、人と人との、はかないつながりの中で「生かされている」という生命観。

社会学には「生産関係」という言葉がある。人は生きる上でお互いになにかを生産し、お互いにそれらを消費しあっている。人はみな、つながっている。しかし、「人に助けを求めることも大切であるけれど自立することも大切である」と言われることがある。確かにその通りである。しかし、その場合であっても、「生かされている」ことに変わりはない。なぜか。英語で考えてみる。「自立」とは必ずしも誰の力も必要としない独立を意味する「independence」ではなく本来は支えあいつつも個人を尊重する「interdependence」であるからである。人間とは、独りでは決して生きられないインターディペンデントな存在である。普段は、自力で生きていたとしても、いざというときはお互いの力を貸しながら生きる。

支えあい、という社会性はやはり「生命」の本質的な要素であるように思える。再び英語で考えてみたい（英語を出すのは最後なのでご容赦いただきたい）。英語には「Life」と

いう言葉がある。この単語には大別して二つの意味がある。それは「生命」と「生活あるいは人生」である。生活するという極めて社会的な営みと命を重ね合わせている。二つの意味を「Life」に併存させることで、「生命」の本質を的確に表現しているといえる。

永遠なる生命は存在しない。生と死は表裏一体である。生を考えることは死を考えることになる。死を思えば生を思うことになる。死を恐れる気持ちは、生に対する執着の裏返しであるともいえる。しかし、ソクラテスは『ソクラテスの弁明』の中で、弟子から「死が怖くないのか」と聞かれて次のように語る。

「いや、死んで虚無に帰するのであれば、それは夢を見ないほどの深い睡眠と同じであるから、こんなに素晴らしいことはない。あるいは、もし死後の世界があるならば、そこへ行けばいいんだから別に怖くない。どちらにせよ怖くない」と。また手塚治虫の『火の鳥』の中で、不死である火の鳥は、永遠の若さ、永遠の命を求める人間に対してこう言います。「人生50年といます。50年も生きていて、そのうえ永遠の生命をあなたはほしいのですか。カゲロウをごらんさない。カゲロウは羽化しても胃袋がありません。つまり、死ぬまでものを食べないのです。そのくらいわずかな寿命しか生きていないのですが、その間に交尾をし、子孫を増やし、精一杯生きて、そして死んでいくのです。わずか数日の命でも虫は満足して死んでいくのです。それと同じではありませんか。」と。つまり、できることなら永遠に生きたいと思う。しかし、それがかなわないとわかっているのなら、せめて人間何十年かを精一杯生きがいを感じていきるべきだというのだ。

昔、庄内の地で行われた即身仏は、飢饉に苦しみ多くの餓死者がでた時期に多く行われたという。現代を生きる私たちにとって医療や食料技術は発展し死を身近に感じる機会は少なくなっているが、ないわけではない。地震がある。昨年の東日本大地震を私たちは目の当りした。命が自然の脅威の前に一瞬のうちに奪われてしまう現実には狼狽をした。次に大きな地震がいつやってくるかはわからない。恐ろしいことではあるが、いつ死に瀕することになるのかわからないのが現在なのである。それは今日かもしれないし1年後かもしれない。それが日本である。私たち日本人は昔からそのような自然災害と隣合わせに生きてきた。そうした中で、私たちはどのような生き方を身に着けてきたのだろうか。

ノーベル文学賞作家のパール・バックは『つなみ』という作品の中で、親子にこう語らせた。
子供「日本に生まれて損したと思わんか？」

父「命のある限りは勇ましく生きること。命を大事にすること。わしら日本人は幸せじゃ。わしらは危険の中でいきとるから命を大事にするんじゃ」

この会話の中で、父は自然災害という危険すらも、自分たちが生きることの大切さを実感させてくれるものであるとして捉えるべきであるという考えを子に伝えている。

こうした「死」に対する考え方をみると、「死」とは必ず

しも恐れおののく存在であるとは限らないことがわかる。また、それは先人たちが「死」に直面し思索してきた結果である。

以上の論を踏まえて、いま再び「生命」とはなにか、という問いに答える。私は「生命」とは、人と人との関わり合いの中で、死という有限であるがゆえに命の価値を高めるポイントに向かって進む営みであると考ええる。

「即身仏」の構造の二重性 —「生きる意味」からの離別と、「生きがい」の構築—

文学部1年 坂牛 怜

序論

私の物語るのは、次の二世紀の歴史である。私は、来たるべきものを、もはや別様に來たり得ないものを、すなわちニヒリズムの到来を書きしるす。

この序言をもってF. ニーチェは、これまで人々に「生きる意味」の慣例的な枠組みを与えていたキリスト教の没落を告発し、西洋において誰もが共有する共通の信仰によって秩序立てられていた世界像の崩壊を予言した。この崩壊はニヒリズム——全てが無価値であり無意味である状態——をもたらし、人の生を存立せしめる基盤を不安定にさせ、様々な病理を生みだす。このことは、西洋に限った話ではなく、今や日本を含む先進国にも当てはまることである。

「生きる意味」の原初的な不在は、人間に生きることの虚しさを感じさせる。過去において、「生きる意味」とは自分の属する共同体に内在するもので、共同体の成員に自然に与えられるものであった。そこでは、個人は「物語」の中で生きており、他者の苦悩・死には意義があり、己の苦悩・死にも意義があった。だが現代において近代化を経た文化に生きる人々は、明確な生命観・死生観を含む「物語」を失い、剥き出しの個人として生きている。我々は今や、無数に存在する中から1つの宗教を選んだり、その都度自ら主観的に人生に意味づけをしたりすることで、生きることの無意味性を克服しようとしている。

ところで、「生きる意味」の追求は、自らを充足させる過程の中、他者を大いに排除してしまうことがある。例えば9.11テロにおいては、イスラム原理主義者たちは自らの「生きる意味」を確保するために、ジハードの名のもとにテロを起こし、1995年の地下鉄サリン事件においては、信仰者は生き

ることの虚しさを克服するために社会を崩壊させハルマゲドンを起こそうとした。どれも、被害者にとっても、加害者にとっても、悲劇的な事件である。このような特殊な事例でなくとも、我々は日常的に、自らを満足させるため、意識的ないしは無意識的に、ある価値観、ある立場に立つ人々を排除しているのではないだろうか。

本論では、修験道における即身仏を手掛かりに、積極的な信仰を必要とする「生きる意味」と、消極的な信仰で充分の「生きがい」を区別することで、他者を排除せずに、かつ自らをも充足させることのできる生命観を模索していく。結論を先取りしてしまえば、それは、生命への希望を盲目的に肯定せず、また全面的に否定もせず、その境界線上を目指し、他者とのつながりの中で生きてゆこうとする生命観である。

第1章 即身仏における2重の構造

1. 衆生救済と自己救済の「物語」

即身仏とは、特に庄内地方でみられる、肉体と精神を極限状態におくような荒行を積み、最終的には土の中の小さな空間に座り、自ら断食死することで仏になる行者のことである。一般的には、飢饉など人間の力ではどうすることもできない状況が訪れるとき、衆生救済の象徴として崇められて「生きる意味」と希望を人々にもたらす存在である即身仏だが、実は1つ見過ごされがちな特徴がある。

即身仏を志した修験者の多くは一世行人という、階層が最も低く非常に貧乏であった者たちであった。中には、殺人などの罪を犯して、最早、俗世・社会で生きられなくなった者もいる。彼らの多くが即身仏になろうとしたのは、即身仏になることが民衆の救済へと繋がるだけではなく、自己救済に

も繋がるからである。すなわち、苦行を積むことで超人的な力を手に入れて民衆から崇められ、最終的には仏へと昇華することで、汚れた己の魂を清めて仏となり末永く人々から祈られることで、自己救済が実現されるのである。

自己救済の実現を可能とさせるのが、即身仏におけるもう1つの特徴であり、行者による衆生救済と自己救済の両輪によって即身仏という「物語」は遂行される。さらに言えば、即身仏には2つの軸があり、即身仏を志す行者は民衆から信じられることで自己救済を実現し、民衆は彼らを信じて人柱として犠牲になってもらうことで災害からの救済の希望を抱くことができ、即身仏という「物語」が成立する。

2. 他者を排除する積極的な信仰

このように、即身仏という「物語」は、民衆にだけではなく、衆生救済を目的としている行者自身にも「生きる意味」を与えることのできる特徴を持つ。誰か・何かを救うことが自らの救済、ひいては「生きる意味」へと転じることは、現代社会においても容易に想像できることだろう。このような「生きる意味」をもたらす「物語」として捉えれば、即身仏は形而上学的な形相を表し、機能するには積極的な信仰が必要である。

この積極的な信仰は、即身仏の場合は他者への危害には繋がらないと推測されるが、「物語」の種類によっては壊滅的な事態をもたらす。世界を救うと称して街中でテロ行為に及んだり、国を救うと称して外国人を排除したり、積極的な信仰は過去にも現代にも無数の悲劇を生みだしている。このことは、今日における知的誠実さを持ち合わせた者に、積極的な信仰を持つことを躊躇させるだろう。

3. 「生きる意味」と「生きがい」

それでは、現代人にとって、即身仏は何の参考にもならないのだろうか。否、そんなことはない。即身仏は我々に非常に貴重な示唆を与えてくれる。だがそのためには、即身仏から一切の形而上学的な見方を排除し、一切の物語性を即身仏から剥ぎ取ることが必要である。その結果、現れるものとは、「生きる意味」をもたらす構造ではなく、「生きがい」をもたらす構造である。即身仏には、実は、この「生きる意味」と「生きがい」をもたらす二重の構造があるのである。

「生きる意味」と「生きがい」との違いは何か。先ず、前者が形而上学的であり完全な認識や確認が不可能であるのに比べ、後者は現実の感覚として実在するものである。また、「生きる意味」を認識している時に「生きがい」はほぼ同等の感覚として生ずるが、「生きる意味」の不在時でも「生きがい」は、生じうる。そして決定的な違いは、「生きる意味」が自分の外界に絶対的に存在するのに対し、「生きがい」は、世界・社会・他者と自分との関わり合い・繋がりによって生じる流動的なものだということである。「生きがい」を得る際、積極的な信仰は必要とされないが、後述する消極的な信仰は必要とされる。

「生きる意味」をもたらす「物語」としての即身仏について

では既に述べた。それとは他に、即身仏は「生きがい」をも個人にもたらしることができる。なぜなら、即身仏をきっかけに、個人は実際に、事実として社会と関わり、他者と関わり、その関係の中に意味が生じるからである。即身仏の「物語」は虚構に過ぎないかもしれないが、それを媒介として、自分の属する共同体に貢献したいという想いや、自らの行為によって遺される人々のためになろうとする想いは事実である。その「社会的事実」から、個人は「生きがい」は得ることが可能となる。このように、即身仏には二重の構造が内在し、「物語」としては「生きる意味」をもたらす、「社会的事実」としては「生きがい」をもたらす。

第2章 つながりの中で生きる

1. 「死んだら終わり」でも、「死なれて終わり」はありえない

修験道における即身仏がもたらす「生きがい」を得るには、ある信仰が必要である。それは、ある人の存在は何らかの形で、遺された人々に繋がるという信仰である。当初、庄内セミナーの参加者の多くは、「死んだら終わり」と考えていたが、セミナーを通して「死なれて終わり」ということはありえないと再考する者も見られた。実際、宗教学者の大田俊寛によれば：

このように人は、他者からの保護や教育を受けることによって、初めて生きる存在となる。そして、人が教育において習得する知識のほとんどすべては、自分が生まれる前に存在した人々によって作り出され、伝達されてきたものである。この意味で言えば、人間の生は実は、その人物が生まれる前からすでに始まっている。人間は常に、自分より前に生きた人間の「続き」を生きてゆかなければならないのである。

このように1人の人間の一生は、その誕生で始まり、肉体的な死をもって終わるわけではない。その人生は実は、生まれる前からすでに始まっており、死後もなお継続される。人間は、他者との「つながり」のなかで生きてゆく存在なのである。

確かに人は必ず死ぬだろう。だが、例えば即身仏になることを決断したある人は、自分が死ぬとしても、自らの存在が何らかの形で遺された人々に繋がり、願わくは幸せな結果に繋がることを祈ることで救われるのであり、即身仏という「物語」に対して積極的な信仰を持たずとも、世界・社会・他者との関わり合いからの生きがいを得ることが可能なのである。このことは、即身仏に限らない。万人ではないかもしれないが、世界・社会・他者との関わり合いの中で、自分に出来る範囲で、遺される他者の幸せを願いながら行動することは、自然と「生きがい」を生むのではない。

2. 境界線上へ

前述したように、上記の「生きがい」の構造は、ある人の存在は何らかの形で遺された人々に繋がるという信仰によって初めて成立する。ところが、冒頭のニーチェの予言が描い

たように、近代化を経た社会はニヒリズムに覆われている。キリスト教に限らず、人はあらゆる「物語」に懐疑的になっている。故に「物語」に必死にすがりつくという過剰信仰も起きている。結局のところ、何かに意味や意義があるとか、自らの存在が何らかの形で遺された人々に永遠に受け継がれてゆくなどは、一切は不確定であり、確かめることは不可能である。そうであるならば、上記の「生きがい」の構造が必要とする信仰をも、人は持てないかもしれない。

しかし、冷静になって考えてみれば、何かに意味や意義があるということはありませんとか、自らの存在が何らかの形で遺された人々に永遠に受け継がれてゆくということはありませんなどは、このこともまた同様に不確定であり、確かめることは不可能である。万物を疑い一切を信じないというのも、ある立場に立脚した考えに過ぎず、数ある信仰の1つである。人は、中立的ではありえない。ニヒリズムに襲われ、何かを信じることにアイロニカルになるならまだしも、そこで生命への希望を頑なに否定するのでは、それは生きる意味は必ずあると盲目的になることと同じことである。我々は、絶対性の両極のいずれかではなく、それらの境界線上を目指さなければならない。

これこそが、消極的な信仰である。それは抑制的であるため、積極的な信仰とは違い、自らを充足させることができるとしても、他者を排除することは許されないという立場に立つだろう。この消極的な信仰をもって、人は世界・社会・他

者との関わり合いの中で、他者を排除せずに「生きがい」を得ることができるのではないだろうか。これが、庄内セミナーを通して得た、筆者の生命観である。

結論

以上、修験道における即身仏を手掛かりに、積極的な信仰を必要とする「生きる意味」と、消極的な信仰で充分の「生きがい」を区別することで、他者を排除せずに、かつ自らをも充足させることのできる生命観を模索してきた。それは、ある人の存在が何らかの形で、遺された人々に繋がるという信仰を、絶対的に肯定せず、絶対的に否定もせず、その境界線上を目指し、他者とのつながりの中で生きてゆこうとする生命観である。世界・社会・他者との関わり合いの中で、自分に出来る範囲で、遺される他者の幸せを願いながら行動することは、自然と「生きがい」を生むのではないか、というのが筆者の暫定的な結論である。

参考文献

- 大田俊寛『オウム真理教の精神史 ロマン主義・全体主義・原理主義』、東京：春秋社、2011年。
マシューズ、ゴードン『人生に生きる価値を与えているものは何か』、宮川陽子訳、東京：三和書籍、2001年。
ニーチェ、フリードリッヒ『ニーチェ全集（12）権力への意志 上』、原佑訳、東京：筑摩書房、1993年。

変わったことは？

理工学部 1 年 杉尾 和輝

今回のセミナーでは、始めに「生命」についてのマインドマップに取り組んだ。自分のマインドマップを振り返り他の人と比べてみると、「人間」中心に連想されていることに気づく。「人間」は動物の分類の中の一つに過ぎない。動物より植物のほうが多くの種が存在する。しかし、「生命」の中でわずかにしか占めない「人間」関連の言葉が浮かびやすいのは、自分が「人間」である以上当たり前かもしれない。日常的に思考する内容はやはり自分に関係することばかり。道ばたの植物や身近な「人間」以外の動物を考えることもあるかもしれないが、自分・友人・家族・先生などに関わる事柄を多く考えるだろう。要するに「生命」について何かを述べるとなると、自分の場合は人間中心の「生命」を述べることになる。「生命観」や「死生観」に言葉が変わっても、人間について考えてしまうのは変わらないだろう。

今回のセミナーを振り返ってみる。大まかに、2日目の即身仏は「死生観」、庄内の民や3日目の修行は「生命観」、4日目の生命情報（バイオ）研究は、前者二つを抽象的とする、具体的になり「現代科学の見地」と区別出来ると考えた。注連寺の鉄門海上人や大日坊の真如海上人の見学、加藤氏による即身仏についての講演を通じて、その中で感じた「生命」とは「死」が実現して成り立つ概念であった。自分の願いとしての永遠の命と他者の願いとしての大衆救済を行うためには、少なくとも肉体的な「死」が必要である。庄内地方の民の生き様は、小説『義民が駆ける』にも描かれるように力強い。生きているその「生」の姿が強調されていて、英雄扱いされるような「死」が描かれることはなかったように感じた。その結果生まれた土木工事の技術などは現代に受け継がれているという。貴重な体験であった山伏修行は、当たり前であるが「生」きていることが前提でその中で「死」を実感として意識されることはない。霊山である月山などに登り擬似的な「死」は体験するらしいが、「生」まれ変わる。自分たちが体験することはなかったが、精神的な意味合いでの「死」を体験する機会はあるかもしれない。しかしそれでも今回のミニ山伏修行は「生」が中心であったように感じた。最終日の最先端技術の場である TTCK での生命情報（バイオ）研究は一つ一つの物事を明確にする。「生命」を客観的に無機質なものとして扱ってから、実用化することを目指す過程で実社会の中で生きる人間に還元していく。結果、人間の「生」が

向上されていく。「死」を奥底で意識しているがため、このような研究が進むことも考えらるが、きっかけにすぎず、過程でも結果でも「死」が追い求められることはない。また人間の「生」に直接働きかけるわけではなく周囲（環境・医療・食品）を改善することを目的とする。間接なだけに具体的に進められる。

全体を振り返ってみて、テーマが「生命」であった今回のセミナーでも扱ったのは、人間の「生命」であった。そして改めて考える自分の持つ「生命観」や「死生観」も人間中心である。そこには尊い「生」と避けられない「死」がある。現代的であるのか、酒井氏がおっしゃっていたように、求めるのは「生」であり「死」を積極的に求めるべきではない。死ぬことは決して良いことではなく生き抜くことが大切、と思う。しかし「生」きる過程で「死」ぬことを考えないわけではない。むしろ「死」ぬことを意識して「生」きることがその価値を高めてくれる。命のかけがえなさを教えてくれるのが「死」であると考えからだ。東山氏が話してくださった、命のつながり。この観点から考えると死ぬことは終わりでなく始まりでもある。しかしこれは集団としての人間を考えていると思う。自分はまだ個としての人間を考えたい。

今までの「生」と「死」は身体的な面で考えていた。今でも身体面で考えることは重要だと感じている。しかし、命があること＝救われる、とは限られない。死ぬことで他者を救い、自分も救われることもある。そんな話を知り、身体面だけではなく精神面から見た「生」「死」の重要性も考慮すべきだと考えるようになった。個人的な関心で、仕事で一番「生」「死」に関わるものは医師、特に救急医療の分野であると考えてきたが、精神面から考えてみると、医師といっても精神科、カウンセラー、裁判で決断を下す裁判官、子どもの真剣な悩みに耳を傾ける教師、など様々考えられた。

自分にとっての「生命観」や「死生観」は、人間中心で身体的な「死」を意識するぎりぎりの個人の「生」き方。正直まだ難しいが、この先様々な経験・体験を通じて、「死」を否定的にとらえない、精神面での「生」「死」、集団の中での一部分としての命の肯定、などの要素を含むような価値観（「生命観」や「死生観」）を心の底から肯定できたらもっと異なった考えになるのだろう。

現象

～つながる命～

法学部（法律）1年 千住 貞保

1. はじめに

人間とは「現象」である。私は事前課題で一番にそのことを強調した。人間とは周囲の自然的・社会的環境が作り出す一種の作品なのである。すなわち私の生命観は環境によって形成されるものすべてが生命である、という考えであった。4日間のセミナーを通じて人間中心的ではあるが他の生命観を学ぶと同時に自分の生命観も大きく発展させることができた。

2. 現象

生命とは「現象」である。事前課題で強調した、人間とは「現象」である、とさほど変わらないかもしれないが、これが私が到達した結論（つまり生命観）である。しかし、言葉は同じでも「現象」の意味が全然違う。私が事前課題で「現象」という言葉を用いた際はその今の環境が形作っているという意味で用いたのであったが、庄内セミナーに参加して「現象」とはつまりその環境を形作った生命あってこそそのものなのだ。

庄内酒田市出身の著名な詩人である吉野弘は彼の作品「生命は」に作者の生命観を見事に表現している。この詩は「生命は自分自身だけでは完結できない」と始まる。そして「私もあるとき誰かのための虹だったのだろう あなたもあるときわたしのための風だったのかもしれない」と終わる。つまり生命は自分ひとりのものではなくほかの何かの支えがあってこそ存在するものなのだ。

この詩は三日目の夜に東山昭子さんに紹介されたものであるが、東山さんがメインに話して下さった遠藤虚籟の生き方は正に私の生命観を発展させてくれた。存在する一切のものに意味があると考えた遠藤虚籟は綴織作品作成の際に生じるくず糸を供養するための糸塚を建てたという。これは作品の裏にはいくつもの無駄になってしまったくず糸が存在するが、そのくず糸という無数の生命があったからこそ立派な作品が生まれたのであり、その無数の生命を決して忘れてはならないという思いからだそうだ。

生命はつながっているのではないだろうか。自分の生がたとえ終わってしまったとしてもほかの生命という現象を形成する環境の一部としてどこかで作用したに違いないわけで「死んだらおしまいではない」のだ。

3. 即身仏

二日目に見た即身仏とは死後に人工的に作られたミイラとは異なり、土中に瞑想状態のまま入り衆生救済のためにそのまま飢餓して自分の命を絶つ行為によって生まれた仏様だ。現代の自殺と何も変わらない行為のように思われるが、即身仏は飢饉の際に多く生まれたように他の生命のために自分の生命を絶っており、実際に死後は（保存された場所によって

扱いは異なる様だが）、多くの人々の信仰の対象となる。

また一種の修行でもあり即身仏となったものは永遠の生命を獲得するそうだ。そういう意味でも「死んだらおしまいではない」のだ。

4. おわりに

生命とは「現象」である。現象は自然的・社会的環境によって形成されるものであるが、また多くの生命によって支えられているのである。死んだらおしまいではない。

遠藤虚籟の作品は糸くずが生じなければ生まれなかった。

即身仏は衆生救済のために自らの命を絶った。

吉野弘の詩には「生命はすべてそのなかに欠如を抱き それを他者から満たしてもらおうのだ」という部分がある。生命はつながっていると同時に一つだけでは生きていけないのかもしれない。

5. その他

セミナーに参加して改めて実感したことがある。人間の生命観は大きく宗教に表れているということだ。特に庄内では羽黒山を中心に独特な宗教が形成されていた。

三日目のミニ山伏体験では滝打ち、山下り、瞑想、燻し、火渡りといろいろと体験したが、一連の修行は新しい人として生まれ変わるためのものらしい。つまり、つらい修行を通じて生まれ変わった自分を体現するものが山伏修行であり白い装束を着ていたのは死んだからだそうだ。このように生まれ変わろうと思えば現世の世界でも新しい人として生まれ変わることでできる庄内独特の生命観を体験することができた。深く取り上げることは字数の関係上できなかったが、四日目の夜に旧庄内藩主であり致道博物館館長の酒井忠久講師に紹介された武士道、「武士道というのは死ぬことと見つけたりと前半で死ぬことを説き、後半では死を覚悟して生きることを説く。武士は毎朝改めて死を覚悟し懸命に生き、生死をこえた自由の境地に到達したとき、何ものも恐れることなく仕事を成し遂げることができる。」という独特な生命観を紹介してもらったがとても興味深かった。

他にも慶応鶴岡タウンキャンパス（TTCK）の先端生命科学研究所バイオラボ棟を見学した際には人間の新たな「生」への探求姿勢に間近に触れることができ、宗教ではなく科学を通じた新しい生命観にも接触することができた。

庄内セミナーはとても有意義なものであった。二千字のレポートにまとめるのはとても大変なくらい書きたいことがたくさんあった。最後にこの素晴らしい機会を私に提供してくれた先生方、スタッフ・現地の方々、そして多くの刺激を与えてくれた仲間たちに感謝したい。

生と死、そしてつながり

社会人 高田 裕久

1. セミナーで体験したこと、話し合ったこと、考えたこと

今回のセミナーでの体験、議論の中でたくさんのことを考えました。その中には、これまであまり考えてこなかったようなことへの発見も少なからずありました。これら発見をキーワードとして並べると以下ようになりました。

- ・ 生命的な死と社会的な死
- ・ 生と性
- ・ 欲望と不安
- ・ 罪の意識、そして赦しへの渴望
- ・ 連続と断絶
- ・ 生命についてのなぜ (What → Why)

このレポートでは、これらの発見を再整理していきたいと思います。

2. 生命的な死と社会的な死

まず、人間の死には、「生命的な死」と「社会的な死」があるのではないかと、という問いかけがありました。この比較は新鮮でした。

「生命的な死」というのは、文字どおり生き物としての死。生命が生体としての活動を終了してしまう死のことです。これを法的、社会的にどう定義するのか（脳死など）について難しい問題はありますが、死について一般的に受容されている概念だと思います。

生命的な死が不可避であることは、誰も否定できない真実です。死後にどうなるかは、誰にもわかりません。腐敗したり焼却されたりして細かい分子に分解され、その分子が再び宇宙の中の物質循環、生命循環に組み込まれて永遠に死と再生を繰り返していく。。。

こういう生命認識は、さまざまな宗教の基礎になっていますし、モノは言いよう、というレベルにおいて科学的にも間違っていないと思います。

一方で、「社会的な死」。これは、生物としては生きているにも関わらず、人間としてのつながりから排除されてしまう死です。病気とか貧困、あるいは差別とか、いろんな理由で、社会の中でつながりを失ってしまう状態のことです。人間が人間である前提である関係性を喪失する以上、これもまた一つの死でしょう。

この死もまた、たぶん不可避のこと。生命的な死を迎えれば、社会的にも死にます。人間のつながりもまた永遠ということはありません。生命的な死と社会的な死が同時であることを誰しも望みますが、なかなかそうも行かないようです（例えば、老いに伴う痴呆）。

ここで、死が怖い、ということに話をつなげます。私たちは、生命的な死に伴う苦痛が怖い。そして、社会的な死に伴う孤独が怖い。もちろん両方ともが怖いわけですが、死にたくない、という思いを抱くときに、より恐れているのは、後者のほうではないでしょうか？ つまり、病気は苦しいけれど、死ねばおそらくその苦しみから解放されるだろう。

一方で、自分が大切に思ってきた人間関係を絶たれてしまう。。。生命的に生きている限り、その苦しみは続くでしょうし、生命的に死んだあともその苦しみは終わらないかも知れない（死後の世界があるか否かは不明だし、そこでかつての人間関係が再生するかも不明です）。

このように、生と死という個人的なことがらを考えていくことで、それは関係性の重さ、という社会的なものに行き着いたのです。これは、私にとって意外なことでした。

3. 生と性

「生」と「性」との密接なつながりについての問題提起がありました。また、自分の性（例えば女性であるということ）を、特に心との関係でどう理解して良いのか、という疑問も出されました。主として年齢的な要因だと思いますが、「性」について考えることの少なくなっていた私にとっては、新鮮な指摘でした。

「性」は「生」の源であり、豊かな歓喜をもって祝福されるものであること、言うまでもありません。一方で、「性」ほど、人間にとって厄介なもの、つきあいにくいものものないのでは、と思います。

セミナーでの問題提起は女性参加者からのものでしたが、男性にとっても「性」はとても悩ましいものです。性に関する欲望に対して、男性は常に愚かで時に滑稽なほど弱い存在です。私をはじめ、多くの男性参加者は、自虐とともにこの思いを心中に秘めていると思います（まあ、コッパズカシイことばかり。。。！）。

一方で、女性の性についても、男性からは理解困難な懊悩があるのでしょうか。そこに越えがたい壁があることは事実で、この議論を直線的に深めていくことは（少なくとも私には）容易ではありません。双方とも相手方の悩みをかいま見たときに、一定ラインまでは苦笑、そこを超えると嫌悪、ということかと思います。かなうことならお互いに、苦笑の範囲を広く、嫌悪の範囲を狭く、と願いたいものです。

もうひとつ、人間のつながりは、全てが性によって影響を受けるものではありません。むしろ、性の影響を受けない関係性が広く張り巡らされています。それは、性を介すること

で形成された関係性ほど深いものではないかも知れませんが、豊穡さにおいてははけっして劣るものではないと思います。このあたりのことは、多くの参加者が共通の認識とするところではないかと思っています。

4. 欲望と不安

修験体験を終えたあとに、全ての参加者が最初に抱いた感想は、「水ウマ〜」、「空気ウマ〜」、「メシウマ〜」ということだったと思います。死と再生の疑似体験をした後につくづく感じたのは、欲望に満ち満ちた生への肯定と感謝だったのです。これまた、馬齢を重ね、欲望にすらちょっぴり食傷気味であった私にとっては、新鮮な発見でした。

さて、生命的な存在としての人間にとっての欲望は、食、性、睡眠、清潔といった生理的欲求です。私は、これらの欲求は切実ではあるものの、おのずから限りがある、満足があるものだと思います。いかな大食漢であっても胃袋の容量に限界がありますし、いかに美味しい料理でも毎日同じものを食べると飽きてしまいます。そして私は、この豊かな時代に生きているので、これらの欲求が満たされない状況、例えば飢えや渇き、への不安というものを、正直なところ想像ができません。この鈍感さは、まことに幸運の産物と感謝すべきものですが、身体への感覚を弱くしているということでは危険であり、例えば武道やスポーツ（そして修験体験！）により意図的・人為的・定期的に補強していく必要があると思います。

一方で、社会的な存在としての人間にとっての欲望は、認知、共感、愛情、あるいは優越、支配、憎悪といった関係性への欲求です。私が思うに、これら関係性への欲求は、人間を人間ならしめている特徴ですが、一方で実に厄介なものです。

まず、キリがない。例えば、人に認められたいという欲求は、およそ限りがありません。100人に賞賛を受けた人は、1000人の賞賛を求めようになります。

次いで、比べる。例えば「満腹」という生理的欲求は絶対的なもので、自分の食欲が満たされれば、他人が隣で何を食べていようが、あまり気にならないでしょう。ところが、例えば「優越」という感覚に代表されるように、関係性への欲求は相対的で、自分と他人を常に比較することでしか、その充足を測れません。

そして、不安。社会的な欲望を上手にコントロールできている人間、例えば地位・名誉やおカネをあまりガツガツ求めない人も世の中には少なからずいます。但し、これらの人たちほど、自分が社会に対して現に持っている関係性（「出来たお人や」という評判とか、ささやかな経済基礎）を失うことを人一倍恐れていたりします。つまり、関係性は、欲望において際限が無いばかりか、不安においても底知れぬものなのだと思います。愛する人を失う不安は、愛する人を求める欲望よりも大きい。そんな気ずらすのです。

5. 罪の意識、そして赦しへの渴望

人間が生きていく限り、罪の意識とは無縁ではありえません。罪そのものは、理屈から言って、宗教的な存在（例えば、神様や仏様）を前提とするものかも知れません。しかし、宗

教を持たない人間の中にも、罪の意識、すなわち良心と良心に反する後ろめたさ、は普遍的に存在すると思います。そして、多くの人間は弱いものですから、罪の意識を持つことは、それを赦してもらうことへの渴望につながります。罪を罪として背負い続ける覚悟のある人たちのことを虚無主義者（ニヒリスト）と称するわけですが、私は完全な意味でのニヒリストは現実には存在しないと思います。

生命的な存在としての人間にとっての罪は、生きていくために絶えず他の生命（動物や植物）を奪っている、ということです。そして、その罪を償い、赦しを得る方法は、死体が腐敗したり焼却されたりして、細かい分子に分解され、その分子が再び宇宙の中の物質循環、生命循環に入っていくと観念することだと思います。先に述べたように、これは科学的には、モノは言いようというレベルで間違っていない、という程度のことだと思いますが、何よりそのように観念することが人間にとって救いなのです。

一方で、社会的な存在としての人間にとっての罪は、生きていくために絶えず他の人間（人間です！）を殺している、ということです。もちろん、現実には殺している（生命を奪っている）訳ではありません。社会的存在としての他者を抹殺する、人間としての関係性から排除している、ということです。より具体的には、病人や老人から目を背ける、貧しい人や能力の劣った人をバカにする、そういうことです。私は、こういう罪を日々犯していることをはっきりと認めます。そして、この罪に対して自分が赦しを得られるのか否か、全くわかりません。

しかしながら、そんな不安を内部に抱えながら、このシャバでの日々をけっこうシャアシャアと過ごしております。そんな人間は私だけではないでしょう。この鈍感さ、我ながらすごいなあ、と感心することもあります。

6. 連続と断絶

生命的な死について、生命循環を措定すれば、死と生が連続し、再生していくこと、上で述べました。文字にすれば至極あっさりしてしましますが、この観念を肝にしっかり据えていくためには、生への感謝を日々あらたにしていこうような心と身体の修練が必要なこと、言うまでもありません。

それでは、社会的な死についてはどうか。人間としてのつながりからの排除・疎外からは、断絶に帰着します。排除・疎外する方、される方の両方に断絶を再生産していきます。そこからの再生は可能なのでしょうか？

世界中の宗教がほぼ例外なく隣人愛、すぐそばにいる人間への寄り添いを説いています。これが天の定めた真理なのか、人間が経験から導出した教訓なのか、私にはわかりませんが、そのどちらであったとしても再び心に刻みたいと思います。

もうひとつは、世代から世代へと人間のつながりを継承していくことです。これはDNAのつながりにとどまるものではありません。世代から世代へ社会をリレーしていくこと。人間が不完全なものであることを認識したときに、この世代をつなぐ連続性の重みを知ります。私たちが職場や家庭、あるいは地域で仕事をするの意味は、そこにあるように私

には思えるのです。

7. 生命についてのなぜ (What → Why)

セミナーでのこの問いかけは、とても重く、うーんと考えこんでしまいました。私には答えが見つかりません。そこで、東山昭子先生のお話の中の言葉（聞き書き）を掲げさせていただきます。

生きる意味の自覚—生きて為さねばならないことに対する覚悟。名も無く財も無く、あたりまえを生きていく。

いのちをつなぐものへの畏敬

また、出羽三山の修験者は、先達の指示に対して「うけたもう」という言葉で応じます。「うけたもう」は、全てを受容する強い意志の表明だと思います。けっして受動の言葉ではありません。そして、この人の世は、無数の「うけたもう」で成り立っていると思うのです。

8. セミナーを終えての感想

空気がうまい、水がうまい、メシがうまい。これらに生への執着と歓喜を再発見しました。そして周りに人間がいて、語り合えること。これもありがたいことだなあ、と。

再生への感謝とともに、喜ぶこと、喜びをともにすることを大切にしていこうと思いました。悲しみ、苦しみ、怒りも避けることのできない大切なものですが、喜びだけは自分から求めないと得られません。

そして、残る人生は、大きな欲に生きたいと思いました。小さな欲は、次から次へと自分を追っかけてきます。キリがない。不安を生む。自分を閉じ込めていく。大きな欲に生きることは、自分のカラを破り、生命を世界に爆発させていく。

こんな思いをセミナーで得ることができました。ありがとうございました。

庄内セミナーを通して学んだこと

法学部（政治）2年 多賀 千智

私が庄内セミナーを通して学んだことを一言で言えば、幅広い視点からの生命観、に尽きる。生命という漠然としたものに、たった一つの答えはない。医学の面、宗教の面、道徳的な面……など、様々な観点から見つめることでその様子は変わる。

事前課題では「心と体と頭」の三要素から成り立っている「自分」について考えたが、まずこの観点から生命を能動的に捉えるということをしたことがなかったので少し苦勞した。「心と体と頭」の三つは互いに密接に関係していると考えたが、なかなか自分の中でうまく纏められなかったのを覚えている。しかし加藤元一郎先生の医学的な観点から見た生命の講演を伺い、その中の「embodied emotion」のお話が自分にとって一番のヒントになったのではないと思う。またデカルトの心身二元論について、自分の本質が精神であったとして、身体が物体にすぎないとしても、自分の親しい人物の死体は単なる物体であるとは考えにくい、という考え方には極めて同感した。また加藤先生の講演を通して、これまでただ勉強して暗記してきただけの哲学者の生命観を初めて噛み砕いてその考え方に近づくことが出来た気がしたので、そのことについても嬉しかった。

庄内セミナーに参加するまで恥ずかしながら即身仏についてほぼ何もしなかったが、実際にこの目で即身仏を拝観し、どのような人々がどのようにして即身仏になったのか、その目的は何だったのかということを知り、仏教的な観点から生命に対する考え方を深めることが出来た。私は中学、高校とプロテスタントの教育を受けていたのでキリスト教的な生命観は身についていたが、仏教的生命観が欠けていたので、このことは大変良い経験になったと思う。キリスト教と仏教の考え方の似ている点・違う点から学ぶことは大いにある。

修験体験では、直接自分の身体を通して生命を感じることが出来た。滝の水の冷たさ、土の感触、煙の中で燻される苦しみ……など、日常生活では絶対に出来ないことを経験し、このことによって、頭で考えることも大事だが五感で感じることも得られるものがあるのだということを学んだ。おそらくもう二度と出来ない経験なので、あの時の感覚を一生忘れないでいたい。

三泊四日の庄内セミナーの中で、一番心に残っているのが三日目の夜の講演で伺った「忠恕の教え」についてである。歴史に名を残す人たちが存在しているのではなく、名も

なく財もなく切り捨てられる命に目を向け、畏敬の念を向けること——これが忠恕の教えであるという。私はこれまで自分の周りの人間にばかり目を向けて、それこそ植物や虫などの小さな命には気をかけていなかったかもしれない。自分が大きな生態系の中で、他の生き物とのつながりの中で生かされている存在だということを自覚し、もっと真心・愛・思いやりをもって生きていかねばいけないのだということを認識させられた。また、「沈んでいく陽は明日出る陽」というお話がとても印象的であった。ずっとつながっていくものがあるように、人が亡くなって、生まれて——生命もつながっていく。そのつながりに目を向けることがとても大切なのだと思った。

慶應義塾大学先端生命科学研究所では、未来的な生命観に触れることが出来た。このまま研究が発達すれば、我々はどうがんなどの病気に怯えなくても済むのではないかという希望を抱かせてもらった。

以上が庄内セミナーを通して学んだ幅広い視点からの生命観である。どれも日常生活からは得られないもので、大変貴重なものであった。最後に、庄内セミナーを通して最も有意義だったと思うことは、自分と年齢の近い人・遠い人の生命に関する意見を聞くことができた、ということである。生命について、という普段の生活の中では話せないようなことを庄内セミナーの中で話すことが出来た。参加者の方々はそれぞれ自分の目的をもってセミナーに参加されていたので意識が大変高く、討論に臨む姿勢・積極性など皆さんから学ぶことが沢山あった。これだけでも十分貴重な経験であったと思う。

そもそも、私は自分の中での生命観をはっきりとさせたくて庄内セミナーに参加した。自分の中で生命とは何かというたった一つの答えを欲していて、それが見つからないとぶれている気がして嫌だったのだ。その時は、「どの視点における」生命観か、ということについては頭にもなかった。ところが庄内セミナーに参加して様々な考え方に触れて、自分の生命に対する考え方が広がって、答えをたった一つに絞ることは不可能になった。しかし私は今の自分がぶれているとは思わない。きっと生命に限らず様々な視点から物事を捉えることが重要なのだ。

庄内セミナーで学んだことを活かして、これからの人生をより考え深くより豊かなものにしていきたい。

死は平等である

経済学部 3 年 塚田 卓満

生命。この世界に生きるすべてが持っているもの。見方によって考え方は様々である。宗教的に見ると人間は神が創ったもので、命は奇跡であろう。一方、科学的に見れば人間は 29 種類の元素で構成されているもので、命は物質でしかないという考え方もある。山形県庄内地方で修験体験や即身仏に触れ、そんな「生命」について考えた。

日本古来の考え方に無常観というものがある。平家物語や徒然草などの有名な古典文学はその考え方を中心としている。変わらないものはない、全てのものはとどまることなく常に変移しているという考えだ。人間の細胞でさえ 4 ヶ月ですべて入れ替わるといわれている。人は必ず死ぬのである。ところで、人は死んでしまったらそれで終わりなのだろうか。仏教ではそうは考えない。輪廻転生することにより人は生まれ変わるのだ。この生まれ変わるという概念は出羽三山で山伏が行う修験でも同様であった。断食しながら床固めや滝行、南蛮いぶしなどのつらい修験を行うことで、俗世間で生きた自分が一度死に、精神的に成長した別の人格として生まれ変わることができるというものだ。生まれ変わることで、それまでの俗世での穢れや罪が消え、新たなスタートを切ることができる。

この修験は 1400 年以上の歴史を持っている。だが、近年になり修験者の数が減ってきているとのことだった。時代が変わり、社会構造が変わったためであろう。社会構造の変化は人々の生命観にも大きく影響を与えている。近代以前は多くの人にとって身分はある程度決まっており、できることは限られていた。その中で輪廻転生や生まれ変わりを信じ、仏教信仰や修験などを通じて来世のために行動していたと考えられる。即身仏はその極みだと感じた。即身仏とは自己の命を棄てることで仏になった者のことである。即身仏になる為には、まず厳しい食事制限を何年もすることで体脂肪を極限まで落とす。そして漆を飲むことによって腐ることを防ぎ、最後は土中に入り餓死し、ミイラ化することによって即身仏が完成する。といっても、失敗する可能性も高く、未だに

掘り出してもらえない即身仏も多いと聞いた。ここで注目すべき点は、即身仏になったものは身分の高い僧たちではなく、身分の低いものや犯罪者に限られていたということだ。彼等はそのまま死に、生まれ変わったとしても、身分が低いままであることは分かりきっていた。だからこそ、自分の生まれ変わった後の地位や身分を高めるために、深い苦しみを味わい、更に失敗する可能性も高い即身仏になる決意をしたのであろう。生まれ変わることを信じ、命は巡るという生命観を持っていたからこそ、そういった考えに至ったのだ。

だが、現在の日本では民主主義のもと思想の自由や職業の自由などの様々な権利が保障されており、何をするにも過去と比べ、はるかに自由である。公共の福祉に反しない限り、誰が何をしようと憲法で保障されている。つまり、来世に期待する必要がなくなったのだ。人々は輪廻転生を信じて来世に期待を持つのではなく、現代を生きることを重視できるようになった。その分、現代の生命観は複雑になったと言える。人の数だけ生命観もあると言ってもいいだろう。昨日もっていた生命観と今日もっている生命観、そして明日もつ生命観は全て異なっているもおかしいのだ。

そんな現代でも、無常観だけは生命に対する共通意識としてあるのではないだろうか。樹はいずれ朽ちる。人はいつか死ぬ。終わりのない生命はない。樹も草も花も、即身仏になった人も、身分の高い僧も、現代に生きる私達も死は免れない。死は平等である。だからこそ、人は限られた時間を、努力し、悩み、必死に生きるのであらう。昔から不老不死は人々の目標の 1 つであった。不死を求め、未開の地は開拓された。不死を求め、錬金術が研究され、科学が発展した。死は原動力なのである。今後、医療科学の発展などにより、不老不死が実現するかもしれない。終わりのない生命が出現するかもしれない。無常という概念すらなくなってしまう時が来るのかもしれない。その時が文明の成長が終わる時なのかもしれない。

身体についてと即身仏について

文学部1年 富田 圭

【身体について】

人間はあらゆる出来ごとに意味を付与する存在だ。

天災や自然の恵み、あるいは他人の振る舞い、そして自己の感情。

その意味が実在するか否かはここでは問わないが、いずれにせよ人は意味をなく奪された形で対象を見ることは出来ない。

人間の身体と心は密接にかかわっている。

それはさまざまな水準で絡み合い時に同一化し時に鋭く対立するが、今書いたような水準、すなわち、人が対象に意味を付与する水準においても、この二つは特殊な形で関わりあっている。

それは心が身体に生じた感覚に対して意味を付与せざるを得ないことから生じる。

たとえば私たちの経験した修験道において、身体は重要な意味を帯びているが、それは刺激によって得られた身体感覚が独自の意味を付与され心象として立ち上がってくるからである。

日常では体験しない数々の刺激が生じさせる意味、そして心象が、同じように非日常的な色彩を帯びるのは必然である。

これはもちろん修験道の一つの側面に過ぎない。しかし人間という意味という病から逃れられない生き物の本質を浮かび上がらせるひとつの例であると思われる。

【即身仏について】

普通、即身仏という聖なる存在は、高位聖職者、その中でもとても徳の高い僧侶がなるものだと考えられがちである。少なくとも僕はこのセミナーに参加するまでそう考えていた。しかし加藤先生のお話を聞くと、それが大きな誤解であることがたちまち分かった。曰く、即身仏は元々は漏れなく身分の低い者、特に罪を犯し身を落とした者だという。

そのことを聞いて多くの人はあるひとつの感想を持ったことだろう。即身仏とは聖なる自己犠牲などではなく、「身分の低い者＝権力の無い者が身分の高い者＝権力のある者に強制された」のであろうと。

しかし僕はこれとは全く別の考えを持った。

加藤先生は、罪を犯した者はトラウマを抱えており、これを癒すことが即身仏のひとつの機能である、とおっしゃっていた。

これに対して、ふつう即身仏は自己犠牲によって社会を救うものだから利他的な動機が根底にある筈なのに、それでは利己的な動機があることになってしまい矛盾するから、二つ

の動機のどちらが本当の動機なのか、という応答があったと記憶している。

しかし、本当にこの二つの動機は矛盾しているのだろうか。むしろこの二つの動機はまったく別の水準にあるにもかかわらず、同じベクトルによって貫かれているのではないか。

つまり、利他的な動機（人々を救いたい）が強ければ強いほど、利己的な機能（罪を贖いトラウマを癒す）が強くなるのだ。

これは逆にいえば、罪が贖われれば贖われるほど、利他的な精神は純化していき、聖性を帯びていく、ということになる。ゆえに、人がある種の聖性を帯びるには、贖われるべき罪が無ければならず、その罪が、それによるトラウマが大きければ大きいほど、聖性は強くなる、ということだ。

高位聖職者が利他的な心情に欠け、罪深い人が情け深かったというわけではもちろんない。そうではなく、むしろ人間が聖性を帯びるまでに利他的になるには、必然的に罪が必要だったのではないか。

つまり、罪を抱えた者たちだけが即身仏になったのは、権力関係によってなどではなく、彼らにしかそれが出来なかったからではないかと思うのである。

徳高き高位聖職者たちは罪に欠けていた。だから罪のトラウマを癒す過程でのみ放たれる聖性を帯びることはついぞ出来なかった。

もちろん何の証拠もない論ではある。

だけれども加藤先生の話聞いてから、この思いつきが長く頭の中を支配しなかなかに抜けなかった。

僕は即身仏を三体見た。

その時点では僕はまだあの事実を知らなかったから、さぞ生前は徳の高い聖職者だったのだろうと単純に感服していたのみだった。

しかし加藤先生の話聞いた後ではまるで感じられかたが一変した。

彼らの生前に犯した罪やトラウマの生々しい感触やその癒される過程についてきわめて具体的で手触りのある空想に想いを馳せることに夢中になってしまったのだ。

僕は彼らが帯びたであろう聖性のかすかな痕跡を自分の記憶の中に見た。

即身仏が現世に未だその形を保っている姿は、さながら罪が贖われたことを証だてているように思えてならない。

「呼吸する身体」の発見

—羽黒修験の体験から—

社会人 中島 雄一

1. はじめに

「息が合う」「息が切れる」「息を呑む」……日本の慣用句には息にまつわるものが数多くある。また、「息」そのものにも「いのち」という意味があるようだ。日本の伝統芸能でも、呼吸は姿勢と同様に重要視される要素の一つである。例えば義太夫節は、人物の造形描写や状況を、声の高低ではなく息の変化で描き分ける芸能であり、武士と町人、老若男女を一人の大夫が見事に語り分ける。また、歌舞伎舞踊である「連獅子」で、親獅子と仔獅子が息のあった毛振りを見せる姿は、観客に深い感動を与える。彼らが日常的に呼吸について自覚的であるかはさておき、我々の日常生活において呼吸を意識する機会は、果たしてどれくらいあるだろう。

本稿では、今回のセミナーの中で特に印象深かった修験体験について振り返りを行う。その上で主に呼吸について体験を再構成し、身体との関係について考察するものである。

2. 修験道と呼吸する身体

(1) 羽黒修験とその体験

今回は、羽黒修験のうち、「秋の峰入り」の一部を体験した。そもそも秋の峰入りとは、毎年八月の末から九月の初めの九日間に行われる修行である。町田宗鳳によれば、各地で行われているもののうち、出羽修験は擬死再生儀礼としての形態が忠実に伝承されているという。すなわち、行者は俗身を捨てて、母体である出羽三山の中に新しい生命となって入っていく。具体的な行としては、「梵天作法」の後、山林抖擻、固打木の作法、南蛮いぶし、柴燈護摩などの試練があり、行者は笈を背負い、空腹に耐えて不眠のまま三山を歩くことで、地獄から如来までの十界をめぐる。そして、峰入り行を終えて山から出る際（出生り）には、赤子が産まれ出るときのごとく産声を上げる。町田によれば、修験道の基本構造は、山を母体として、人間をそこで生れる胎児となるものと考えられるとのことである（五来重によれば、真言宗と天台宗によって、地獄から如来までの並べ方は逆であるとのことだが、ここでは触れない）。

では、修験体験について簡単にまとめてみよう。今回は、先達（先導役）に従って滝打ち、山林抖擻、床堅、南蛮いぶし、火渡りを行った。

まず初めの滝行では、山中の堰と思しきコンクリートの壁の前に胡坐をかき、背中を壁に預けて上から落ちてくる水に耐えた。男性は禪一丁、女性は水着に一枚上を着て、頭に宝冠を抱く。降水量の少ない夏で、例年に比べると水量が少ないとのことであったが、水温は悲鳴が出そうなほど低く、容

赦なく頭上から降ってくる。初めこそ「冷たい！」と声をあげたり、奇声を上げたりする参加者もいたが、次第に沈黙していく。無駄に声を上げるほど、痛みが増すためである。

次に山林抖擻、つまり山歩きでは、アップダウンの緩やかな林道を黙々と歩き、途中羽黒山神社に詣で、その後二千数百段の石段を下った。行の最中は一切無言でとの指示があり、また、急な石段を下るために脇目も振らず歩いた。下山の途中には五重塔の前で床堅、すなわち座禅を行った。朝からの疲れがピークを迎え、参加者の中には眠ってしまうものもいた。先達からは「塔に語りかけるように」との言葉があったが、無心に塔を眺めて終わったように思う。塔のイメージが鮮やかに残ったことを付け加えておきたい。

南蛮いぶしは、他の行と比べて苦行のイメージの強いものであった。当日のベースキャンプである、いでは文化記念館の一室で、唐辛子やその他の香辛料を七輪の上で燻される中に身を置くだけの行であるが、その苦しみは筆舌に尽くしがたいものがある。「空気の大切さを味わう」という目的だと聞いたが、終わった後に外の新鮮な空気を吸っても、まだまだ辛く、口や鼻を濯ぐことでようやく心地ついた。

最後の行である火渡りとして、一尺五寸程度に組んだ簀の上を飛び越えた。羽黒修験では、火で浄化されて生まれ変わるため、飛び越える際に一声上げるとのことで、参加者はそれぞれ気合をかけて飛び越え、全ての行は終了した。午前9時から午後4時まで、ほぼ休憩を取らず、行の最中は一切の水分と食物の摂取は許されなかった。しかし、山の中であったためか、暑さはあったものの喉の渇きを訴えることはなかった。

(2) 「呼吸する身体」の発見

修験の体験とは言うものの、行に際して普段の東京での生活とは異なる様々な制約が存在した。白装束を身につけ、集団で同一行動をする。水分や食物の摂取は禁じられ、時には無言を命じられる。何より先達の指示には絶対に服従しなければならない。そのような制約の中で、逆にあらわになっていくものがあった。その一つが呼吸の自覚であり、それを通じた身体の見え方である。

呼吸についての自覚という点では、山林抖擻と南蛮いぶしが挙げられる。前者は、無言で山中を移動することにより、普段に比べて周囲への観察力が高まり、また体力を維持するために呼吸のテンポも意識された。後者では、尋常でなく辛い空気の中で、おそらく風邪などのときのみ思い出される喉や鼻の粘膜の存在、防衛機構としての咳や涙など（ただし、咳込むと吸気によって粘膜にさらなる苦しみを与えられるの

だが)をしっかりと意識した。これらの体験によって、普段は無意識に呼吸している身体が顕わになった。

次に、意識的な呼吸については、滝行での体験が印象的であった。降りかかる冷たい水の中で、筆者も当初は息を止め、体を硬くして水に耐えていた。というよりは、水の冷たさに体が強張って震えていたと表現する方が正確かもしれない。しかし、そうして体を硬くすればするほど、水は体全体に突き刺さってきた。苦しさの中でふと、四肢を切り離し、内臓だけに吸気が回るように深い呼吸を意識した。そうしているうちに、段々と肩の力が抜けて体が柔らかくなり、体の内側から温かさが生まれてきた。今回の体験は、時間としては10分程度のことであったかと思われるが、呼吸のコントロールをすればもう少し長い時間でも耐えられるように思われた。また、床堅についても、五重塔の辺りは静寂に包まれており、しっかりと背筋を伸ばして息をしていないと、眠りに落ちてしまう危険があったことを付け加えておく。

以上から、日常生活では無自覚である呼吸が自覚され、意識的にも無意識的にも呼吸を行っている身体が発見された。この「呼吸する身体」は、あくまでも個人のものである。セミナーで加藤先生が挙げた「精神と肉体が相関的である」という日本人的な感覚ではあるが、この「身体」は根本的な個として完結しているとはいえない。目視や皮膚感覚は欺けるとの実験例が紹介されていたが、生命活動の根本である呼吸を欺くことはできまい。自己の存在の基礎として、この「身

体」は適当といえるのではないだろうか。

3. 結びにかえて

今回の修験体験を通じて、日常生活で見失いがちな呼吸を意識することで、身体についての自覚を行った。

「呼吸をする身体」を自覚し、個に立ち返ることは、行者が胎児に近づく手段でもあるように思われる。集団で行をする行者は、同時に胎児という個として、母体である山と一对一で結びついている。胎児は会話をせず、自発的に栄養分を摂取することもない。全てを母体から臍の緒を通じて受動的に授かっている。行者の制約はその助けとなる。例えば、行者は先達のいかなる指示にも「うけたもう」としか答えることを許されないが、それはすなわち「請け申す」の転訛とすることである。これは、母なる山から全てを受けるということに他ならない。

個であることを自覚することによって、逆に他を意識することが可能となる。その上で、己が生かされている存在だと自覚することが、修験の一つの眼目なのかもしれない。

参考文献

- 五来重『山の宗教 修験道案内』東京：角川学芸出版、2008年
町田宗鳳『山の霊力』東京：講談社、2003年

SM 的なものと生の実感

文学部3年 中村 香住

今回庄内セミナーに参加して、自分の生命観にはSM的なものが深く根付いていることを再確認させられた。否、私はSM的なものの中で生かされている。

SM的なものとは何か。SMとは言うまでもなく、加虐役のSと被虐役のMによって成り立つ、性的嗜好の一つとしての倒錯プレイである。しかしここでは性風俗としてのSMのみについて考えるのではなく、もう少し広い射程でSM的なものを捉えたい。私のSM観は以下のようなものである。SはMがどのように虐められたいと思っているかを察して、その苦痛や恥辱を(時に半歩ズラして)与える。Mはそれを受けてたとえ嬉しいと感じても、儀礼的に一生

懸命嫌がる。そこでSは再びMが本当に嫌がっているのかフリとして嫌がっているのかを繊細に汲み取り、次にどのような加虐を求められているのかを考え、次の一手を打つ。この円環運動の中で、高みに達していく。SとMは一つの(可変的な)シナリオの共演者であり、このシナリオをどれほど豊かで高次なものにできるかは主にS側の力量にかかっている。Sは、Mの身体／精神の、つまり生の可能性を十分に高いレベルにおいて引き出すために敢えて厳しく振る舞う。しかしその根幹には大いなるものとしての優しさを備えていなければならない。Sとは大いなる父、グレート・ファザーの代行人なのである。

今回のセミナーの中で山伏修行体験をした時、これは一種のSMプレイだと感じた。そこでは大自然がSであり、私がMであった。例えば滝に打たれた時。水は予想以上に冷たく、予想以上に激しく無慈悲に頭を打ち付けてきた。それはまるで自分が石になって水滴に穿たれているかのような感覚であった。しばらくは歯がガタガタ言い、うけたもう、うけたもうと呟き続けていないとやり過ぎせないようなつらさだった。次第に余りの冷却度に脳が麻痺してくる感覚さえ覚えた。しかし数分後には水が温かく感じられるようになり、水を全身いっばいに受けていることに気持ちよさすら覚えるようになった。他にも、山駆けをした時。ただ無言で山の中を歩くだけではあったが、いつ終わるかもわからない道のりを地道に歩き続けるのは予想以上に厳しかった。特にこの時は足袋を履いていたので、土の感覚を直接足の裏に感じ、鈍痛が走った。小さな石や砂利の鋭利な部分がいちいち肌に突き刺さってきた。しかしそれは同時に土を踏みしめるという感覚を生まれて初めてきちんと味わったということでもあり、その瞬間に私は生きているなあとしみじみ実感した。極めつけは五重塔を目の前にしての床固め。坐禅を組んでいる間、五重塔と交信しているかのような感覚に囚われた。五重塔の周りには豊かな大自然があった。空、木、岩、土。そのすべてとコミュニケーションを取っているような感覚に陥った。それまで山駆けをしていたこともあり、途中までは大自然の厳しさ、例えば土の固さや風の冷たさばかりを感じていたのだが、途中からはどこまでも続くかに見える青空と陽射しを受けて煌めく木々の葉に包まれ、大自然に抱擁され、包容されているような気持ちになった。

よく「自然には人間に対する厳しさと恵みがある」などというが、それはつまり自然はそのまま腕のあるSであるということなのではないかと思った。真っ正面から真摯に自然と対峙すると、自然は確かに厳しいが、その厳しさの中にこそ真の優しさを備えているということがわかる。自然は人に厳しさを突きつけるが、それを十分に甘受し味わい尽くす中で、都会のコンクリートジャングルの中には体験できないような爽快感、快感、幸福感に達することができる。

私はこのセミナーに参加する以前から、SM的なものに

生の喜びを感じていた。人とSM的なコミュニケーションを取ったり、SMバーに通って女王様とプレイしたりしている時が、一番強く「生きている！」と感じる時であった。今回の山伏修行を通して、大自然の中でSM的なものを感じ、自分の生命観を追認する次第になった。

このように私がSM的なものを実践している時に最も強く生の実感を得られることの理由は何か。それはSMとは優れてメタバタな営みであるからではないだろうか。SM的なものの枠組みはメタである。SMプレイ自体は外から見れば殴り、叩きなどただの暴力にしか見えないかもしれない。しかしその行為の背景にはSとMのみが共有している文脈、つまりSMのシナリオがある。SとMは加虐／被虐行為を通じて、ハイコンテクストなコミュニケーションを取っているのだ。苛むことが愛になり、一生懸命嫌がることがこの上ない好意と尊敬の表現になる。Sの加虐に対し、MがSの想定できないような面白い反応をすることにより、逆にSが弄ばれ、いつの間にか主従関係が逆転し、Mが主導権を握るようになる。ここには倒錯的な喜びがある。しかしSMはまた同時にどうしようもなくベタなものでもある。誰だって叩かれれば痛いし、縛られれば苦しい。しかし、メタな文脈ともあいまって、これらは次第に快感となっていく。例えば縄による縛りは身体を圧迫するが、極限まで圧迫された身体は今までに味わったことのないレベルでの解放に向かう。こうした、身体に一手に受ける苦痛＝快樂も、SMの重要かつ中心的な構成要素である。

もちろん、このSMのメタな次元とベタな次元とは簡単に切り分けることはできない。むしろその切り分けられないところにこそ、私がSM的なものから生の実感を得ている理由の核心がある。SMにおけるメタレベルは精神に、ベタレベルは身体にそれぞれ呼応する。生とは身体と精神が切り分けられないままに一つになったものであると考えれば、SMとは生の営みそのものであると言うことすらできる。現代の日常の中ではなかなか体感することのできない身体と精神との強い結びつきと円環運動を体現しているからこそ、私はSM的なものに生かされていると感じるのである。

生命とは何かという問いに必要な考え方

理工学研究科2年 萩田 達哉

あるものとは何かという問題に答えるには、2つの方法が存在すると考える。一つは科学的な定義を示す方法、もう一つはそうではない方法である。

科学の世界では最初に定義を示し、以降定義に合致するものが「あるもの」であり、定義に合致しないものは「あるもの」でないということになる。例として「仕事」とは何か考える。科学的には、あるいは力学的には以下のような定義が示される。簡単に言うと、物体に力を加え、その物体が移動したとき、力のベクトルと物体の変位ベクトルの内積で表される量が仕事である。タクシーの運転手が人を車に乗せて運転をしたとして、タクシーの運転手はアクセルペダル（車）に対して仕事をすることができる。同時に車が動けば座席（車）から仕事をされる。この「仕事」は科学の世界においては誰が見ても一致する見解となるはずである。科学の便利な点は、一度定義を決めてしまえばあるもの（ここでは仕事）に対して疑いの余地のない説明が可能であることである。

ところで、この考え方のもとではタクシーの運転手は客に対して仕事をすることはない。文章のみをみると奇妙だが、科学的な仕事の定義に従えば正しい。しかしながら日常的な「仕事」の感覚とは一致しないともいえる。むしろタクシーの運転手は客に対して仕事をしている、あるいはそもそもタクシーに乗っている以上仕事をしているというほうが日常的な仕事という言葉に対する感覚であるといえる。実は、この「仕事」は定義を決めることは難しい。「仕事とは何か」という問いに対して、例えばお金を稼ぐことである、とか人の役に立つことであるというような説明がある。しかし、例えば金をもらえなかったら仕事でないのか、人の役に立たない仕事もあろう、といった反論が出る可能性がある。国語辞典によってもその説明が異なっていたりして、こちらの仕事は人により見解が異なることを避けることができないと思われる。そのかわり、それを説明する個人にとっては自分で納得がいくものであるといえる。

科学的な説明の方法では厳密な定義が決まり、誰が見ても一致する見解ができる。しかし日常感覚から離れたものとな

る。一方日常的な使用感から生まれる定義は厳密性に欠けるが、少なくともそれを説明する者にとって大いに納得できるものになる。

本題である、生命とは何かという問いを考える。ここで科学的な生物の定義を持ち出して、それに合致するものが生命であると言うことはできる。しかしながら、とくに「生命とは何か」という問いに対して必要であるのは科学的な定義ではないように思われる。科学的な考え方、すなわち明確で疑いの余地のないある定義を示すことを目指すのではなく、納得でき得る説明、すなわち後者の説明方法が求められているように思う。

綴れ織りの製作過程において生じる糸くずを供養するという話があった。供養するということから、その人にとってそれが生命であるという認識があるのだと思う。糸くずはおそらく科学的な定義における生物にはなり得ない。生命であると認識する人も多くはないと思われる。しかしながら、ある人にとっては生命なのである。生命とは何かということを考えると、このことは無視できないと思われる。生命の説明には、その人自身が納得できるということに非常に重要な意味があるのである。

先程の例でいう後者の説明である。これは同時に、誰もが納得できる説明はできないということでもある。この点はとくに大切であり、つまりこの問いに対しては誰もが納得できる定義をいくら考えてもうまくいかないのである。そこにはあるものとは何かという問いの根本的な問題がそもそもあるのである。

上記の考察をふまえると、生命を考えるにあたっては、生命とは何かという問いに何らかの定義を持って答えても、それは個人にとってのみ意味のある説明であり、あまり意味はないと考える。あえて言えば、その人にとって生命であると納得できるものが生命であり、他人の存在を意識したとき、なにものもそれになりうるのが生命であるという認識が重要であると考ええる。

死生観からひも解く人間の精神的支柱

経済学部 4 年 長谷川 弘一

私たちは生きている限り、日々何かを決断・選択していきます。その都度必ず自らの精神的支柱を拠り所にします。そういった意味で精神的支柱は、私たちが生きていく上で不可欠なものだと考えられます。しっかりしたものを体得することで、周囲の環境に惑わされることなく生きていくことができます。そのように思考を進めていくと、「精神的支柱をどのように形成するのか」という問いにたどり着きます。このレポートでは、5つの項目に分けて「死生観」という視点から人間の精神的支柱の形成を考えていきます。

1、庄内セミナーに参加する以前の死生観

私の死生観の根本を形成している言葉があります。「君はあの世に何を持っていきたい？金や家のような物質は死んだらこの世に残ってしまう。あの世で幸せに暮らすためにはこの世でどう暮らしたらいいと思う？」一人旅をしているときに90歳の喫茶店のマスターから言われた言葉です。自らの死を受容して、残りの人生をどう生きるかを考えた末の考え方だと思います。これに刺激をされて、私は漠然と心身二元論を支持するようになりました。そして、死後の世界で幸せにくらすために現世はほんの一瞬しかない儚い世界だと思いうようにしていました。しかし、これは思うようにしていたレベルにすぎません。

2、山伏修行で体感した死への恐怖と生への執着

庄内セミナーでは、山伏の修行体験ができます。数ある修行の中のひとつで、私は途中脱落してしまいました。自らの根性のなさが問題なのではなく、重要なのは「このままだと死んでしまう。生きたい。」という内からの強い衝動を感じたことです。この経験はとても驚きました。この衝動によって、初めて本能的に死というものを感じると同時に、自分が生への強い執着心を持っていることに気づかされました。そして、現世をいかに生きたらいいかという問いを他人事ではなく考えるようになりました。

3、超自然の持つ偉大なパワーに救われる人間の心理

庄内という地は大自然に囲まれています。昔から自然崇拝の傾向が強く、自然への尊敬と畏怖の念が時として超自然的

なパワーへと変容して人々の生活を救済します。即身仏に象徴されるように、大衆救済のために厳しい山伏修行をすることで死と引き換えに超自然的なパワーが与えられると信じられています。これは言い換えると、庄内の多くの人々が宗教を精神的支柱として生きていると言えます。無宗教の私からすると、超自然のパワーは現実世界をうまく生きるためのつじつま合わせの考え方だと捉えてしまいます。そんな科学的に明らかに間違った謳い文句でも、信仰は時として人に生きる力を与えます。直面する状況は変わらなくても考え次第では幸せを感じることができます。そこに、私は一種の「人間らしさ」というものを感じました。

4、宗教にすぎる（精神的支柱にする）ことへの抵抗

宗教という信仰が人間の精神的支柱となりうることが庄内の歴史を見て実際に修行を体感することで理解することが出来ました。しかし、私には宗教を精神的支柱にすることに対して抵抗があります。なぜなら、宗教を信仰するということは「答え」を与えられてそれに疑問を抱くことなく「無抵抗に」受け入れていることのように感じるからです。例えば、アメリカに留学してキリスト教徒の方々と触れ合うことがありましたが、彼らは何かに迷ったら全ての答えを聖書に求めます。仏教でもその他の宗教でも同じことが言えます。私はそこに違和感を抱かざるを得ません。宗教を精神的支柱にすることが私にできないのであれば、一体どうやって精神的支柱を作ればいいのかという迷宮に陥ることになりました。

5、精神的支柱を自らが作る決意

以上のことから私は3つの示唆を得ました。一つ目は、人間は信仰によって明確な死生観を獲得して生きる力を得ることができるということ。二つ目は、私自身は宗教を信仰することが答えを無抵抗に受け入れる行為だと思ってしまうこと。三つ目は、私の中に死への恐怖と生への執着が紛れもない事実として存在していることです。これらを全て考慮して、自らの死生観を形成しなければなりません。つまり、私が精神的支柱を形成するためには、特定の宗教ではなく自らが納得いく死生観を創り出していくしかないということが分かりました。

いのちと生活の場

法学部（政治）3年 藤川 淳

我々は、日々の生活の中で「自分が生きている」という実感を得ることはあまりない。「生きている」とはどういうことかと問うこともあまりないかもしれない。しかし、自分が今、本当に「生きている」のか、といざ問うてみると答えを出すのが難しいように思える。毎日、目の前の仕事に精を出し、金を稼ぎ、食べ物を食べて生命を維持する。これだけでもある意味「生きている」と言えるだろう。しかし、これだけではもしかすると「生きさせられている」だけかもしれない。

人間は、周囲の環境との関係の中において自分を認識する。それは人間が自分のおかれている状況を受け容れることではじめて自分を認識できるということに他ならない。つまり、人間は環境に適応して生きる必要があるのだ。しかし、その姿は本当に「自分」なのだろうか。おそらく、環境に適応して生きるだけの人間は、自分を見つめた時に、周りの大勢の他人と同じような性質ばかりをもった自分に気がつくだろう。

ただ、現実として、人間は均質なものではないだろう。人間を均質なものではなくしているものとは何だろうか。私はそれを「体験」だと考える。「体験」は個々人が個別に行うしかないものだ。「体験」は自分の身体をもって経験することであるからだ。人生の中で、他人と同じ体験しかしていない人間というものがいないとすれば、その体験をもとにして感覚を形成する人間は、同じことを経験しても、他人と同じことを感じるわけではないだろう。自分の身体を媒介として世界と交信することで人間は自分の感覚を身につけるのではないか。これが「自分」を形成する段階の一つだと思う。

ここで、自分の「身体」とはどういう性質を持ったものか、という点が問題になる。物体としての身体が自分の「身体」と完全に重なるものであるのか。もしかすると、自分の「身体」は、手の先や足の先よりもさらに遠くまでもそう言えるかもしれない。同様に、絶えず変化を続けている自分の身体について、自分はわかっているのだろうか。認識することはもちろんできていないだろうし、何らかの手段を使っても

コントロールできない部分が身体にあるとしたら、それを自分の「身体」だと断言できるだろうか。

おそらく、「身体」を通じて「体験」するということは、物体としての身体を以て経験するというだけのものではないのだろう。もちろん物体としての身体が存在は必要ではあるが、我々が認識できる以上のものやコントロールできる以上のものまで含めて「体験」なのではないか。

我々が日常生活の中で「体験」だと思っているものと言え、ば、「どこかへ行った」「何かをした」という類のもの、すなわち知覚の及ぶ範囲のものや、事後的に知覚に編成できるものだろう。しかし、人間を構成する「体験」は知覚の範囲を超えたものまで含んでいる。我々は「体験」を計算したり予測したりできないものと考えておくべきだろう。

認識できない「体験」に基づいて「自分」が構成されるとはどういうことか。それは「自分」とは知覚できないものまで含めた総体であるからだ。それは認識されたものとしての「アイデンティティ」のようなものとは少し違う。そして、その総体こそが「生きている」という感覚に関して大きなウェイトを占めると思う。

我々は「生きさせられている」と考えることがある。それは端的に言う、ある単一のコードに従ってしか生きておらず、「体験」による「自分」の形成が非常に薄っぺらいものになってしまっていることに起因している。このような状況から逃れるためには、様々な場所を「体験」することによって「自分」の中に多様なコードを形成することが重要になってくるのではないか。

様々な場所を「体験」するには、むやみやたらと海外旅行をしなくても、日常生活の中に小さな差異を反復すればよいだろう。いつもと違うこと、みんなと違うことを常に求め続ければ、自ずと「体験」が自分の中に蓄積され、「生きる」ための糧になるのではないか。

「身」と「心」

理工学部 1 年 藤田 裕介

今夏、三泊四日の庄内セミナーのプログラムで一番心に残っているのはやはり山伏体験であり、中でも特に滝行であった。滝に打たれると時間感覚を失い、聴覚は水音で満たされ、体温と水温が寄り添うようになり、目を閉じると自分が水、自然と同化したような感覚をもった。これまで「人類は自然をコントロールできると思いついでいる」との指摘になんとなく頷いていたが、人間は自然の一部に過ぎずちっぽけな存在じゃないかと体で確信した。机で本を読むだけでは身につかない考えもあるんだと実感した。また山伏体験を通して強く感じたのは「心」と「身」は密接に相関しているが、今までの自分が「心」に重きをおき「身」をないがしろにしていたという事だ。養老孟司が「バカの壁」の中でこれを「脳化社会」と批判的に指摘しているように、これは僕に限らず多くの現代人にも言えることだろう。

さて以下で具体的に「心」と「身」の関係性や「心」と外界をつなぐ知覚はどんなシステムか？と僕らがアイデンティティと呼ぶものの実体とは何か？について述べたい。ここではデカルトの心身二元論を批判的に検討し、ギブソンの生態学的心理学を軸にこの問題を扱う。またここでは主に河野哲也の「〈心〉は体の外にある」を参考にした。

デカルトの心身二元論は方法的懐疑により最後に「懷疑する自分」が残るとしたが、ある実験によると思考する時、発話する時と同じパターンの活動が運動皮質に見られた。これは懷疑している時にも、音量 0 で発話しているという事である。しかし他者に聞かれぬ発話はそれだけで存在し得ない。よってここから言えるのは聞ける音声でないこの発話は真ではないと言える。

ここで 1 日目に加藤先生のお話されていた幻影肢や、ラバーハンド現象をもとに考えていこうと思う。まず幻影肢にはデカルトも注目しており二元論の一つの根拠としていた、すなわち無いはずの腕が痛むという事実は「知覚部位によらず、脳に到達する信号に場所情報が組み込まれている」という主張だ。しかし幻影肢は治療により治り、また徐々に腕が無くなる患者には見られないという事実が、同じ論理で二元論を否定する。では幻影肢をどう解釈すればよいのか？心理学者のシルダーは幻影肢を「身体図式」という理論で説明した。実は今僕が納得している心身の関係性はこの身体図式の理論である。これは他者から見た心は「個人の潜在的・顕在的行動パターン」であり、すなわち「心」は「身」から生まれるというものだ。デカルトは様々な心的作用を主観的なものとし、また多くの哲学者は知覚される世界は知覚情報を脳が構成し創り上げた主観的フィクションと考えた。身体図式は逆

である、統一的な世界の知覚が先立ち、諸知覚はその中に位置づけられて解釈されるというのだ。つまり幻影肢の例では、患者は心理的な「抑圧」の作用などの影響で、腕がないという脳内の世界認識に更新されておらず、その腕がある世界に位置づけられた痛みが結果的に無いはずの腕の痛みになったというのだ。またギブソンは知覚は客観世界の差異と不変項を認識するのであり、知覚の構成論を否定した。この理論は「客観的世界は存在しないかもしれない」という哲学の大問題に一つの解答を与えたフッサールの現象学とも相入れる。彼はデカルトの方法的懐疑を参考にエポケーを行い「自分がいるという確信」が残るとした。これはデカルトと似ているようで、客観世界の実在を示したが、この確信の起源を「知覚の不変項」とした。すなわち例えば自らの意思で視線を動かしても変化しない項があり、これは自分の意思をこえた実在だと確信でき、これ以上の疑いを持つ動機が生まれない場合に実在を保証する。ギブソンは「自分」とは「環境と相互作用する身体」とした。環境に実在するアフォーダンス（＝動物との関係で規定される環境の潜在的特性）の内どれを発現させるかが個性というわけだ。現代多くの人が自分の個性は内在的な心にあるとして、自分探しの旅に出たりする。しかしある心理学者が玉ねぎと揶揄したように既存の自分をはがし続けた先には何もないのだ。総括すると、実在する客観世界内で他者を含む環境との相互作用の中で発現する行動の集積とパターンこそが「心」であり、僕らが個性と呼ぶのはこれであるから、個性は身体に依存すると言える。

さて今セミナーにおいて個人的に立てていたテーマに宗教や呪術の社会的機能がある。例えばキリスト教信者は自分の中に神という道德の基礎があるため他者の目によらず道德を守る側面があり、病床に伏せた患者が御守りで精神的、そして身体的にも回復する事例がある一方で、新興宗教に金をつぎ込み破産する市民がいたり、原理主義のテロで多くの命が失われたりする。宗教はととても一面的には語れないかもしれないが、ここでは宗教が人生に与える意味について考えたい。以下ではほとんどの宗教にある来世観に焦点を絞り、宇都宮輝夫の「生と死の宗教社会学」を参考にする。

まず 1 つ目に訪れたお寺の住職さんも言っていたが、宗教の持つ説得力の一つはこれまで歴史的に存続してきたという事実だろうと思う。社会学的には、人間はこれからの存続が保証された安定的な社会が用意する行為などの価値観やその集積としての人生計画のレパートリーを選択して、エリクソンの言う人生周期の各段階に見合った行動をしている事の自認から生の安心を得るという。しかし社会には絶えず変化が

起こる。その成員の数や指導者の交替などである。社会の干渉作用を超えた変化に市民は合わせることができずに、安心感を失い、知性に安心を求めようとする。しかしこの試みはあまりに困難で失敗に終わる。そもそも人間の行動原理は社会が与えるものであって、知的な価値観が介入することはもちろんあるが、それは社会の用意する既存の価値観のある一定の枠内での話であるからだ。こうして自分の行為、ひいては人生計画に価値観を見いだせなくなった人間は絶望し、時に自殺を選ぶ。だから宗教の存在意義は来世があるという教えで社会の成員が死と向き合う一助になると思う。これにより人は各人生周期の段階をまっとうして、次世代にバトンを渡すことができると思う。僕はこの点で宗教は社会が存続していくのを補助する機能を兼ね備えていると考える。

最後に2日目に紹介されていた吉野ひろしの「命は」を読んだがとても印象的な内容であった。命は欠如を抱えている、欠如があるから相互に補完するのではなく、相互に助け合うために欠如を持っているというニュアンスを感じた。そして庄内で糸で編みこまれた仏像絵画を見た時、見た目の感想のみを抱くのみで製作中後ろに落ちたであろう糸くずの存在など皆目気にしていなかった事実、僕が毎日見過ごしている多くの死に目を向け、祖父母、両親、そして自分に差し迫る不可避な死を見つめ、それぞれの意味を考える必要性を教えられた気がしたことも思い出した。おそらく僕も見えない不特定多数にとっての糸くずなのだろう、これからは人とのつながりの中で感謝を忘れず、生きていくという方針も大事なのだと感じた。

生命の奥深さ

経済学研究科2年 松下 知宏

庄内セミナーに参加する前、私の生命観は、西洋的二元論に近い「肉体」と「精神」の考え方を基礎とする、単一的かつ固定的なものであった。しかし、本セミナーを通じて、多くのディスカッションや講演、山伏体験、即身仏拝観などで揉まれることで、それは一口に言い表せないものへと変質した。

セミナー内のディスカッションでは、生命の考え方について本当に人それぞれ様々な意見、切り口が出た。多岐に渡るそれらを、自分の中で解釈、理解し、そして分類しようとすると、以下の4つに区分できるように感じる。それは、社会に対する命、肉体としての命、思考としての命、自己実現としての命、である。一見するとこれらは階層的に、前者から後者へと積み上がっているようにも見えるが、むしろそうではなく、水平的かつ相互に連携しながらそれらは密接に関わりあっているものであると感じる。例えば、普通肉体としての命を終えれば、思考としての命も終わるようにも考えられる。しかし、即身仏を拝観して感じた事は、彼らは、肉体として死んではいるが、思考としては生きているように感じられたからである。このように、生命について考えれば考えるほど、その広がりや、複雑性、曖昧さに翻弄されるばかりである。なので、ここでは生命について画一的に定義付けするのは、今の私には無謀であり、本セミナーを通じて生命の多様性を感じたとするに留めておきたい。

では具体的に、本セミナーを通じて生命についてどういった事を感じたのか、個別具体的な側面から考察してみたい。今回私は自己の生命観に対して様々な刺激を受けたが、その中で最も印象的だったものたちは「生命とは身体の適応力である」「生きるとは仕事である」という二つの視点である。

まず、「生命とは身体の適応力である」という考えについて論ずる。加藤講師より即身仏はその極限状態において、医学的には既に死亡していてもおかしく無い状態にあっても、生存していた可能性が高い、またそれらは長い時間や修行を通して体を慣らしていったからであるという話をお聞きした。また、極限状態においては、それほど飢餓や苦痛がないのではないかというお話もされていた。私は山伏修行体験を通して、その片鱗を感じさせていただいた。具体的には、南蛮い

ぶしと滝打ちの際である。南蛮いぶしとは、密室のなかで唐辛子を混ぜた薪などを焚き、その煙に耐えるというものである。山伏体験塾の先生からされた事前の説明では、「結構辛いですけど頑張って耐えて下さい、今まで南蛮いぶしで死んだ人なんていません」というものであった。しかし、実際に燻され始めて最初に私が思ったことは「これ、下手したら死ぬかも・・・」であった。当たり前だが、今まで死んだ人がいないという話は事実であるし、そもそも唐辛子で人は死なない。しかし、実際に体験された方はお分かり頂けるであろう、唐辛子の煙の中で咳き込んだときの、あの絶望感と焦燥感を。ともかく、最初はそのくらい辛かったということである。しかし、その様な焦りや不安のなかでも、じっと耐えていると、自然と煙のなかでも楽に呼吸できる方法が分かってきた。咳き込むと余計つらいので、我慢したほうが良いという事も分かってきた。これらは、試行錯誤の結果頭で考えて導き出した方法ではない。むしろ、体が自然とそちらの楽なほうへと適応していったかのように感じた。また同様に、滝打ちの際にも、途中から寒さを感じなくなるということも体験した。そしてこのような、「慣れ」こそ生命の一側面であるのではないのかと、そのとき感じた。つまり、肉体としての生命力とは、自己の理性とは関係なく、自動的に体が生きようとする力なのではないのだろうか。

次に仕事は生命だという考えは、自分には今までなかったもので、非常に衝撃的だった。確かに、社会的を生きていく上で仕事は比較的大きな割合を占めるもので、それがそれこそ生命だと考えるのは、合理的かつ当然のものであろう。このような考えに触れる事が出来たことも今回このセミナーで得られた大きな収穫であった。

本セミナーを通して生命とはとにかく一義的なものではないことをあらゆる場面で感じた。だからこそ、日常のあらゆる場所に生命の息吹を感じる機会があることも知ることも出来た。自己の命について、とすると、生きていく上でそれこそ当たり前のように感じてしまっている部分が多いかもしれない。しかし、今後は生命の神秘や力強さを少しでも感じ考えていけるような生活を送りたいと思う。

この身体を生きなおすこと

文学部3年 松本 友也

山伏修行体験で自分の中の何かが変わるという甘い期待はもとより持っていなかったが、ある種の「答え合わせ」ができるのではないかという目算はあった。日常の行為や経験を反省したり、書物を通じて学んだりすることで得た自分の身体観は、伝統ある信仰の身体観とどの程度共通点を持ちうるだろうかという、純粋な好奇心があった。自分の考えはそれほど外したものではないだろうという自信も多少はあった。私が当初持っていたのは、「経験と変化の座としての身体」という考え方である。事前課題の文章にはこう書かれている。「私は「私」を、経験や変化にさらされながらも、かろうじて座としての在り方を留めているようなものとして捉えているのである」。今になって振り返ると、この考え方は大きく外しているわけではないが、重要なことを見落としているように思える。それは、この文中で述べられている「経験」というものの内実である。外界から私の身体へと与えられる経験は、私が考えていたよりもはるかに豊かなものだった。それは単に断片的に与えられる情報のようなものではなく、私たちを包み込んでいる外界の全体である。具体的には、それは「土地」と呼ばれるようなものだ。大地や自然といった土台と、そこに暮らしてきた人々の営み・文化の積み重なり。庄内においては、それは独特の自然信仰や宗教観の形で表れていた。

今回のセミナーで最も大きかった収穫は、そうした土地という要素の無視できない重みを実感することができたことだ。土地を抜きにして身体について考えることは、身体を世界から切り離して捉えてしまう悪しき抽象化だと言える。土地の中に埋め込まれたものとして、土地から切り離せないもの、逃れられないものとして身体を捉えなければ、その実質を掴むことはできない。そしてまた、私たちの自己あるいは自我・意識といったものも、その座としての身体（そしてその座としての土地）を抜きにして捉えることはできない。

そうした土地や身体の問題に気付かせてくれたのは、即身仏や修験道の教えと、修行体験での経験である。体験プログラムのなかで行った水垢離（滝行）は、予想に反してだいぶ辛いものだった。行く前は、水が冷たく痛かったとしても心を落ち着けて無心になれば耐えることができると思っていたが、その想定は完全に間違っていた。私自身が痩身で寒さに弱いということもあるのかもしれないが、芯から冷えるような水の冷たさに一気に体温を奪われ、震えが止まらなかった。震えが止まらなければ、手を合わせて心を落ち着けることは難しく、まして無心になることなど到底無理だった。「無心になれば冷たさなど感じない」という想定はまったく見当

外れで、実際は寒すぎて無心になることができず、ただただ冷たさに苦しみ続けるという状態だった。そのときに痛感したのは、心身を鍛えていない状態で心持ちでどうにかできると考えることは間違っているということだ。山伏の山岳信仰とは、単に祈ることでも、独特の生命観を持つことでもなく、文字通り山で修行を行うことで自己を鍛え、作り替えていくことなのだとそこでようやく理解できた。修行（経験）なき信仰は単なる神秘主義や観念論と変わらないのである。

滝行から学んだのは、肉体をまず制御できなければ、心を保つことや祈ることなど到底できないことと、だからこそ修行が重要になるのだということだった。「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という箴言があるが、この言葉の意味するところを初めて理解できた気がした。

そのことに近いことを即身仏からも学ぶことができた。即身仏とミイラの違いについて注連寺の方にお話を伺う中で気付いたのは、即身仏とは徹底した自己管理の末の到達なのだという事だった。

自己を即身仏へと変化させるために、一世行人は木食を行い漆を飲む。それは自身の身体中の脂肪を極限まで減らすことで腐敗を防ぐための方法であり、まさに身体という自然を律し、自然としての身体を生きなおそうとするような行為だと言える。「私」という自己意識の自由にならない、野生の存在としての身体を、修業によって自分のものとするような已有化がそこでは行われている。山伏修行とは、このような已有化のためのプロセスなのではないだろうか。身体という自然を律するために、より大きな自然の流れの中に身を置き、馴染ませていくことで、自らを自然に合わせて作り替えているのではないだろうか。

身体は単なる座ではなく、自然や土地というさらに大きな座に包み込まれた小さな器のようなものだった。人間の思考や言語は、連続的に広がる外界を切り分け、理解しやすい形・扱いやすい形に加工してしまう。そのことは決して悪いことではない。人間が人間として生きていくために避けられない業のようなものである。しかし、自身の身体までは加工することはできない。自然としての身体と共に生きていくことは避けられない。また、その身体が根差している土地の問題も忘れてはいけない。私たちの食べ物も、大半は土地に育まれるものである。必要なのは、自分の内側と外側にある自然を忘れないことと、自然を扱うためにはある程度の作法が必要であり、心持ちだけでどうにかなるというものでもないということを肝に銘じておくことだ。山伏の修行体験を通じて痛感したのはまさにそのことだった。

「即身仏」になりたい

法学部（政治）2年 松本 靖代

私はこの夏20歳になった。20年間も生きてきた、生かされてきたのである。私は、事前課題の中で、「自分」とは「生かされている」存在であるとした。「自分」という「生命」は「自分」一人では存在しえず、常に他者に支えられているからだ。そして、「生きる」ということが、与えられた「生命」を享受することであるとするならば、私は、自分だけのために「生きる」ことはあってはいけなさと考える。人間誰しも他者に支えられて生きているのだから、「生きる」という行為も、他者に「還元」できる何かがなくてはいけないと思うのである。この答えが唯一の回答だとは毛頭思っていないが、根本的な考えは、庄内セミナーを経た今も変わっていない。

私は、小学校から高校までの12年間を、カトリックの一貫校で過ごしてきた。信者ではないが、人生の大半を過ごした学園で授かったキリスト教の教えは、私の生きる指針となっている。宗教という根本の基盤を共有していた仲間同士ではあったが、「いのち」について考え語り合う機会も、比較的多かった。だから「生命」というテーマは、ある程度決着がついていたと言っては言いすぎだが、このセミナーに参加する以前から、一定の意味を持つものとして私の心の中にあった。特に昨年は、大学の先輩の「死」、母校の友人の家族の「死」に直面し、「死」を肌で感じ、いつ自分の身に振ってくるかわからない「死」というものを意識し、いかに「生きる」べきかということを考えさせられる年であった。

したがって、今回のセミナーでの分かち合いは、新しい視点の獲得という点において、非常に有意義であった。多くの、時には大人の方も、今まで私が考えたこともないような観点から考えを述べてくださったり、私が知らない分野からの見方を提供してくださったりした。今までの私の知識や考えは、実はとても偏ったものだったということを感じた。同時に私は、彼ら彼女らとの対話を通して、「生命」というテーマの奥深さを感じた。

初日の夜、八朔祭の見学に行くバスの中で、私は隣に座った友達と、直前の事前課題に関するグループディスカッションについて話した。彼女は宗教という点で中立的な立場で、話していてとても新鮮だったし、勉強になった。「私は、『死』をある意味でポジティブに捉えている。死んだら全部終わり、今の苦しみも終わる。だから辛い時は死にたい。ただ死ぬ勇気がないだけ。」彼女はこのようなことを言っていた。私にとって「死」は、「終わり」ではなく新たな「永遠のいのち」の始まりなので、私は、彼女の言う「死んだら全部終わり」という感覚は初め全然理解できなかった。彼女曰く、「終わり」とは「ふうっ、って全てがなくなっちゃう」ことだそう。一方彼女も、私の考えはなかなか受け入れられなかったようで、なぜ苦しいからといって死んではいけないのか、「死」が「終わり」でないなら死後の世界とは何なのか、など様々な方向に話が進んだ。私は「死」は「終わり」ではなく「永遠のいのち」への始まりだとずっと思ってきた。しかし、そのことに根拠などなかった。ただ、そう信じて疑わなかっただけなのだ。バスに揺られて話し続けるうちに、最終的に、私は、納得するとまではいかないが、彼女が語る「終わり」としての「死」という考えも、全くもって理解できないわけではなくなってきた。彼女も、私の考えを多数ある意見のうちの一つとして心に留めてくれた。人それぞれ、色々な「生命」「死」に対する思いがあるのだ、ということ強く感じ、「生命」というものに決定的な定義づけなど存在しない、ということ再認識した。考えてみれば当たり前のことかもしれないが、定義付けが存在しないということ、すなわち分からないから考えても意味のないこと、ではない。こうして考え、語り合うことは、「生命」を豊かにしてくれると思う。

また、即身仏については、他者への「還元」という私が考える「生命」の享受のしかた、そして終え方つまり「死」と重なるころがあった。即身仏になると決めるには、大きな勇気がある。一人極限状態で祈りをささげ、自らを取り巻く他者に祈りの結実を「還元」したいと願う。ここに、私はキリストを見た。神の子としてこの世に人間として生を受けながら、人間すべての罪のために十字架にはりつけられたキリストと、原理は同じではないかと思った。しかし、講義を聞くうちに同じではないと感じるようになった。即身仏になったのは、山内、僧侶、一世行人という三階層のうち、最も下の一世行人だけだという。社会的に追い詰められ俗世を捨てた身だそうである。彼らは、純粋に地上の救済という大義名分だけで即身仏になったのではない。もしそうなら、山内が即身仏になった例があってもいいはずだからだ。他者のために自分を犠牲にしたキリストと、煩惱から逃れえなかった即身仏は、明らかに異なっている。即身仏の方が、人間味がある。

私は日々キリストに倣って、他者のために生きたいと願っているが、程遠い。しかし、キリストのように生きることではなくても、即身仏になった一世行人のように生きることならできるのではないか。自分を全て捨てて生きることではなくても、他者のためにだけ生きることはできなくても、自分

の「生命」が少しでも他者のためになるのであれば、それで立派な「還元」である。そのような意味で、私は即身仏になりたいと思うのである。

この庄内セミナーを通して、私は、自分の「生命」観を見つめなおすことができ、「生かされている」「自分」の「生命」の「還元」のしかたを見つけることができた。20年も「生

かされて」きたが、まだまだこれから「還元」できることがたくさんありそうである。次の20年経った時が、楽しみだ。

最後になりましたが、この庄内セミナーは、本当にたくさんの方々のお支えがあってこそものだったと思います。この場をお借りして、支えてくださったすべての方々に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

死について考える

経済学部2年 名生 健人

今回庄内セミナーに参加して生命について多くのことを学び、考え、議論したが、先に進めば進むほど生命というもののもつ果てしない可能性に圧倒されるばかりであった。生命に対する思想や哲学は時代や場所によって多種多様であり、わたしたちの大多数は21世紀日本のそれしか知らない。個人的な意見では、時代を通じて現代の日本の生命観や死生観ほどお粗末なものはないと思う。今の日本からは科学と経済に対するあきらめのようなものしか感じられない。その中で、4日の間元来日本が育ててきた自然信仰や仏教精神に触れることができたことは参加した全員にとって良い刺激になったと思う。もちろん、私にとってもとても良い刺激になった。私がセミナーの最中、そして終わった後も考えていたことは、死についてである。生命にとって死とはどういった存在なのかは別として、その二つは決して切り離すことはできない。私はなぜか、生命について考えなければならないとき死について考えていた。死を深く学べば生命のことも自然と知ることができるという気がしたのである。今回は、死について私が今まで考えてきたことをまとめてみたい。

人の人生の中で何が起こるか言い当てることはできないが、唯一絶対的なものが生命の誕生と死という二つのイベントである。生命の誕生という事象はとても不思議なもので、私たちは全員それを身を以て経験しているはずであるのに、一向に注意を払ったことがない。生命の誕生は、もしかしたら当の本人には関係のないものなのかもしれない。生命が誕生する準備もその瞬間の祝福もすべて他人任せである。このようにみると、私たちの生は他人の手によって自分が知らないうちに始まっているようである。逆に、死ぬときはどうだろう。死の瞬間、人は孤独になる。死に直面するとき、人はたった一人で、それまでの様々なことが無に帰すのを感じなければならないのだ。生まれるときにはたくさんの人に迎えられ、世界が自分の中に入ってくるが、逆に死ぬときにはその世界を一人きりで離れなければならない。人は誰しも死に恐怖を抱くものであるが、その恐怖の大部分は今書いたようなことが原因ではないだろうか。死の恐怖とは、世界を離れなければならない恐怖なのである。

私たちの日常生活の上では、普通生命や死のことは考える余裕がない。社会生活を営む中で、生死について考えることは害である。その種の問題は問い自体が大きすぎるため、その問いが私たちの普段抱いている考えを破壊しかねないからだ。しかし、人は皆いつか死に直面しなければならない。これは、夏休みの宿題を先送りにしているような感覚に似ていると思う。いつかやらねばならぬけど、ずるずる後に伸ばし

てしまう。そしてその問題自体が途方もなく難しくて気が狂いそうになる。宗教が死に対する逃げ道などというつもりはないが、人類が宗教を作り上げてきた意義の一つはそこにあると思う。

私自身はというと、もちろん死に対する解答など見つけられるはずはない。そのようなことを考えつめているうちに会ったのが、あの有名な一句である。「武士道といふは、死ぬことと見つけたり」。武士道とはその名の通り武士が生きるべき道を説いた精神論であるが、この句が武士道を世界的に有名にしたのであろう。武士道自体は支配階級としての規範や封建主義の理念といった観念も盛り込んでいるため社会構造が異なる現代では馴染みのない部分も多い。しかし武士道の死生観は時代、場所を選ばず多くの人が価値を見出す思想である。その一文の意味は、実に単純明快である。人は死を意識し、死ぬことを覚悟することで本当に生きることができる。死を見つめることは、生の実感と同じことなのである。死に対する恐怖を克服する努力をし、死に向かって歩き出すことで無限のエネルギーを得ることができる。自分の生命を燃焼させて生きること、ただ生きるよりも良く生きることができるのだ。ラテン語にも「memento mori」という言葉がある。「死ぬことを忘れるな」という意味であり、その言葉の捉え方自体は歴史を通じて変化しているが、死を意識して生きることの重要性を示している。

死の前では、どんな人間も無力である。生は死によって終わる。しかし、死を生に組み込むこともできる。死は、生命にとって最大の武器となることができるのだ。死を以て生きることでは人は最大限の力を発揮することができる。ただ、死を生に組み込むことでは何の解決にもならないという意見もあるだろう。得体のしれない死がやってくるのを待っている状態に変わりはないと。私は、それは大した問題ではないと思う。デカルトが提示した哲学史上最大の難問に、「主観と客観は一致することができるか」という問いがある。つまり、自分が見ている世界は他人が見ている世界と本当に同じなのか、ということだ。今の段階ではその問いに答えることはどんな方法をもってしてもできない。SFのような話だが、この世界はコンピューターによって支配されている仮想現実であるという可能性も絶対に否定はできないのだ。今自分が本当に生きているかどうか答えることができない以上、すべての事象に意味などない。武士道のように死をエネルギーに変えたとしても特に支障はないはずだ。本当に死ぬときが訪れたとしたら、それこそ次なる冒険の始まりではないだろうか。

生命観を考える ～庄内セミナーの参加によって得られたもの～

社会人 山形 英幸

第3回庄内セミナーへの参加は、生命と死について様々な学びや気づきを得ることができた素晴らしい機会であった。私が考えたことを整理して以下に述べたい。

(1) 庄内セミナーに参加しようとした私の生命観

社会人の私が今回のセミナーに参加しようと思った動機について説明したい。私は仕事や家庭などの日常で手一杯の日々の中で、厚く信仰を持つ対象もなく、そもそも生命について深く考えることはほとんどない。親族や知人など身近な人の葬儀に参列した際に、「死」を身近に感じ、その人の一生を考えることで、自分は今後どう生きるべきなのかを少しの間考える程度である。

私は今年、福澤諭吉記念文明塾に塾生として参加した。そのプログラムの中で、「なぜ死を覚悟した生き方について考える必要があるのか、なぜ一瞬を大切に生きていく必要があるのか」がテーマとなった田坂広志さんのセッションがあった。その場では、「人間は誰もいつ死ぬか分からない。自分の使命を考え（命を使って）、全力で一期一会の人生を生きろ」という強烈なメッセージが発せられた。

それ以来、時間を無駄にできないことを認識するとともに、生きることと、死ぬこととは何なのかを自分の中で明らかにしたいという欲求が高まっていたところであり、生命観、特に生命が尽きるときである死について考える機会を求めているのである。

セミナーに参加するにあたっての私の生命観は、「死を意識しながら今をいかに生きるべきか」を考えることであって、このセミナーで、「死」と何なのかを中心に考える機会を得たいというものであった。

(2) 庄内セミナーのプログラムで得られたもの

加藤元一郎先生のセッションでは、身体について学んだ。即身仏になる木食行、土中入定の過程のお話も興味深く拝聴した。即身仏になるのは、身分が高くない一世行人といわれる人たちであったことに驚きを覚えた。悟りを開きながら永遠の生命を得るためのプロセスに、自らの覚悟と身体を使って挑む。その途中での、神経性食欲不振症や感覚遮断といった精神状態などのご解説は自分が知らない視点であり、死の世界の入口を想像させるものであった。

注連寺の住職のお話の中では、信仰について学んだ。「祖先は過去の人ではなく、自分が未来に会う人」、「本物の信仰は時代を超えて長く続くもの」という意味のフレーズが頭に残る。確かにそう考えれば、素直に仏壇に手を合わせる事が

できる。ガラス1枚の向こうにいたあの即身仏の迫力のある姿を通じて、信仰というものの奥行きを感じた瞬間だった。

酒井忠久先生と東山昭子先生からは、庄内地方の歴史や文化の素晴らしさについて学んだ。酒田を訪れてから鶴岡に入った私は、商都の酒田と政治の鶴岡という異質な2つの町が庄内に存在するとただ平面的に捉えていたが、「義民が駆ける」の三方お国替えと印旛沼普請、松ヶ岡開墾場のお話を通じて、庄内人としての一体感の気質を感じた。幕府や明治政府からの圧力を受けたにもかかわらず、「私事ではなく、天下の仕事」という酒井先生のお言葉から、庄内の人たちの潔く、また粘り強い生き様を感じた。

東山先生は「おぼんです」と和やかにはじめられ、庄内の文化について教えていただいた。羽黒山の現世利益、月山の死、湯殿山の再生という出羽三山の輪廻思想を背景に、庄内は自然崇拝が強く、自然に生かされているという畏敬の念があること、「関わりなく、己は己」という庄内人の生きる姿勢のご説明が印象に残った。東山ワールドは、先生がお持ちいただいた「だだちゃ豆」の味の如く、なかなか味わいのある時間であった。

修験道体験の1日は入門編ではあったが、滝行など厳しい修行を、身体を通じて実践することで、自分自身が再生し、心身が鍛えられること、先達の凛とした佇まいを感じた。

慶大先端生命研ラボの見学では、サイエンスで生命の謎を解明する研究の世界の重要性を感じた。たくさんの成果が生まれ、人間の健康や医学の進歩に貢献することに期待したいと思うとともに、生命科学も、生命観を考える上で、重要な部分であることを認識した。

(3) セミナーを通じて深まった私の生命観

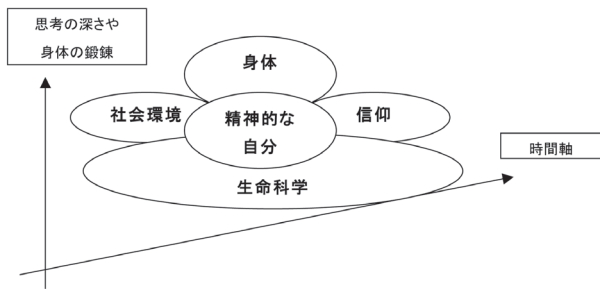
セミナーで私の印象に残ったことをキーワードで整理すれば、「身体」、「信仰」、「生命科学」である。生命観を構成するものを加えるとすれば、日々物事の判断や思考をしている「精神的な自分」や、他人を含む外の世界との関係である「社会環境」であろうか。精神的な自分は、身体を統制している身体以外の自分である。また、社会環境とは、自分と社会との関係や自分の周辺の世界であり、住む土地の歴史や文化も含むものである。庄内地方の独自の文化や多くの即身仏の存在は、その土地の風土が生命観に大きく関係していることを認識させてくれる。

それらを要素とした相互の関係性について自分の精神を中心に考えてみると、自分の判断を通じて動かす身体があり、自分には信仰や社会環境が影響して判断の価値基準を定めて

いる。生命科学はある意味すべてのベースとなって客観的な世界から生命を支えているのであろう。

困難を承知で、それらの関係性を簡単に図示すれば、次のとおりである。縦軸とした思考の深さや身体への鍛錬には程度があり、また、横軸とした時間軸は、過去から未来に向かってその程度の深化や変化を意識したものである。

〈私の生命観を構成する要素の関係〉



(4) 最後に

庄内で生命観を考えることは、私にとって大変贅沢な時間であった。庄内の印象深い方々、鶴岡市の方々、先生、事務局、セミナー参加者の方に対して感謝を申し上げたい。

セミナーのプログラムはどれも貴重なお話しであった。また、私は年齢が学生さんの倍以上ある社会人であったが、グループメンバーとの対話と議論、同室のメンバーとの意見交換など新鮮な考えや発想を聞き、新たな視点を得ることができた有意義な時間でもあった。

生命観は考えるほど無限に広がるようなもので、せいぜい頭の中を少し整理したに過ぎないかもしれない。しかし、今回のセミナーを契機に、4日間立ち止まってじっくり生命と死について自分なりに考えることで、今を一生懸命に生きることにプラスになったのではないかと考える。また、今後も死ぬまで考えないといけない。東山先生がお話になられていたが、「死んだらおしまいではない、生命はつながっていくもの」なのだから。

2012 年度「庄内セミナー」報告書

資料編

1. 参加者構成

No.	所属	学年	氏名	No.	所属	学年	氏名
1	経済学部	1	青木佳祐	25	社会人：金融機関勤務		高田裕久
2	経済学部	2	青柳逸子	26	法学部（政治）	2	多賀千智
3	法学部（法律）	2	石川 龍	27	経済学部	3	塚田卓満
4	文学部	1	伊丹友里恵	28	文学部	1	富田 圭
5	経済学部	2	伊藤広樹	29	社会人：団体職員		中島雄一
6	文学部	2	伊原貴義	30	文学部	3	中村香住
7	商学部	3	岩崎貴大	31	理工学研究科	2	萩田達哉
8	文学部	4	印南まどか	32	経済学部	4	長谷川弘一
9	経済学部	1	大野雄一郎	33	法学部（政治）	3	藤川 淳
10	法学部（法律）	2	小川健吾	34	理工学部	1	藤田裕介
11	経済学部	4	小倉良和	35	文学部	1	伏田めぐみ
12	法学部（政治）	2	加登聡介	36	経済学研究科	2	松下知広
13	法学部（法律）	1	亀岡優輔	37	文学部	3	松本友也
14	理工学部	2	川野瑞季	38	法学部（政治）	2	松本靖代
15	文学部	4	工藤春香	39	文学部	4	三間紗弓
16	社会人：パフォーマー		首くくり栲象	40	経済学部	2	名生健人
17	理工学研究科	2	輿石治樹	41	社会人：地方公務員		山形英幸
18	法学部（政治）	2	児玉早織	42	スタッフ： 應義塾大学経済学部教授		羽田 功
19	経済学部	1	児玉隼平	43	スタッフ： 應義塾大学経済学部教授		不破有理
20	法学部（法律）	2	近藤啓太	44	スタッフ： 應義塾大学商学部准教授		高橋幸吉
21	文学部	1	坂牛 怜	45	スタッフ： 應義塾大学理工学部助教		井本由紀
22	法学部（政治）	2	菅沼 諒	46	スタッフ： 慶應義塾大学出版会		小磯勝人
23	理工学部	1	杉尾和輝	47	スタッフ： 慶應義塾大学教養研究センター		日水邦昭
24	法学部（法律）	1	千住貞保				

2. アンケート結果

- ・実施日：2012年9月3日（月）（セミナー最終日）
- ・回答数：41（ただし、項目によって複数選択・複数回答・未回答あり）

〈項目別結果〉

1. 今回のセミナーについてはどのようにして知りましたか？

ポスター：19

Web サイト：2

チラシ：3

教員から：16

友人から：6

その他：0（複数選択あり）

2. 今回のセミナーについて、以下の項目に沿ってご意見を聞かせください。

1) テーマについて：「庄内に学ぶ生命—いま敢えて生と死を考える」

難しかった：15

適当だった：29

やさしすぎた：1（全て選択1、二つ選択2を含む）

[主な意見（自由記入）]

- ・答えがない問題という意味では難しいですが、多面からのアプローチをかけられる庄内の地で考える意義のあるテーマだったと思います。（文学部）
- ・難しい問題でしたが、普段は何気なく通り過ぎてしまっているのが、今回改めて考えることができました。（経済学部）
- ・行きづまることもあったが、20歳を迎えた今、真剣に考えるのにふさわしいテーマだった。（法学部政治学科）
- ・日常生活において抽象的なものを考えてこなかったため、初めのうちは難しかったです。しかし、この体験を求めているので非常に有意義でした。（理工学研究科）
- ・このテーマを座学のみでなく、フィールド・セミナーとして企画された着眼に敬意を表します。（社会人）
- ・一般には難しいテーマですが、正面から取り上げられた骨太のテーマでとても有意義でした。（社会人）

2) 時期について（8月31日～9月3日）

適当：37

他の時期にすべき：4

[主な意見（自由記入）]

- ・山伏体験も含め、この時期が適当だと思う。（文学部）
- ・お盆明けの時期でも良いかなと思った。（経済学部）
- ・夏休みの間なので、セミナーで得たことをじっくりと考え直すことができるのは良いと思った。（法学部法律学科）
- ・社会人にとって比較的参加しやすい日程（旧盆よりも自由がきく）。（社会人）
- ・土日が含まれており、会社の夏季休暇も活用できるので現在の時期・日程が良い。（社会人）

3) スケジュールについて

もう少し余裕がほしい：6

適当：31

もう少し内容を盛り込んでもよい：2

（無回答：1）

[主な意見（自由記入）]

- ・山伏体験を長くとっても良かったかもしれない。（経済学部）
- ・もう一週間欲しかった。また生命を体感するプログラムがもう一つ欲しかった。（経済学部）
- ・バスの移動時間や適度な休息時間で頭の整理や交流ができたので、とても良かったです。（経済学部）
- ・体験、講演と様々な角度から学べる事が出来て良かったです。（経済学部）
- ・少し体力的に厳しいくらいで良かったと思う。（法学部法律学科）
- ・毎日密な経験を積むことができた。（法学部法律学科）
- ・もう一日交流があっても良い（ワガママ）。（社会人）
- ・先端生命科学研究所の所内は雑草が生い茂っています。四十数名、2時間ほど、草むしりでレクリエーションなどと思ったりもします。（社会人）

4) セッションについて

☆9月1日「生と死を考える」（講師：加藤元一郎氏）

とても良かった：23

良かった：18

普通：0

良くなかった：0

[主な意見（自由記入）]

- ・医学の見地からの死生観はとても現実味があり新鮮でした。（経済学部）
- ・昔ながらのものを精神医学の最先端からひも解くことで別の視座が与えられたことが有益であった。（法学部政治学科）
- ・身と心と情動に関してわかりやすくお話していただけて非常に勉強になりました。（経済学研究科）
- ・生命を考える上で医学は必須であり、学ぶことが多くありました。（社会人）

☆9月3日「庄内文化論1（庄内の歴史と生命）」（講師：酒井忠久氏）

とても良かった：14

良かった：18

普通：8

良くなかった：1（聞く方の集中力不足とのこと）

[主な意見（自由記入）]

- ・歴史的見地から庄内の武士の気風などを知ることができた。（文学部）
- ・庄内に根づく思想・風土をより深く知ることができました。藩校・致道館の教育水準の高さに驚かされました。（経済学部）

- ・もともと武士道や藩校について会津で学んでいたので比較し、とても楽しく聞けた。(法学部政治学科)
- ・庄内藩の歴史・文化そして領民の生き方について当事者の目線で話を伺えたので本当に良かったです。(理工学部)

☆9月3日「庄内文化論 2 (遠藤虚籟と生命)」(講師：東山昭子氏)

とても良かった：21

良かった：15

普通：5

良くなかった：0

[主な意見 (自由記入)]

- ・社会の中の人間について、また平和についてとても深く感じさせられるものがありました。(経済学部)
- ・特に最初に朗読していただいた詩が心に響きました。「心」のあたたかい部分、科学や合理性で説明できない部分を大事にしていまして、そこが自分と似ていたもので、とても共感できました。(文学部)
- ・綴錦織の大作を実物で見る機会がもてて良かったです。また、遠藤虚籟氏の考える生命観(はかない命、命のつながり)の裏側が知れたことで生に対する新たな見方ができた。(理工学部)
- ・生活に根ざした強い力を感じた。(社会人)

5) 羽黒山「八朔祭」(羽黒修験「秋の峰入」の柴灯護摩)について

とても良かった：17

良かった：16

普通：5

あまり良くなかった：2

(無回答：1)

[主な意見 (自由記入)]

- ・幻想的な雰囲気味わえた。(文学部)
- ・ホラ貝のリズム、火の燃える音(焚き木のはじける音)が印象的でした。山伏のとぎすまされた感覚を感じました。(文学部)
- ・山伏というものに関して余りに無知だったために詳しいことが分からなかったが、持っている重大な意味や迫力が伝わり、修験を真剣にやろうと思えた。(法学部政治学科)
- ・祭の背景や意義について事前の説明がほしかった／事前に勉強しておけばよかった。(複数回答)

6) 修験体験について

とても良かった：28

良かった：9

普通：3

あまり良くなかった：0

(無回答：1)

[主な意見 (自由記入)]

- ・無心で無言で山を歩くと、自然が自分の外側ではなく、

つながりの上にあると感じられました。(文学部)

- ・まさに未知との遭遇の連続で「自然と密接に結びついた修験道」を体感できて本当に良かった。(経済学部)
- ・本では分からない、感覚から得られるものが多かったです。(経済学部)
- ・白装束を実際に着て活動体験し、理解に実感が加わってとても印象深いものになった。(法学部政治学科)
- ・見たり聞いたりするだけでなく、自分の身体で体験することの重要性を感じた。(法学部政治学科)
- ・一生に一度の経験だったと思います。苦しくて辛かったけど最後までできて良かったです。(法学部政治学科)
- ・写真を見ればわかるように、多くの人がナメてかかっていたはずなので、あの厳しさ(それもまた序の口)を身をもって体感できたのは非常に良かった。体・頭・心の問題を肌で感じられた。(商学部)
- ・滝行と南蛮いぶしは、自分の体で感じないと絶対に分からないものだと思います。貴重な体験をできたことを嬉しく思います。(経済学研究科)
- ・今生きていることは、決して当たり前のことではないと思いました。(理工学研究科)
- ・素晴らしい体験(特に身体を使う)としか言いようがありません。(社会人)

7) グループワークについて (自由記入)

- ・適当な人数(6~7名)だった。(複数回答)
- ・一つのグループでまとまった議論をするのに丁度よかったと思っています。学年もバラバラでいろんな視点を共有できて、初日にグループワークをしてスイッチが入ったのも良かった。(商学部)
- ・一人の社会人を中心に良い感じにまとまり、機能したと思った。(法学部法律学科)
- ・途中でグループ替えがあっても良かったかなと思った。(複数回答)
- ・宿舎で全員と交流できたので、グループワークのチームは固定で良いと思います。(経済学部)
- ・発表は時間を明確に区切っても良かったかもしれないと感じた。(法学部政治学科)
- ・グループの大きさはもう少し小さくても良いと思った。(法学部政治学科)
- ・もう少し議論の時間があっても良かったかなと感じた。(経済学部)
- ・グループ同士の議論があったら良いと思いました。(理工学部)

3. 宿泊施設について

良かった：36

普通：5

良くなかった：0

4. 現地までの交通手段をお知らせください

JR：30

バス(夜行)：12

空路：0

自家用車：0

その他：0（複数選択あり）

5. 交通費について

1) 交通費（往復）はおおよそどれくらいですか？

・参加者の平均交通費 19,000 円

6. 参加費用（参加費＋平均交通費＝[学生] 20,000 円／[社会人] 30,000 円）について

安い：25

適当：10

高い：4

（無回答：2）

7. 本セミナーで取り上げてほしいテーマがあったらお書きください

人生について（複数回答）／自然や農業／身体知／性と生／庄内文化論（特に宗教面）／医学的視点から考える「生命（＝人間の命）」（生命倫理の問題など）／科学の発展に伴う道徳的問題／致道館（荻生徂徠）と庄内の土風／鶴岡以外の庄内地方（酒田、遊佐、松山など）／庄内の農民の生活と文化／宗教について／先端生命科学研究（遺伝子関連事業）／西洋哲学・思想／庄内の自然の影響（食・アニミズム・文化・庄内人の気性など）／武士道／俳句／土地と教育・学問／自分と他者／（その他：山伏修行をもっと長く／今のテーマを深めてほしい）

8. その他、庄内セミナーに関して自由に意見を述べてください

[主な意見]

- ・何か地元の役に立ちたいと考えるようになったタイミングでこのセミナーに出会い、とても嬉しい。こんなにも庄内という地はいい所があるのかということを確認できたし、改めて地元の役に立ちたいという気持ちが強くなったと思う。（文学部）
- ・学年の違う人、社会人の方とこんなにも深い話が出来、本当に良かったです。（文学部）
- ・いろいろ勉強になることがありました。一度死んで生まれ変わるセミナーは初めてです。（文学部）
- ・その土地の環境と自分が関わりあうことで、庄内という土地が自分の中にはっきりと存在するようになりました。生命を考える上で様々なアプローチができる庄内に実際に身を置くことができ、非常に良い経験となりました。そう思うと、庄内に限らず、様々な他の土地や環境と関わりあわなければならないな、と感じます。（文学部）
- ・4日間の全てを通じて参加者の得るもの、感じるものに明確なゴールを感じました。最終日になって改めて頭を整理してみて、ひとつひとつの学びが上手く融合していくように感じます。（経済学部）
- ・4日間、本当にあっという間で、毎日がとても楽しく充実していました。特に修験道体験は滝から始まり燦々に

終わり、達成感がありました。また、地元の方々のお話を聞くことが出来、視野が広がったように思いました。（経済学部）

- ・社会人、教授といった普段比較的に遠いところにいるような方々と同じ宿に泊まり、同じ目線で一緒に考え、話合う機会というのは私にとってすごく新鮮な経験でした。また、各先生方の講義内容も教科書の押し付けとは全く異なり、先生自身の価値観の提示という形式で聞けたのもすごく良かったです。（経済学部）
- ・山形に初めて来て、特徴的な地方を見ることができ、地方の良さというものが経験できました。他の地方を見るのも楽しみになりました。（経済学部）
- ・密度の高い内容で、非常に濃い対話ができる良い機会でした（…）普段東京の生活、授業では体験できない学習ができ、非常に有意義な時間をすごせました。ご支援いただいた鶴岡、山形の皆さまと先生方への感謝の気持ちでいっぱいです。（法学部政治学科）
- ・本当にこの庄内セミナーでは多くの刺激、知見を提供してもらえました。各セッション全てに良さがありましたが、何よりも自分として良かったのは、参加者全員が一期一会を大切に、他者を受け入れる状態にあるため、普段では減多にできない交流を数多くすることができて（…）色々な意見を聞ける環境にあったことです。また、参加者、先生方、それぞれ興味深いバックグラウンドを持っていておもしろかった。（経済学部）
- ・参加して本当に良かったと思っている（…）いろんな意見や考えを持った人と一緒に、今まで考えたことなかった様々なテーマを真剣に議論することができた四日間は非常に有意義でした。（法学部法律学科）
- ・このセミナーを通して（…）心で体でこの土地の文化を知りました。おそらく二度とない体験がたくさん出来たと思います（…）生きるとは、死ぬとはどういうことなのか。自分と他の命のつながりとはどういうものなのか。このセミナーで得た知識、見聞をもとに、ずっと考えていきたいと思っています。（法学部政治学科）
- ・様々な出会いがありました。人、自然、生き方、考えなど、大学では感じることにしにくいことをすることができていい経験になりました。庄内で培った庄内の雰囲気や東京でも何とか形として残せればと思います。（法学部政治学科）
- ・年齢、職業、学部の異なる人々と話してみても、普段の生活での「均質的な」会話と余りにも感覚が違って驚いた。自分では発想できないことが次々と耳に入ってくる感覚は学部生としてキャンパスに通う生活ではまずありえないと思う。だからこそ今後の生活に活きると思うし、参加して本当に良かった。（法学部政治学科）
- ・即身仏を始めとして山伏体験など、本当に貴重な体験をありがとうございました。生命を感じることは本セミナーに参加しなければできなかったと思います。（経済学

研究科)

- ・改めて自分について考えるきっかけとなり、また他の参加者の意見をうかがい、自分の無力さを感じました。この体験を今後の人生に必ず活かしたいと思います。(理工学研究科)
- ・4日間でしたが、とても有意義でした。社会人の私はもちろん、学生時代に生命について考える機会があることはその後大いにプラスになると思いました。様々な角度で生命について考える大変ありがたい機会をいただきました。また、鶴岡市の全面的なご支援のおかげで庄内について理解できました。文化・歴史・自然が素晴らしい

場所です。(社会人)

9. 教養研究センターではイベントなどの情報を希望者に配信しています。希望される場合はE-mailアドレスをお知らせください。(E-mailアドレスはこの目的以外には使用いたしません)

(省略)

3. 広報資料（ポスターならびに広報紙）

教養研究センター主催 - 未来先導基金公募プログラム

第3回 庄内セミナー

庄内に学ぶ生命—いま敢えて生と死を考える

参加申込受付中です！6/25締切



【期間】 8月31日(金)～9月3日(月) 3泊4日
 【場所】 山形県鶴岡市(鶴岡タウンキャンパス他)
 【募集人数】 28名 ※応募理由等を考慮して選抜します。
 【募集対象】 学部学生・大学院生・社会人
 【参加費用】 1,000円(社会人10,000円)
 (現地までの往復交通費は自己負担)
 ☆現地集合・現地解散となります。
 【特典】 未来先導基金による「庄内セミナー奨学金」が支給されます。(宿泊費等に充当)
 詳細は教養研究センターのWebサイトで！
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

教養研究センター主催「庄内セミナー」関連企画

第3回 庄内フェア

教養研究センターが2008年より鶴岡セミナー、後に庄内セミナーとしてセミナーを開催している庄内地方を広く知っていただくためのフェアを開催します！

食す 11月5日(月)～11月10日(土)
 庄内米を使ったおにぎり、いも煮などを提供
 場所：食堂棟1F

知る 11月5日(月)～11月17日(土)
 「慶應義塾と庄内」
 庄内セミナー、庄内の慶應人脈、関連図書、先端生命科学研究所等の紹介
 場所：日吉メディアセンター

読む 11月5日(月)～11月16日(金)
 庄内関連図書を特集
 場所：生協購買部2F 書籍部

探す 11月5日(月)～11月10日(土)
 庄内ご当地グッズ、スナック類販売
 場所：生協購買部1F 購買部

協力 慶應義塾生活協同組合、日吉メディアセンター
 お問い合わせ 教養研究センター 045-566-1151 toiawase-lib@adst.keio.ac.jp
 庄内セミナーホームページ <http://keio-up.net/shseminar/>

庄内セミナー

庄内に学ぶ生命
—いま敢えて生と死を考える



即身仏拝観やミニ山伏体験、講義、議論と対話、交流などを通じて庄内地方の歴史や文化・自然を体感し、「生命」を巡る広範な「学び」について考えるセミナーです。

▶日 時 8月31日(金)～9月3日(月)(3泊4日)
 ▶会 場 慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス、いこいの村庄内(宿泊場所)ほか
 ▶対 象 大学生・大学院生、社会人28人
 (応募理由等によって選考)
 ▶講 師 加藤元一郎氏(慶應義塾大学医学部准教授)
 酒井忠久氏(致道博物館館長)
 東山昭子氏(鶴岡総合研究所研究顧問)
 ▶参加費 大学生・大学院生…1,000円
 社会人…10,000円(宿泊費不要)

▶申込み期限 7月18日(水)
 ▶申込み方法
 ①ホームページ 慶應義塾大学教養研究センターホームページ <http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>から申込み
 ②電子メール・ファクス 氏名・ふりがな・電子メールアドレス・電話番号・応募理由(400字程度)の他、大学生・大学院生は学校名・所属学部・学籍番号を、社会人は職業・年齢を、同センター ☎045-566-1151、FAX045-566-1102、✉toiawase-lib@adst.keio.ac.jpへ
 ▶問合せ 本所政策推進課 ☎内線544

庄内に学ぶ「生命」

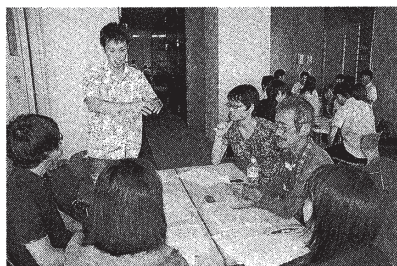
慶応大生ら
対象にセミナー
羽黒山修験など体験

慶応義塾大の学生など
が庄内地方をフィールド
に合宿形式で学ぶ「庄内
セミナー」が31日、鶴岡
市の同大鶴岡タウンキャ
ンパス（TTC）で開
講した。2年ぶり3回目
の開講で、今回は「庄内
に学ぶ生命」をテーマ
に、朝日地域での即身
仏拝観や羽黒山での修験

に続き3回目の開講。

今回は関東在住の同大
の14年生と同大OB
など社会人4人の計41人
がセミナーに参加。初日
の31日はTTCでイン
トラクションを兼ねた
屋内セッションが開か
れ、思考・発想法の一種
の「マインドマップ」を
作成した。同マップは
「生命」などのキーワー
ドを中心に、そこから連
想する単語やイメージを
放射状に広げつけてい
く。記憶の引き出しや思
考の整理、新たな発想な
どがしやすい、自己
理解や他者とのコミュニ
ケーションを促進する効
果もある。

参加者は4～6人ずつ
の7グループに分かれ
て「生命」など
をキーワード
に10分ほどか
けてマップを
作成。その後、自分のマ
ップを客観視しながら
「NGOなどで体験した
社会問題を連想し、単語
をつなげていく傾向にあ
る」「興味のない事象は
連想が伸びない」「病氣
や挫折など「自己」の体験を
ベースにした発想が多
いなど自己紹介した。
また、互いにマップを
見せ合いながら共通点や
思考の違い、生命へ対す
るイメージなどを討論す
るグループも見られた。



「庄内セミナー」が開講。
初日はマイン
ドマップを基
に学生たちが
コミュニケーションを
図った。

4. 掲載新聞記事

2012年9月2日	庄内日報	7面
-----------	------	----

2012年9月4日	山形新聞	13面
-----------	------	-----

滝行に挑戦する慶応大の学生たち＝庄内町



庄内の文化 体で納得 慶応大生セミナー

慶応大の学生が庄内地方の歴史と文化を学ぶ「庄内セミナー」が8月31日～9月3日までの日程で、鶴岡市を中心に開かれた。2日には学生たちが庄内町の立谷沢川で滝行に挑戦した。

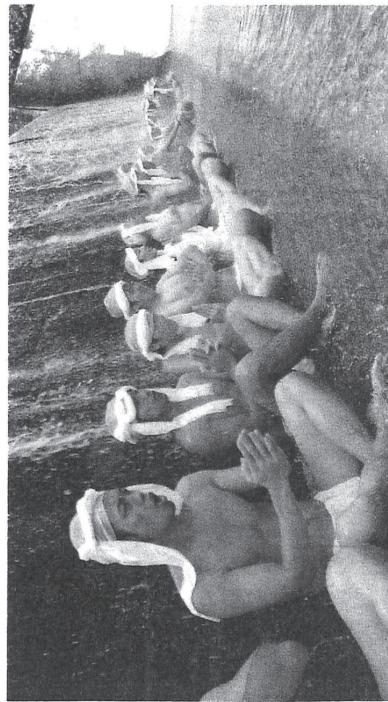
庄内の歴史や文化、自然に関する学習を通じて自分について考えるきっかけをつくり、教養力を身に付けてもらおうと企画。経済学部や理工学部など、県外の慶応大のキャンパスから学生ら約50人が参加した。この日は鶴岡市のいでは文化記念館で

出羽三山の山伏の在り方などについて学んだ後、同町の月の沢温泉近くの立谷沢川に移動した。

白装束に着替えた学生たちは沢に下りると、早速あぐらをかいて座り、滝行に取り組んだ。当初は頭上から降り注ぐ大量の水に「冷たい」「辛い」と声を上げていたが、しばらくすると静かに手を合わせ、約20分間、心身を鍛えた。文学部1年の坂牛怜さん(18)は「すごい音がして世界に自分1人だけのような感覚だった。不思議な体験ができた」と話していた。

「擬死再生」一端に触れる 慶大生らの二 滝行など山伏修行体験

慶應義塾大の学生らが庄内地方で合宿形式で取り組んでいる「庄内セミナー」は2日、三山伏修行体験を行った。白猿束に身を包みながら、庄内町瀬場の玉川での滝打ち



冷たい滝の水に打たれる慶應大の学生ら

などに挑戦、擬死再生に臨める「南蛮いり」などに挑戦した。同大教養研究センタが、鶴岡タラシキヤンパスがある庄内で「教養力」を養おうと開いている。2年ぶり3回目の今年は「庄内」に学ぶ生命「いま敢えて生と死を考える」がテーマで、首都圏に住む慶應大の学生37人とOBら社会人4人の計41人が参加。先月31日から今月3日まで3泊4日の日程で、鶴岡市の羽黒山山頂での八朔祭の昇学（31日）、同市中網の辻蓮寺と大日坊の即身仏の昇学（1日）など多彩な体験に取り組んでいる。

2日の山伏修行体験では、鶴岡市羽黒町手向のいでは文化記念館を拠点に、昼食抜きで滝行や山駆け、床固め（座禅）、トラガラシなどをいぶし煙の中

に居続ける「南蛮いり」などに挑戦した。学生らはほろに同じ記録で、白に襦袢と袴に草履を巻き、山伏姿になった。山伏修行体験塾の太田一塾長の講話で「『修業』は生きるための業を得るもの、『修行』は自分のため、世のため人のためにやるもの。死に業束である白猿束に身を包み、母親の胎内である山に入り、生まれ変わって出てくる」など修行の意義を聞いた。

その後、バスで瀬場に移動し、男性は下帯一枚、女性は水着の上に着た。男性は下帯一枚、女性の水着の上に着た。男性は下帯一枚、女性の水着の上に着た。男性は下帯一枚、女性の水着の上に着た。

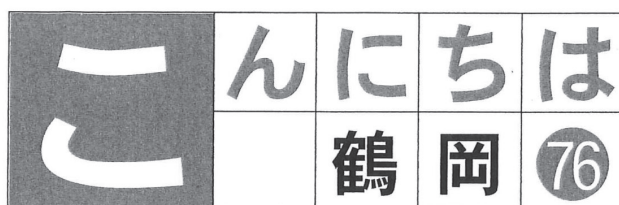
立学部3年の松本友也さん（20）は「神奈川県鎌倉市」は「無心になろうとしたが、冷たい水に打たれるのは、水圧の強さではが震え、なかなか難しかった」と感嘆。セミナー全体的には「寛政は宗教心を感ずることはいいが、特に即身仏は生きたまま土中にいつく身まぎはるという壮絶な衝撃を受けた。貴重な体験」と語った。

セミナー担当の羽田功経特学部長は「命について、おやと思っただけ、考えを深めたい様子がうかがえる。ちやうど、かげはなれば、等しい」と手厚さを語った。

2012年10月1日

広報つるおか No. 169

8面



鶴岡に初めて来たのは、慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパスが開設する前年の平成十二年です。市民の方と一緒にいろいろな所に足を運びましたが、自然が豊富で凛とした気品ある空気が漂っていて、とても気に入りました。この地には、祖霊が集まる月山、独立峰の鳥海山、豊富な水をたたえる庄内平野そして日本海と、恵み豊かな自然とそれに根ざした独特の生命観や自然観があり、それらが歴史や文化に凝縮されて、鶴岡らしさや庄内らしさが形づくられていると感じました。

慶應義塾大学教養研究センターの初代所長に就任し、様々な学部や学年の学生が教室だけでなく実地でも学ぶことができる、先端的な教養教育プログラムを開発してきましたが、鶴岡をフィールドに何かできないかと考えたのが、庄内（鶴



慶應義塾大学経済学部教授、同日吉メディアセンター所長・図書館長。
慶應義塾大学教養研究センター主催の鶴岡・庄内の歴史・文化資源を活用した教養教育プログラムとして、平成20年から行われている「庄内（鶴岡）セミナー」のプロジェクトリーダーとして来鶴。宮城県出身。

鶴岡・庄内は教養する絶好のフィールド 羽田 功さん

岡）セミナーのきっかけです。セミナーでは学生が鶴岡に来て、この地の歴史や文化とともに、そこに息づいている「生命」を、様々な角度から心と頭と体を使って感じ、学ぶことを目的としています。

三回目となる今年のセミナーには四十一人が参加し、三泊四日で山伏修行や伝統行事を体験したり、地元の方々の話を聞いたりしました。印象的なのは羽黒山での「滝打ち」です。学生たちは滝に打たれると、最初は大声を出しながら水と格闘します。しかし徐々に水となじみ、冷たさに慣れてくると、声が静まり滝の音しか聞こえない時間を皆で共有するようになります。僅か十分間ですが学生の顔つきが一人ひとり変わるんですね。このような都会では体験できない自分を再発見するきっかけになることが鶴岡・庄内にはたくさんあります。街の中にも自然の中にも、長い時間をかけて積み重ねてきた、しっかりと文化に出会うことができます。鶴岡・庄内は「学び」を体験する教材の宝庫だと思いました。

セミナーは来年・再来年の実施も計画していますが、次はどのような「学び」を体験しようか、今からとても楽しみです。そして、私たちの「学び」の試み、鶴岡・庄内の教養する

気持ちを忘れず

羽田 功

謝 辞 ―あとがきに代えて―

庄内セミナー・プロジェクトリーダー
羽田 功（経済学部教授）

第3回庄内セミナー開催にあたっては多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。とりわけ、庄内、鶴岡市のご理解とご協力がなければ庄内セミナーの開催は考えられません。あらためて心よりお礼を申し上げたいと思います。

現地鶴岡での合宿セミナーにあたっては、セッションの講師を務めていただいた加藤元一郎先生、酒井忠久先生、東山昭子先生、山伏体験のご指導をいただいた山伏体験塾の太田一塾長、早坂一広氏、最終日の懇親会にお忙しい中をご出席くださった鶴岡市副市長・山本益生氏をはじめ、2日目に歴史の息づく松が岡開墾場で美味しい昼食をご用意くださった酒井忠順氏（松岡物産株式会社社長）や「待カフェ」の皆さん、セミナー開催中に私たちのプログラムの多くに付き添っていただいた鶴岡市役所の五十嵐展氏ならびに鶴岡市役所の関係者の皆さま、山伏修行の実施にご協力くださった渡邊雅之氏（いでは文化記念館）、宿泊・食事・講演セッションの快適な環境作りにご尽力いただいた海沼俊人氏（いこいの村庄内・副支配人）とスタッフの皆さまに感謝申し上げます。

さらには、慶應義塾（日吉）でのセミナー関連企画にご協力くださった山形県庄内観光コンベンション協会、（株）庄交コーポレーション・庄内観光物産館ふるさと本舗、日吉メディア・センター（日吉図書館）、大学生協（日吉）の関係者の皆さまにもお礼を申し上げます。

最後になりますが、またいささか手前味噌ではありますが、今回のセミナーが多くの成果と共に無事に終了できた何よりの功績は、セミナーのさまざまな課題に真摯に取り組んでくれた41名の参加者の姿勢にあると思います。ただ参加するのではなく、自分たちの手でセミナーを作り上げてほしい、とのセミナー・スタッフの要望に全員がみごとに答えてくれました。

セミナー・スタッフも、庄内セミナーが新しい体験・体感型の「学び」の場としてより大きな力を発揮できるよう、これからもできるだけの努力を払っていくつもりでおりますので、これまで以上のご理解・ご協力を賜りますよう念じまして、皆様への謝辞にかえさせていただきます。ありがとうございました。

庄内セミナー協力団体・個人

【団体】（順不同）

鶴岡市

鶴岡市教育委員会

庄内観光コンベンション協会

庄内観光物産館 ふるさと本舗

鶴岡市いでは文化記念館

注連寺

大日坊

庄内日報

山形新聞

松岡物産株式会社

いこいの村庄内

慶應義塾生活協同組合

慶應義塾大学出版会

慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス

慶應義塾大学日吉メディアセンター

【個人】（順不同、敬称略）

加藤元一郎（慶應義塾大学医学部精神神経科）

酒井忠久（財団法人致道博物館 館長）

東山昭子（鶴岡総合研究所研究顧問）

太田 一（山伏修行体験塾）

早坂一広（山伏修行体験塾）

五十嵐展（鶴岡市企画部政策推進課 主事）

渡邊雅之（鶴岡市羽黒支所いでは文化記念館 主事）

大沼哲也（塾員）

慶應義塾大学教養研究センター

2012 年度「庄内セミナー」報告書

2012 年 11 月 15 日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター

代表者 不破有理

〒 223-8521 横浜市港北区日吉 4-1-1

TEL 045-563-1111（代表）

Email lib-arts@adst.keio.ac.jp

<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2012 Keio Research Center for the Liberal Arts

著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。